

# 環オホーツク海沿岸地域古代土器の研究

熊木 俊朗 著

## 目次

序章 環オホーツク海沿岸地域古代土器研究の課題.....	1
------------------------------	---

## 第 I 部 続縄文土器の編年

第 1 章 宇津内式土器の編年.....	11
----------------------	----

1. 本章の目的 11
2. 網走地域における縄文晩期末～続縄文初頭の土器群 12
3. 宇津内式成立直前期の土器群 17
4. 宇津内Ⅱa 式土器の編年 23
5. 宇津内Ⅱb 式土器の編年 35
6. 宇津内式土器と後北 C<sub>1</sub> 式土器の関係 38
7. 小結 41

第 2 章 下田ノ沢式土器の編年と型式交渉.....	47
----------------------------	----

1. 本章の目的 47
2. 研究小史と本章の構成 48
3. 釧路地域の編年 51
4. 釧路地域・網走地域間における型式交渉の推移 59
5. 小結 68

第 3 章 後北式土器の成立過程.....	73
-----------------------	----

1. 研究の現状と本章の目的 73
2. 道央部における在地の系統とその編年 74
3. 道東部との編年対比 82
4. 道央部における文様割りつけ原理・文様単位の変遷と型式交渉 88
5. 小結 92

第 4 章 後北 C <sub>2</sub> ・D 式土器の展開と地域差.....	95
--	----

1. 本章の目的 95
2. トコロチャシ跡遺跡出土土器の分析 96
3. 北海道東部の編年 107

4. 北海道中央部との編年対比	113
5. 地域差とその背景	121
6. 小結	124
第5章 鈴谷式土器編年再論	129
1. 再論の理由	129
2. 基礎データの確認	130
3. 編年の再検討	133
4. 鈴谷式土器の変遷過程および他型式との関係	141
5. 各氏の編年案および「旧編年」との対比	149
6. 小結	150
第6章 続縄文土器における文様割りつけ原理と文様単位	155
1. はじめに	155
2. 各土器型式群の文様割りつけ原理と文様単位	155
3. 文様割りつけ原理・文様単位を分析する意義について	157
 第Ⅱ部 オホーツク土器の編年	
第7章 香深井A遺跡出土オホーツク土器の再検討－北海道北部の編年－	161
1. 本章の目的	161
2. 大井氏の「型式論」について	162
3. 香深井A遺跡出土土器の型式学的再検討	166
4. 道北部の細別型式	184
5. 各型式の層位的検討	192
6. 小結	200
第8章 モヨロ貝塚のオホーツク土器－北海道東部の編年－	207
1. 本章の目的	207
2. 資料について	208
3. モヨロ貝塚資料の型式学的検討	210
4. 道東部の編年	237
5. 道北部との関係	252
6. 小結	254

第9章 江の浦式土器・テバフ式土器の新資料とその検討—アムール河口部・サハリンの編年—	259
1. 研究の経過と本章の目的	259
2. アムール河口部における編年研究の現状	260
3. ニコラエフスク空港1遺跡出土土器とアムール河口部の編年	262
4. サハリン出土江の浦式土器の再検討	272
5. 江の浦式土器の編年および大陸側の諸型式との関係	282
6. 小結	286
第10章 オホーツク土器の展開過程とその背景	289
1. 本章の内容	289
2. オホーツク土器の暦年代および続縄文・擦文土器との編年対比	289
3. オホーツク土器の成立・展開過程	293
第11章 先行研究との比較	309
総括	321
付篇 北海道東北部における続縄文文化研究の現状と課題	331
1. はじめに	331
2. 宗谷海峡地域の続縄文文化	331
3. 千島列島の続縄文文化	334
4. 遺物各論	335
5. 遺跡立地・生業・居住形態等	338
6. 今後の課題	339
引用文献	343
図版出典	365
あとがき	371
巻末付図	373



## 序章 環オホーツク海沿岸地域古代土器研究の課題

近年、古代～中世における日本列島の北方史をめぐる研究は新たな展開を見せつつある。その一つに、「交流」をキーワードとして従来の地域・文化区分を相対化しつつ、広域的に北東アジア地域の歴史動態を論じようとする動きがある（例えば鈴木編 1996、簗島 2001、井出・前川編 2004 など）。そこでは考古学よりむしろ文献史学の側が考古学の成果を積極的に援用しつつ、日本列島における古代国家形成史や、古代国家と北方の周辺社会との関係論等について具体的に論じている。とりわけ考古学の成果の中で注目されているのはオホーツク文化と擦文文化に関するものであるが、その理由は明白であろう。すなわち、オホーツク文化は日本列島とロシア極東地域を繋ぐ地域に展開して北方社会とのヒトやモノのつながりを直接的にもたらしたという意味で、擦文文化はその展開時期と分布から見てアイヌ文化の形成に直接関与した可能性が高いという意味で、それぞれ重要な歴史的意義を持つと認識されているからである。

広域的な「交流」をキーワードとして日本列島の古代北方史を再検討する、というこのような動きの中でこれまで論じられてきた内容に全く問題がなかったわけではない。大陸系遺物の認定や北回りの交易ルートの指摘において、具体的な根拠を欠く論考が散見されるのはその最たるものと言えよう（注 1）。ただし筆者は、この時期の広域的な「交流」に着目するという問題認識そのものは評価すべきと考えているし、北回りの「交流」に関する検証を含めて、微力ではあるが考古学の側から「交流」をキーワードとして日本列島の古代北方社会の形成過程や動態を論じたいと望んできた。筆者自身の興味関心からすると、それは特に土器の分析を通じてオホーツク文化期や擦文文化期の「交流」実態を解明することを意味するが、それに先立ち、筆者の眼前には結論を出しておかねばならない問題が存在し続けてきた。それは、広域的な土器型式編年の確定作業である。

オホーツク文化の土器編年研究については既に長い年月にわたる研究の蓄積がある（注 2）。そこでは日本考古学における一般的な型式編年の方法—例えば山内清男氏による縄文土器型式編年の方法（山内 1932、山内 1937 など）—とは異なる、やや独自の方法的展開（注 3）がみられたこともあって、研究者間で議論がすれ違うこともあったが、一定の成果はあげられてきた。しかし研究の現状を鑑みるに、暦年代の問題を含めた編年観については現在でも研究者間でかなりの齟齬がみられるし、さらに土器そのものの研究、とりわけ型式変遷過程やオホーツク土器分布圏内の型式交渉のあり方に関しても、ロシア側の情報が少なかったこともあって詳細な議論がなされてきたとは言い難いのが実状で

あった。時間軸上のモノサシになるという面でも、土器そのものの研究に基づく地域間の交渉やヒトの動きの解明という面でも、オホーツク土器の型式編年研究には基礎的で重要な役割が負わされているのだが、その責務は十分に果たされず、ロシア極東地域と北海道を繋ぐ広域編年は概略的なままで有り続けてきたのである。

しかしながら、ソ連崩壊によりロシア側の情報が入手しやすくなり、北海道内でも新しい発掘資料が増加するなど、オホーツク文化をめぐる研究資料の現状は改善されつつある。このように利用可能なデータが増加している現状を踏まえ、本論第Ⅱ部ではアムール河口部～サハリン～北海道・南千島に至る地域のオホーツク土器の型式編年について地域別に再検討して広域編年を確立するとともに、特にオホーツク文化の展開期における土器やヒトの動きについて、擦文文化との関係を含めて論じることとする。土器の型式編年に関する議論は今日的ではない上に、煩瑣で退屈だと思われる向きもあるかもしれない。しかし本論第Ⅱ部を一読していただければ、これまでのオホーツク土器編年には「空白」時期・地域が多かったことや、またそのような資料的制約のためか土器自体の詳細な型式学的検討がおろそかにされてきたこと等の問題がすぐにご理解いただけると思う。このように従来の編年では資料的制約の中で編年方法が開発され、また具体的な土器の様相・実態が不明瞭なまま型式認識が形成されてきたために、編年の方法・視点・論理がかえって複雑で分かりにくくなってしまっている。これに対し本論では広範囲な地域を検討対象とし、従来より細かく細別編年を設定しているので扱う資料の範囲は広く、記述説明も多くならざるを得ない。しかし広域の編年であっても共通の視点・方法論—ここでは属性分析の手法が中心となる—を適用して分析し、地域別の縦の変遷と地域間の横の関係をきちんと整理して提示すれば、広域かつ詳細な議論であっても編年の全体像は逆にすっきりと見通しよく俯瞰できることを示すつもりである。これは一見逆説的なようであるが、土器型式編年研究ではむしろ常識的なアプローチといえるかもしれない。

話の順序が逆になったが、オホーツク土器の問題を論じる前に、本論第Ⅰ部ではそれに先立つ時期の北海道を中心として、続縄文土器の型式編年を考察する。オホーツク土器を論じる前に続縄文土器の型式編年を検討する理由はいくつかある。第一の理由は鈴谷式土器の問題と関連している。オホーツク文化の形成過程を復元する上で、オホーツク文化成立直前期に位置する鈴谷式土器の編年と系統の解明が重要であることは論を待たないが、その鈴谷式土器の一部は、続縄文前半期の北海道東北部の土器型式の伝統に連なっている可能性が高い。すなわち鈴谷式土器の系譜を正しく理解するためには、どうしても続縄文前半期まで遡って土器型式編年を論じることが必要となるのである。第二の理由は日本列島とその北方地域の交流史における画期の存在と関連している。既にいくつかの指摘があるように、北方交流史の流れを見た場合、縄文時代では石刃鏃を伴う文化を除き、宗谷海峡を挟んだ北海道とサハリンの交流は断片的にしか認められておらず、また南千島地域より東では縄文土器は確

認されていない。この範囲を超えて遺物の分布・交流が拡大するのが続縄文文化期(注 4)である(野村・杉浦 1995)。その意味で日本列島と北方地域の交流史の上での画期の一つは続縄文文化期の開始期にある。よって本論で北方交流史を扱うにあたっては、対象時期をそこから始めることが適当であると考えた。第三の理由は後北 C<sub>2</sub>・D 式土器の南下と「蝦夷」論の関連である。これまで「蝦夷」論は史料上の制約もあって主に律令国家以後の時期を対象として論じられてきた(簗島 2001: 24)。しかし特に近年では、律令国家成立以前に北海道系の集団が古墳文化に接触していたことの証左として、後北 C<sub>2</sub>・D 式土器や北大 I 式土器の南下が積極的に取り上げられるようになってきており、この南下現象を「蝦夷」の形成過程につながる流れとして重要視する見方が高まってきている(例えば阿部 1999 など)。本論第 I 部では東北地方の後北 C<sub>2</sub>・D 式土器については直接言及していないが、北海道内におけるこの土器型式の実態を論じることでこの時期の土器やヒトの動きを復元し、この問題に対し幾許かの寄与をなすことを試みる。このように本論第 I 部では、日本列島と北方地域の交流史の形成過程を解明するという観点から、続縄文文化期まで遡って土器の型式編年を再検討することにしたのである。

もっとも続縄文土器の型式編年研究の現状を概観してみると、オホーツク土器に比べれば遙かに編年の整備は進んでおり、地域別の編年や地域間の編年対比については、大筋では共通理解が形成されつつある。そのような中で土器の型式編年を論じるのは屋上に屋を架するようなところがあるが、敢えて本論で再検討を試みたのには理由がある。それは、続縄文土器型式編年全体を構造的に捉える視点・方法を提起する、という土器研究上の新視点を提供することにある。恵山式を除く主要な続縄文土器型式の編年は共通の視点・方法で分析が可能である、というのが本論での新たな提言であり、この分析方法—文様割りつけ原理と文様単位の分析—を用いることによって、続縄文文化期における各時期・各地域の土器型式間の構造的な同一／差異性を容易かつ系統的に把握する、というのが本論第 I 部の骨子である。よって本論での検討対象はほぼ全ての続縄文土器型式群に及ぶこととなるが、オホーツク土器の場合と同様、続縄文土器型式編年も実は全体を論じた方がむしろ細部の関係が理解しやすくなる、という構造で成り立っていることが本論第 I 部の中で明らかになるであろう。

本論の表題で用いられている、「環オホーツク海沿岸地域」と「古代」という語句について注釈しておこう。本論では「環オホーツク海沿岸地域」を対象地域としてはいるが、実際にはオホーツク海北西岸やカムチャツカ、北千島地域についてはほとんど言及していない。その理由は主に資料的な制約にあるのだが、これらの地域でもカムチャツカを除き、オホーツク土器やそれに近い資料の出土が報告されている。今回はそれらについて言及できなかったが、これらの地域を射程に入れた議論が必要であるという意味を込めて上記のような表題とした。また、「古代」については便宜的な表現に過ぎないことをお断りしておく。本論の対象時期の中心は確かに「古代」にあるのだが、実際には上述

のとおり続縄文文化期～オホーツク文化期を対象としている。これは、日本列島史で言えばほぼ弥生時代～平安時代までの時期に相当することになる。

次に本論内容の初出一覧を掲げるとともに、本論の構成を概観しておく（括弧内が初出時の題名と掲載誌等）。

## 第 I 部 続縄文土器の編年

### 第 1 章 宇津内式土器の編年（「宇津内式土器の編年 ―続縄文土器における文様割りつけ原理と文様単位（1）―」『東京大学考古学研究室研究紀要』第 15 号、1997 年、pp.1-38）

続縄文前半期網走地域の編年を、宇津内式土器を中心として文様割りつけ原理と文様単位の分析に基づき検討した。再録にあたり、初出時にはやや分かりにくかった続縄文初頭の土器型式と「元町 2 式」土器の部分の記述を整理し、結語の一部を書き改めた。ただし編年や細別型式の設定には手を加えていない。

### 第 2 章 下田ノ沢式土器の編年と型式交渉（「下田ノ沢式土器の再検討 ―続縄文時代前半期の北海道東部における土器型式の動態―」『物質文化』69、2000 年、pp.40-58）

続縄文前半期釧路地域の編年を、下田ノ沢式土器を中心として検討した。澤四郎氏や宇田川洋氏の設定した細別型式群を再整理するとともに、網走地域との併行関係・型式交渉を考察している。再録にあたり、初出時には文意が不明瞭であった結論部分の一部を削除し書き改めた。編年・細別型式・併行関係の設定には手を加えていない。

### 第 3 章 後北式土器の成立過程（書き下ろし）

続縄文前半期の道央部編年を文様割りつけ原理と文様単位の分析に基づき検討した。後北式土器が成立するプロセスを、道央部在地の系統に恵山式が侵入した後、道央部と宇津内式系統との交渉が強化されていく過程として具体的に描写することにより、道南部・道央部・道東部の各系統の関係を整理した。

### 第 4 章 後北 C<sub>2</sub>・D 式土器の展開と地域差（「後北 C<sub>2</sub>・D 式土器の展開と地域差 ―トコロチャシ跡遺跡出土土器の分析から・続縄文土器における文様割りつけ原理と文様単位（2）―」『トコロチャシ跡遺跡』東京大学大学院人文社会系研究科、2001 年、pp.176-217）

後北 C<sub>2</sub>・D 式土器の編年を、文様割りつけ原理と文様単位の分析に基づいて道央部／道東部の

地域別に対比し、地域差の存在を指摘するとともにその背景にある土器・ヒトの動きについて言及した。再録にあたり、初出時には掲載していた器種・胎土・成形・器形等の事実記載と分析を削除した。削除部分以外については字句の訂正以外に手を加えていない。

第 5 章 鈴谷式土器編年再論（「鈴谷式土器編年再論」『宇田川先生華甲記念論文集 アイヌ文化の成立』宇田川洋先生華甲記念論文集刊行実行委員会、2004 年、pp.167-189）

筆者自身の旧稿（熊木 1996）の訂正である。鈴谷式土器の型式編年を「複雑から単純へ」という視点から再整理するとともに、鈴谷式土器の型式変遷は南北交流が段階的に進行するプロセスとして説明できることを指摘した。再録にあたって、木山克彦氏らによる「バリシヤヤ・ブフタ土器群」及び「ザーパトナヤ 10 タイプ」の土器群に関する考察（木山ほか 2003）に対するコメントを追加したが、他の部分には字句の訂正以外に手を加えていない。

第 6 章 続縄文土器における文様割りつけ原理と文様単位（書き下ろし）

第 1 章～第 5 章の内容のうち、続縄文土器における文様割りつけ原理と文様単位の変遷について地域別・時期別にまとめ、構造的な視点から続縄文土器の型式編年を総括した。結語部分に熊木 1997 の一部を引用している。

第Ⅱ部 オホーツク土器の編年

第 7 章 香深井 A 遺跡出土オホーツク土器の再検討 ―北海道北部の編年―（書き下ろし）

礼文町香深井 A 遺跡出土土器の再検討を通じて、大井晴男氏による「型式論」（大井 1982a）に対する批判的検討を試み、道北部のオホーツク土器型式編年を再構築した。

第 8 章 モヨロ貝塚のオホーツク土器 ―北海道東部の編年―（書き下ろし）

網走市モヨロ貝塚のオホーツク土器を再検討し、道東部のオホーツク土器型式編年を整理するとともに道北部との型式交渉について考察した。刻文期の後半以降に地域差が拡大する過程と、沈線文期～貼付文期にかけての道北部／道東部の間で、型式学的な影響方向が逆転してゆく状況をトレースしている。なお、モヨロ貝塚資料については、市立函館博物館と北海道立北方民族博物館の所蔵資料を新たに図化して提示した。

第 9 章 江の浦式土器・テバフ式土器の新資料とその検討 ―アムール河口部・サハリンの編年―（書き下ろし）

2001 年度に発掘調査されたアムール河口部ニコラエフスク空港 1 遺跡の出土資料を中心に、アムール河口部におけるテバフ式土器とオホーツク土器の型式編年を検討し、さらにそのアムール河口部編年と第 7 章の道北部編年を軸として、サハリンのオホーツク土器型式編年についても再検討した。伊東信雄氏が設定した江の浦 B 式土器・同 A 式土器の実態と細別を新資料に基づいて明らかにするとともに、アムール河口部とサハリン間にある地域差や、オホーツク土器と靺鞨系土器、テバフ式土器の関係について言及した。

#### 第 10 章 オホーツク土器の展開過程とその背景（書き下ろし）

第 7 章～第 9 章の総括として、まずはオホーツク土器型式編年と暦年代の対比、および続縄文土器・擦文土器との編年対比を検討した。その上でオホーツク土器の成立と展開の過程について、周辺地域の土器型式群との交渉と絡めつつトレースし、あわせて土器の型式交渉の背景にあるヒトの動きについても解釈を試みた。

#### 第 11 章 先行研究との比較（書き下ろし）

オホーツク土器編年に関する先行研究のうち、特に 1960 年代以降の主要な論文に対してコメントし、本論が依拠した部分と、批判的検討を加えて発展させた部分とを明確にした。

#### 総括（書き下ろし）

第 I 部・第 II 部の総括。

付篇 北海道東北部における続縄文文化研究の現状と課題（「北海道考古学の現状と課題 続縄文文化（道東・道北部）」『北海道考古学』第 40 輯、2004 年、pp.77-89）

土器型式編年研究以外の研究分野について増補するために付篇として掲載した。1994 年度～2003 年度における北海道東北部の続縄文文化研究について総括し、今後の課題を述べている。

本論の概要は以上である。土器の分析を通じて社会の動態を論じる、というのが筆者の目指すところであり、本論ではそこまで踏み込んで検討した箇所もある。しかしそれ以外の部分では基礎的な内容の検討—土器そのものの型式学的内容の分析とそれに基づく広域編年の確定—to 止まっているところも多い。しかし、やや使い古された警句ではあるが、正しい編年に基づかない研究は「砂上の楼閣」となりかねない、というのもまた厳然たる事実であり、広域編年そのものが確立していない環オホーツク海沿岸地域においては本論の持つ意味は決して小さくないと信じるものである。本論の成果が、日本列島とその北方地域の交流史解明のための足固めとなれば幸いである。

なお本論に関連する研究に関して、これまでにいくつかの研究助成を受けた。筆者が研究代表者であったものについて以下に記しておく。

平成 10 年度～平成 11 年度 科学研究費補助金（奨励研究（A））「続縄文時代の広域編年と交流 — 東北・北海道・サハリナー」

平成 12 年度 笹川科学研究助成金「ロシア・アムール川河口部における考古学的調査 — オホーツク文化の起源・展開・終末問題及び大陸諸文化との関係に関する研究」

平成 13 年度 笹川科学研究助成金「極東沿岸地域を舞台とした先史文化交流史の解明 — オホーツク文化を中心として」

平成 14 年度～平成 15 年度 科学研究費補助金（若手研究（B））「オホーツク文化の展開・地域差と終末過程に関する考古学的研究」

#### 注

- (1) 大陸と北海道の交流をめぐる問題については、臼杵勲氏が近年の研究動向を総括している（臼杵 2004）。
- (2) オホーツク文化研究全般にわたる学史については種市 1980 や大井 1982c に、土器編年や暦年代に関する学史については右代 1991 に、それぞれまとめられている。
- (3) その代表例が、大井晴男氏による「型式論」（大井 1982a）であることは言うまでもない。
- (4) 厳密に言えば縄文晩期末からであるが、特に土器編年においては縄文晩期末～続縄文初頭の間に画期を設定することは実は難しいので、ここでは本文のように画期を続縄文時代の始まりに置いておく。

## 第 I 部

### 続縄文土器の編年



## 第1章 宇津内式土器の編年

### 1. 本章の目的

宇津内式土器は、北海道の網走地域を中心に分布する縄文時代前半期の土器型式である。本章の目的は、宇津内式土器の検討を中心として、縄文晩期末から縄文後半期直前までの網走地域における土器編年を再検討することにある。

研究史を簡単に振り返ってみよう。1933年に河野広道氏が「北海道式薄手縄紋土器群」として「前北式」「後北式」を提唱して以来（河野 1933b）、1950年代までは網走地域の当該期の土器群に対する名称としては「前北式」（河野 1933b、河野 1958）「後北式北見型」（河野 1958）が用いられてきた。山内清男氏によって「縄縄紋式」が提唱され（馬場ほか 1936、山内 1939）、その時代区分が北海道の研究者間に浸透するのと前後して、1960年代には「前北式」「後北式」について再検討が始まる。特に「前北式」とされてきた各種の土器群に対しては、道内各地で新たに発掘された資料を標式として新しい型式が設定されていった。宇津内式土器は言うまでもなく斜里町宇津内遺跡（米村・金盛 1973）出土土器群を標式とする型式であるが、これは宇津内遺跡の報告で「Ⅱ群 a 類」「Ⅱ群 b 類」に分類された土器群（金盛 1973）に対して、宇田川洋氏がそれぞれ宇津内Ⅱa 式・宇津内Ⅱb 式という土器型式を設定したものである（宇田川 1977）。宇津内遺跡の資料は良好なまとまりを示しており、これにより当該期の網走地域の型式様相が具体的にになったことから宇津内式の型式名が定着し、現在に至っている（注1）。

宇津内式土器の細別編年に関する研究の現状についても確認しておこう。縄文晩期後葉の幣舞式土器と宇津内式土器との間については、晩期末～縄文初頭に相当する数型式を間に挟んで設定する意見が多い（宇田川 1982、大沼 1982a、同 1989、金盛 1982、森田 1996）。宇津内式土器そのものについては、佐藤達夫氏による道東の縄文土器編年（佐藤 1964）を基礎として、宇田川氏が宇津内Ⅱa1 式・Ⅱa2（古）式・Ⅱa2（新）式・Ⅱa3 式、Ⅱb1 式・Ⅱb2 式の6つの細別型式を設定している（宇田川 1977、同 1982、同 1985）。宇田川氏の細別型式が時期差ととらえるかについて慎重な立場をとる意見もあるが（金盛 1982）、設定された型式組列に対しては概ね妥当という評価がなされている。さらに、宇津内Ⅱb 式に後続する型式としては、後北 C<sub>1</sub> 式土器を置く意見が一般的である（大沼 1982a、同 1989、金盛 1982）。

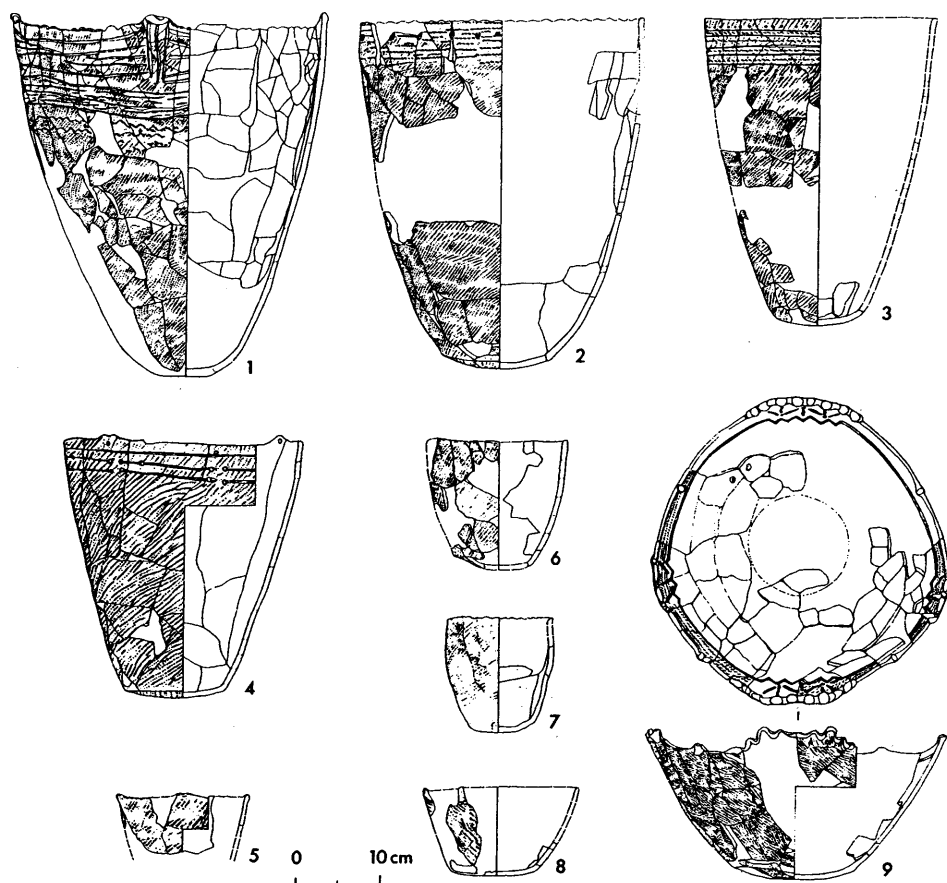
以上のような研究の現状をみた場合、型式の細別はすでにやり尽くされ、編年も確定している印象を受けるかもしれない。確かに本章で筆者が行う編年には、屋上屋を架する部分がなくはない。しかし筆者の意図は少し違うところにある。すなわち、先学の編年では注目されてこなかったある型式学的特徴に着目すると、宇津内式土器の系統の変遷はもとより、恵山式を除く続縄文土器全体の系統と地域差が一つの法則性の元にすっきりと整理できる、というのが本論の主張である。その型式学的特徴というのが、文様の縦の割りつけ原理と文様単位である(注 2)。無論、筆者の視点で編年を再検討した場合でも先学の編年が大きく揺らぐわけではないのだが、従来想定されていた型式組列では説明しきれなかった矛盾は解消できるようになる。最も時間的序列としての編年を部分的に修正することは本論の副次的な産物に過ぎない。宇津内式、ひいては続縄文土器全体の文様構造や型式変遷、さらに型式間の交渉に対する理解が深まるという点にこそ、本論の価値がある。

以上のように本章の主眼は、文様の縦の割りつけ原理と文様単位を検討することによって、宇津内式土器の器形と文様とを結びつけている規則の構造と、その変遷過程を明らかにすることにある。上述のように本章で用いる分析の視点・手法は、特に後北式系統の編年・地域差を把握する上でも有効であるのだが、宇津内式以外の続縄文土器については次章以下で検討することとして、とりあえず本章では宇津内式土器を中心に、網走地域における縄文晩期末～続縄文前半期までの型式群の変遷過程を時系列順に明らかにしてゆく。

## 2. 網走地域における縄文晩期末～続縄文初頭の土器群

### 1) 概要

宇津内式土器について検討する前に、網走地域の縄文晩期後葉の土器型式について概観しておきたい。道東部の縄文晩期後葉～晩期末の土器編年は、幣舞式→緑ヶ岡式とされている(澤 1969、鷹野 1981)。網走地域において、幣舞式土器がまとまって出土した例としては常呂町栄浦第二遺跡 13 号竪穴ホ号床面(以下、栄浦第二 13 ホ号と略)出土土器群(藤本編 1972)(第 1 図)があり、この土器群は幣舞式でも後半段階に位置づけられている(佐藤 1972a、鷹野 1981、大貫 1995)。一方、網走地域の、縄文晩期末～続縄文初頭に位置づけられる土器群については出土例が少なく、佐藤達夫氏(佐藤 1964)、宇田川洋氏(宇田川 1982)、金盛典夫氏(金盛 1982)らの検討にもかかわらず内容には不明な部分が多かった。



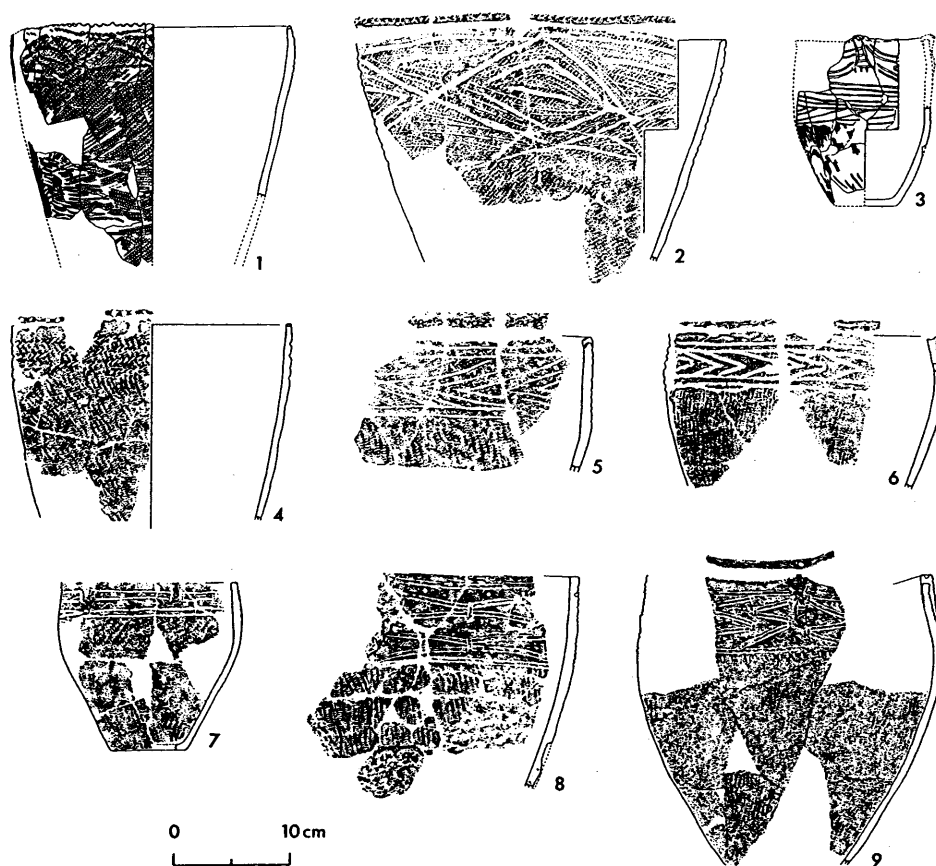
器種	0単位	2単位	4単位
大型深鉢	4		2
小型深鉢	3		1
大型浅鉢			1
小型浅鉢			1※
小型舟形		1※	
計	7	1	5

※は突起が片側によった特殊な単位（大型浅鉢），あるいはその可能性があるもの（小型舟形）

第1図 上：栄浦第二遺跡13号竖穴木号床面出土土器群（抜粋）

下：栄浦第二遺跡13号竖穴木号土器群の文様単位別個体数

（下表の個体数は佐藤 1972a：Tab.4 に同書の Fig.279-1 を加えたもの）



第 2 図 栄浦第二・第一遺跡の土器群

しかし最近、常呂町栄浦第二・第一遺跡（武田編 1995）においてある程度の量が出土したことにより具体的な検討が可能となってきた（第2図）。この土器群は、かつて工字文・変形工字文のモチーフを有する土器として佐藤氏・金盛氏らが言及した各遺跡の土器群（佐藤 1964、金盛 1982）と同種の土器を多く含んでいる。これら栄浦第二・第一遺跡の土器群のうち、「栄浦第一遺跡」（注3）である程度まとまった状況で出土した土器群については、大貫浩子氏（大貫 1995）が幣舞式土器や釧路地域の緑ヶ岡式土器と対比しつつ編年を検討している。

大貫氏によれば「栄浦第一遺跡」の土器群は1群・2群・3群の三者に大別可能で、1群土器は「縄文時代晩期終末」の「緑ヶ岡式」併行に、2群土器は「続縄文時代初頭」に、3群土器は「続縄文に属する」と位置づけられ、特に1群と2群以下には型式差・時期差が認められるとされている。大貫氏の分類は型式組列としては首肯できるが、現在までのところ、時期差を証明するような細別毎の遺構・層位的なまとまりははっきりしていない。そのため本章では、大貫氏の言う1群土器と2群1類土器を一括して扱うことにする。なお、大貫氏の2群2類は後述の「元町2式」に比定されるものであり、また3群は文様が地文の縄文のみの土器であり編年の決め手を欠くので、検討対象から除外しておく。

以下では大貫氏の論考に依拠しつつ、栄浦第二・第一遺跡の土器群（注4）を中心に、網走地域における縄文晩期末～続縄文初頭の土器群について概観してみたい。

## 2) 型式学的特徴

栄浦第二・第一遺跡の土器群の型式学的内容に関して、大貫氏の記述に従いつつ、栄浦第二13ホ号土器群（幣舞式後半段階）との対比を中心として以下にまとめてみよう。

### a) 器種・器形

栄浦第二13ホ号土器群が基本的に深鉢、浅鉢、「舟形鉢」の3器種を含むのに対し、栄浦第二・第一遺跡の土器群には「舟形土器」は認められず、浅鉢もわずかししか認められないようである。器種の単純化が生じているといえよう。ただし、釧路地域の緑ヶ岡式では「舟形土器」が存在するようであり（鷹野 1983）、器種組成については資料の増加を待つてさらに検討する必要がある。

器形は、栄浦第二13ホ号土器群は底部が全て丸底ないし丸底風の平底であるのに対し、栄浦第二・第一遺跡の土器群は平底が多い。

### b) 文様

栄浦第二13ホ号土器群は、口縁部に地文として縄文が施されているが、栄浦第二・第一遺跡の土器群の口縁部には地文の施されているものとないものがある。大貫氏の指摘通り、「幣舞的

な文様から変化したものには一部に地文をそのまま残したものが残り、亀ヶ岡式の影響を受けているものには地文が無いという傾向がある」(大貫 1995:533) のが見て取れる。

栄浦第二・第一遺跡例に見られる工字文・変形工字文のモチーフや羽状の沈線文はこの土器群を特徴づけるものであり、栄浦第二 13 ホ号土器群には認められない(注 5)。

一方、釧路地域の緑ヶ岡式(鷹野 1981)と比較すると特に文様要素が異なっているのも大貫氏の指摘通りである。すなわち栄浦第二・第一遺跡の土器群には綾くり文、貝殻腹縁文、条痕文がほとんど見られない。

### 3) 編年と類例

以上にみたように、栄浦第二・第一遺跡の土器群には栄浦第二 13 ホ号土器群(幣舞式の後半段階)とは異なる種々の型式学的特徴が認められる。文様の特徴や後の時期へつながる要素の存在などから考えて、やはりこれらは時期差として解釈できよう。よって栄浦第二・第一遺跡の土器群は縄文晩期後葉よりも新しく、縄文晩期末～続縄文初頭に位置づけられることになる。網走地域における類例としては、工字文・変形工字文や羽状の沈線文を持つ土器群だけに注目した場合でも佐藤氏・金盛氏・大貫氏のあげた各遺跡に加え、常呂町常呂川河口遺跡(武田編 1996: 第 126 図 13、第 152 図 1・2・4、第 204 図 3 など)、斜里町尾河台地遺跡(金盛ほか 1983: 第 228 図 1・3・4)、斜里町オンネベツ川西側台地遺跡(松田 1993: 第 69 図 12～16)などの例がある。また最近、常呂川河口遺跡ピット 329b で確認された土壌墓副葬一括出土土器群(武田編 2002)は、小型の副葬土器が多くやや特殊な例となるが、この時期のまとまりを明確に示す例としてとらえうる。このように細別型式としての全体像は今ひとつはっきりしていないが、この常呂川河口遺跡ピット 329b の例からみても、一時期を構成する「段階」として「栄浦第二・第一遺跡の土器群」を設定することは可能と考えられる。

他地域の土器型式と対比した場合、まずは隣接する釧路地域の緑ヶ岡式土器・フシココタン下層式(澤・西編 1975、宇田川 1977、澤 1982)が時期的にも型式的にも近い土器群として比較対象となる。前述のように特に緑ヶ岡式とは器種組成・文様などの型式学的な特徴がやや異なるようである。フシココタン下層式とは共通点も多いが、この型式の内容は明確ではないため具体的な対比は難しい。他にもこの「栄浦第二・第一遺跡の土器群」に対比しうる、いわゆる在地系の土器群は道央部を中心に全道的に拡がっており、編年を論じる際には全道的な広域編年対比が必要となる。この問題に関しては福田正宏氏らが精力的に取り組んでおり、東北地方や北海道における非在地系の型式との対比についてはかなりの精度で明らかになってきている(福田 1999、福田 2000、高瀬・福田 2001、福田 2003)。福田氏らによれば、栄浦第二 13 ホ号土器群は大洞 A' 式と、栄浦第二・第一遺跡の土器群は砂沢式とそれぞれ併行するとされる。筆者はこれらの併行

関係を十分に理解しているとは言い難いが、両者の間に時期差を認める氏らの意見には賛同したい。しかし、全道各地に分布する在地系土器群相互の関係については筆者の中では未だ整理・理解が行き届いていないし、それは各研究者の間でも同様のようである。各地で乱立する型式名の整理など、これら在地系土器群の系統・地域差の再検討(注 6)は今後の課題であり、「栄浦第二・第一遺跡の土器群」を細別型式として設定しうるか否かという問題の結論もここでは保留しておくことにしたい。

#### 4) 文様単位(口唇部突起数)の問題

宇津内式に至る型式変遷をトレースするために、この時期の文様単位について確認しておこう。栄浦第二 13 ホ号と栄浦第二・第一の土器群の間で口唇部突起の変化をみると、口唇部の突起が小型化し、衰退していく傾向にある。また、浅鉢・「舟形土器」の衰退ないしは消滅に伴って、突起群が片側に寄った特殊な単位は消滅し、さらに、2 単位・2+2 単位は鉢・深鉢に引き継がれるようである。以下に具体的に示しておく。

栄浦第二 13 ホ号土器群の各個体について、口唇部突起数に基づき文様単位数の分類を行うと第 3 図のようになる。0 単位(平縁、ないしは「小鋸歯状」口唇(佐藤 1972a : 377))と 4 単位の個体が多数を占めるが、「小型舟形鉢」(佐藤前掲)の 2 単位と、大型浅鉢に見られる、大型突起一対と、片側に寄った小型突起一対の特殊な単位を有する個体が一個体ずつある。栄浦第二 13 ホ号以外の網走地域の幣舞式では、他に大型突起一対と小型突起一対の「2+2 単位」の例がある。

一方、栄浦第二・第一遺跡の土器群では、完形の個体が少ないため口唇部の突起数ははっきりしないが、平縁の例と突起を有する例がある。類例である斜里町ピラガ丘遺跡第Ⅱ地点(米村ほか 1972 : 52 上)や北見市中ノ島遺跡(久保 1978 : Fig.87)の資料からすると、2 単位、4 単位、2+2 単位が存在すると思われる。特に注目すべき文様として、突起から縦に垂下する貼付文があげられる。この文様は、栄浦第二 13 ホ号例にはないが、同時期の他の例では特に「舟形土器」(鷹野 1983)などにみられ、主に 2 単位もしくは 2+2 単位の突起に付加される。この貼付文は、栄浦第二・第一遺跡の土器群では少数ではあるが深鉢に認められ、後述するように宇津内式の成立直前期の土器群まで存続する。

以上をまとめると、幣舞式後半段階にみられる 2 単位、4 単位、2+2 単位の突起・文様単位は、やや衰退しながらも栄浦第二・第一遺跡の土器群へと受け継がれるとみることができる。

### 3. 宇津内式成立直前期の土器群

## 1) 概要

縄文晩期末～続縄文初頭の土器群（ここで言う栄浦第二・第一遺跡の土器群）と、宇津内式土器との間にもまだ介在する型式があることは、冒頭に述べたように宇田川氏や金盛氏らによって指摘されている。しかしながら、それら宇津内式成立直前期の土器群については、資料がごく限られていたこともあり、縄文晩期末～続縄文初頭の土器群から宇津内式土器に至る変遷過程には不明な部分が多かった。しかし近年、美幌町元町 2・3 遺跡（荒生・小林 1986、同 1988、荒生 1988、同 1994）でその間を埋める型式学的内容の土器群がややまとまって出土し、宇津内式土器の成立過程を解明する上で重要な資料が提供されることになった（第 3 図）。ここではそれらの内容を検討する。

なお元町 2 遺跡の報告者である荒生健志氏は、出土した続縄文前半期の土器群（「第 V 群土器」）を型式学的特徴を元に 1～5 類に分類している（荒生・小林 1986）。ここで取り上げるのは、1 類（「恵山式の影響がある」土器群）と、5 類（「典型的な宇津内Ⅱa 式」）の一部を除いた土器群である（第 3 図）。

## 2) 型式学的特徴とその分類

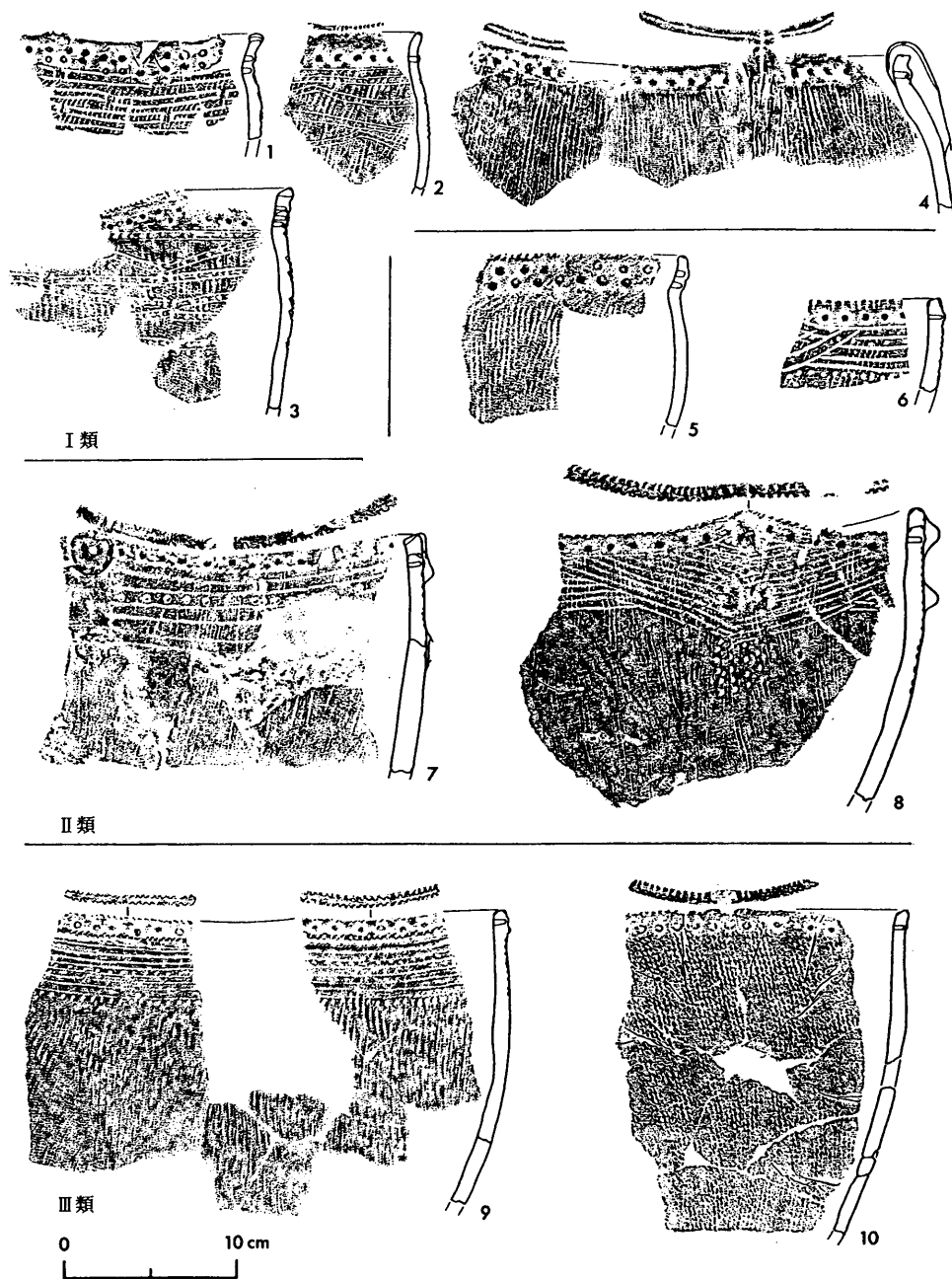
元町 2・3 遺跡出土土器群は、栄浦第二・第一遺跡の土器群と宇津内式の間を埋めるような型式学的内容を持つ、と述べた。個々の型式学的属性から元町 2・3 遺跡出土土器群を分析する場合には、各属性を以下の 3 つのグループに分類して考えると土器群の内容と性格を容易に理解することができる。

### a) 属性 I：縄文晩期末～続縄文初頭の土器群と共通し、宇津内式にはない属性

前段階の土器群と共通する属性である。これらの属性には、幣舞式以来の在地系の属性と、道東以西の土器群に由来する非在地系の属性の二者がある。在地系属性には文様要素としての沈線文と、口縁部突起の頂部より垂下する貼付文があげられる。一方、非在地系属性としては頂部に刻みを施す口唇部の突起（いわゆる「B 状突起」に近い形態）（第 3 図 1・3・4・7）、工字文・変形工字文のモチーフ（第 3 図 1・3）があげられる。

また、原体 LR の縄文による地文、口唇上の縦の刻み目（第 3 図 2・5）、1～3 本程度の水平の平行線モチーフからなる口縁部文様意匠（第 4 図 4）などは宇津内式にも少数認められるため、属性 I とするには多少問題があるが、縄文晩期末～続縄文初頭と共通する古手の属性であることは認められてよいであろう。





第3図 元町2・3遺跡の土器群（「元町2式」土器）

1・5・6・10：元町2    2・3・4・7・8・9：元町3

b) 属性Ⅱ：元町 2・3 遺跡独自の属性

口縁部に水平 2 列に施された突瘤文（第 3 図 1・5）は、元町 2・3 遺跡の土器群を特徴づける文様である。また、口唇直下でわずかに括れて口唇部付近で外反する器形（第 3 図 1・2・3・5）、口唇部に平坦面を作り出し、その外縁または内縁と外縁に刻み目を施す文様（第 3 図 3・6～10）、斜めの平行線モチーフからなる口縁部文様意匠（第 3 図 6・8）、円盤形の貼付文（第 3 図 7）は宇津内式にも少数ずつ認められるが、これらの属性は網走地域では元町 2・3 遺跡の段階で特徴的にみられるようである。

c) 属性Ⅲ：宇津内式と共通し、縄文晩期末～続縄文初頭の土器群にはない属性

元町 2・3 遺跡出土土器群の属性のうち、宇津内Ⅱa 式前半の土器群に特徴的な属性と共通するものとしては、原体 RL の縄文または原体 R の撚糸文による地文、水平 1 列の突瘤文、多数の水平平行線モチーフからなる縄線文（文様帯下端に縄端による刺突列をめぐらせる例が多い）、口唇下を横にめぐる貼付文があげられる。

3) 編年の検討

上に分類した属性Ⅰ・Ⅱ・Ⅲは、それぞれ栄浦第二・第一遺跡の土器群、元町 2・3 遺跡の土器群、宇津内式土器に特徴的な属性である。元町 2・3 遺跡の土器群は、一個体のなかでこれらの属性Ⅰ・Ⅱ・Ⅲを複数あわせもっており、そのことこそが元町 2・3 遺跡の土器群の性格をあらわしている。すなわち、元町 2・3 遺跡の土器群は縄文晩期末～続縄文初頭の土器群と宇津内式との間のギャップを埋めるような型式学的内容を有しているのである。

最も属性Ⅰ・Ⅱ・Ⅲのあらわれ方は個々の土器でやや異なっており、属性Ⅰ・Ⅱ・Ⅲをそれぞれ指標として、縄文晩期末～続縄文初頭の特徴が認められるⅠ類土器、元町 2・3 遺跡独自の属性が特徴的なⅡ類土器、宇津内Ⅱa 式とほぼ同じ内容を有するⅢ類土器と、3 つのタイプを設定することも可能である（第 3 図）。

これらの 3 タイプは、型式組列としてはⅠ類→Ⅱ類→Ⅲ類として把握できる。しかし 3 タイプ間で共通する特徴もあるし、各個体内では属性Ⅰ・Ⅱ・Ⅲが併存しており、これら 3 タイプを時期差を有する段階や細別型式として設定するのは難しい。むしろここではこれらの 3 タイプで一型式としてのまとまりをなすと捉えておく。すなわち本章ではこの元町 2・3 遺跡の土器群を「元町 2 式」と仮称し、縄文晩期末～続縄文初頭の土器群と宇津内Ⅱa 式との間に位置する土器型式として設定する。この「元町 2 式」の特徴を一言で表現するならば、「全体としては宇津内Ⅱa 式に近い印象を受けるが、個々の要素に前段階の特徴やこの段階特有の特徴を含む土器群」となるろう。

属性Ⅰ～Ⅲという型式学的特徴の分類を元に、Ⅰ～Ⅲ類の土器分類を仮設した。これらⅠ～Ⅲ類土器は細別型式として設定することはできなかったが、この3タイプの分類によって、栄浦第二・第一遺跡の土器群と宇津内式土器の間の変遷過程が比較的スムーズであることが理解できると同時に、両者の間には独自の特徴を有する土器型式が存在することが明らかになったと思われる。

#### 4) 分布と層位的出土例

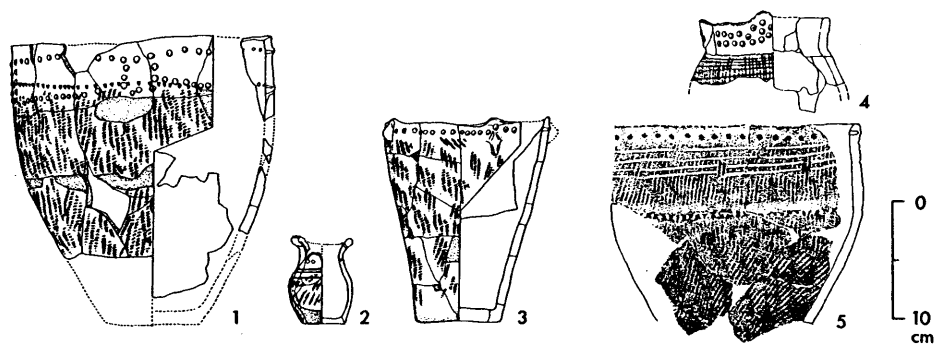
「元町2式」土器の例としてまずあげられるのは斜里町尾河台地遺跡42号竪穴のセット資料（第4図1～3）である。第4図1は、2列の突瘤文、及び中空の施文具を斜め上方に刺突してつけた刺突文を有する。筆者による元町2・3遺跡の分類で言えばⅡ類に比定される。第4図2は2単位のB状突起に一系列の突瘤文、3条の沈線文を有する。筆者分類Ⅰ類である。第4図3は4単位の突起と突起下の縦の貼付文、及び口縁部に一系列の突瘤文を有する。これも筆者分類Ⅰ類としてよい。このセットの中には一般的な宇津内Ⅱa式は含まれておらず、この時期の土器型式のまとまりの実在を示す資料といえる。

網走地域におけるその他の例としては、栄浦第二遺跡（藤本編1972：Fig.9）（第4図5）、常呂川河口遺跡（武田編1996：pit121、pit144例など）、網走市南8条（松下ほか1964：Fig.9）、女満別町昭和遺跡（大場・奥田1960：第58図9）、斜里町チブスケ遺跡（田沢ほか1959：第13図版E-18）などの各例があげられる。各資料とも断片的ではあるが、この「元町2式」が元町2・3遺跡だけに限定されるのではなく、網走地域の中で広く分布していることがわかる。この点も筆者が縄文晩期末～続縄文初頭の土器群と宇津内Ⅱa式の間の一型式を設定する根拠の一つである。

北見市中ノ島遺跡（久保1978）で「第3群土器」に分類されている土器群の一部は、この「元町2式」と同時期であると思われるが、中ノ島遺跡例は釧路地域や道央地方の土器群とも強いつながりを持っているため、分析は次章で行う（注7）。常呂川河口遺跡（武田編1996：第380図1など）などの例についても同様である。

層位的な出土例としては、まず元町3遺跡（荒生1994）の例がある。ここではP-45ピットがP-47ピットに切られている。各々の一括出土土器はP-47（Ⅱ類）→P-45（宇津内Ⅱa式）である。

一方、栄浦第二遺跡13号竪穴ハ号埋土出土例（藤本編1972）（第4図4）はⅡ類に分類できる。この資料は、層位的関係にはやや問題が残るものの、下層のホ号床面出土土器（幣舞式後半）、上層のロ号住居址床面出土土器・イ号床面出土土器（いずれも宇津内Ⅱa式）の間層にあたる位置から出土しており、参考になろう。



第4図 「元町2式」土器

1・2・3：尾河台地42号竪穴 4：栄浦第二13ハ号竪穴埋土 5：栄浦第二

## 5) 文様単位数（口唇部突起数）

「元町 2 式」の文様単位についても確認しておこう。完形土器が少ないため単位数ははっきりしないが、平縁（0 単位）の土器が多く、突起を有する土器では 2 単位と 4 単位が存在するようである。先述の「突起から縦に垂下する貼付文」が存在することからも明らかなように、元町 2・3 遺跡の土器群の文様単位数は縄文晩期末～続縄文初頭の土器群からの伝統を残しているが、特に栄浦第二 13 ホ号土器群と比較すると、「元町 2 式」では明らかに 0 単位（平縁）の割合が増加している。すなわち、先述したように、幣舞式からこの元町 2・3 遺跡の土器群にかけて、土器の口唇部に 2 ないしは 4 の単位の突起をつけるという割りつけが衰退していくことがわかる。この文様の縦の割りつけ原理の衰退は、後続する宇津内Ⅱa 式初頭の時期にもっとも進行し、口唇部に突起を有する土器は一時期ほぼ消滅する。

## 4. 宇津内Ⅱa 式土器の編年

## 1) 概要

宇津内式土器の編年については、宇田川氏によって 6 つの細別型式からなる編年が示されていることを本章の冒頭で確認した。すでに述べたように宇田川編年は佐藤達夫氏による編年を基礎としたものであるが、その佐藤編年は、氏が「この時期の細別は、隆起線文の変遷に即して行いうるように思われる」（佐藤 1972a：90）と述べているとおり、貼付文の変遷すなわち発達過程に主に注目したものであった。宇田川編年でも貼付文の発達過程が編年の柱となる型式組列として位置づけられ、個々の器形・文様要素の消長がその柱と組み合わされて編年が構成されている。

両氏の編年で示された型式組列は十分な説得力を持つもので、いくつかの層位的出土例によってその正しさは追認されてきた（宇田川 1985）。しかし同時に遺構毎の一括出土例が増加するにつれて、再検討の余地が残ることも判明してきている。特に宇津内Ⅱa 式においては、貼付文をもつ土器と持たない土器が一時期のセットを構成する場合が多く、両氏の編年ではこれらのセットの位置づけがやや難しくなってきたのである。このように両氏の編年における問題点は、一括土器群に含まれる個々の土器に施された各種文様が「多相組成」（林 1990a）を示していることに対して、合理的な説明が困難になってしまうところにあると思われる。

本論では、佐藤・宇田川両氏の編年によって示された「貼付文の発達過程に基づく型式組列」を尊重しつつ、それらの組列をも包括するような法則性—文様の縦の割りつけ原理と文様単位の系統性—に着目し、両氏の編年の問題点を克服しようと試みる。

## 2) 文様の縦の割りつけに基づく分類 (第 5 図)

宇津内式 II a 式土器で基本となる文様単位数は 0 単位、4 単位、2+2 単位の 3 種類である。

0 単位は、平縁で、文様の縦の割りつけを持たないものである (Ptype) (第 9 図 1~3)。

4 単位は、平縁で、口縁~胴部文様として、同じ形状の文様を 4 カ所均等に配置したものである。平縁ではなく、4 単位全て同じ突起を有する土器も少数ではあるが存在する。平縁・突起有りのいずれの例も口縁部に貼瘤文を 4 カ所配置する例が多い (Qtype)。

2+2 単位は、90° 毎 4 カ所を割りつけの基点にするが、吊耳を 1 対貼付したり、口唇上の突起の 1 対を大型化することなどによって向かい合う組どうしに差異を生じさせ、土器の側面-正面観を強調するものである (SFtype) (第 7 図 2、第 9 図 7・9・10・12・13・14)。突起が 4 単位均等で吊耳を持たないものでも、口縁部・胴部文様が 180° の対どうしで大きく異なる例はこの 2+2 単位としてよいだろう。

宇津内 II a 式には、これらの単位数の他に 2 単位の例も多く認められる。これらは器形・文様の特徴から 2 種類に分類できる。1 種は、平縁で、貼瘤文などの比較的小さい 1 対の文様を施したもので、Qtype の文様が 1 対欠落したものとしてとらえることができる (QPtype) (第 9 図 4・8)。他の 1 種は 1 対の吊耳もしくは突起を有し、90° 横の位置には対となる文様を有さないものである。SFtype の「正面」の文様が欠落したものとしてとらえることができる (SPtype) (第 7 図 1、第 9 図 6(注 8)・11)。このように、見かけ上が 2 単位の宇津内式土器は、4 単位もしくは 2+2 単位の割りつけを基本としており、4 単位・2+2 単位それぞれのバリエーションとしてとらえることができる。

一方、単位数としては 2+2 単位だが、平縁で、かつ対となる文様どうしの差がごく僅かなものがある。これも Qtype のバリエーションとしてとらえられるであろう (QFtype) (第 9 図 5)。

また、例外的なものとして、5 単位の例があるが、これは鈴木公雄氏の言う「追いまわし施文」(鈴木 1968、今村 1983)であって、一定した縦の単位数に基づく割りつけは意識されていないといえよう。すなわち、Ptype のバリエーションとすることができる。

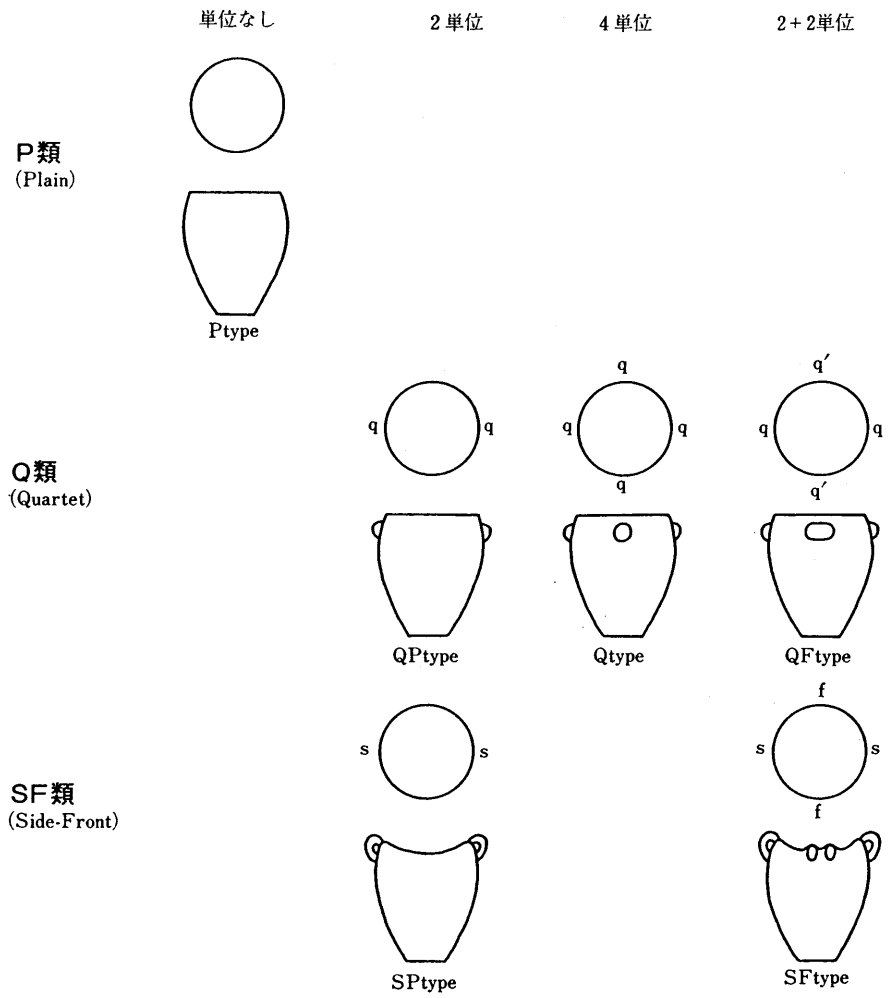
このように、文様の縦の割りつけ原理と単位数をもとにして宇津内 II a 式土器进行分类すると、以下のようなになる (第 5 図)。

### P 類 (Ptype)

一定の単位数をもたないもの。

### Q 類 (Qtype・QPtype・QFtype)

4 単位とそのバリエーションからなるもの。



q は 4 単位均等の文様, f は「正面」に位置する文様, s は「側面」に位置する文様をあらわす。

第 5 図 文様の縦の割りつけに基づく宇津内Ⅱa 式土器の分類

### SF 類 (SFtype・SPTtype)

側面－正面観を強調した 2+2 単位と、そのバリエーションからなるもの。

型式学的特徴からすると、Q 類は P 類から、SF 類は Q 類からの発展形としてとらえることも可能である。また後述するように、宇津内Ⅱb 式土器は SF 類のみから構成される。よって、型式学的には P 類→Q 類→SF 類の変遷が仮定できる。

### 3) 遺構－一括出土土器群の検討

文様の縦の割りつけ原理を基準に宇津内Ⅱa 式土器を分類した場合、P 類・Q 類・SF 類の 3 者に分類が可能であり、その型式学的変遷は P 類→Q 類→SF 類と仮定できた。これらの 3 者は一括土器としてはどのようなまとまりを有するのであろうか。遺構に伴って 2 個以上の完形土器が出土した一括出土例(注 9)を対象に、P 類・Q 類・SF 類の 3 者が、一時期におけるセットとしてはどのような組み合わせを有するのか見てみよう(第 6 図)。

#### a) I 群：P 類・Q 類のみから構成され、SF 類を含まないセット

斜里町ピラガ丘遺跡第Ⅱ地点 24 号竪穴床面出土土器群(米村ほか 1972)は、P 類 2 例・Q 類 1 例のみから構成され、このセットの好例となっている。先述のように、「元町 2 式」の多くが P 類・Q 類からなる事実も、この時期の存在を示唆している。

#### b) Ⅱ群：P 類・Q 類と SF 類が混在するセット

栄浦第一遺跡(藤本編 1985) Pit58a は P 類・Q 類・SF 類を全て含み、このセットの好例となっている。先に仮定した P 類→Q 類→SF 類という変遷を考慮すると、このⅡ群は P 類を含むセットと含まないセットに分けられる可能性がある。

#### c) Ⅲ群：SF 類のみから構成されるセット

宇津内遺跡.A 地点 10 号竪穴床面出土土器群は 4 例全て SF 類であり、このセットの存在を示している。

第 6 図はセット内における P 類・Q 類・SF 類の 3 者の組み合わせパターンを基準に各セットを序列化したものである。

この図の序列を編年とする前に、口縁部・胴部に施された貼付文についても検討しておこう。



遺跡・遺構	P	QP	Q	QF	SP	SF
尾河台地41号石組周辺	○					
ピラガ丘第Ⅱ24号床面	○	+				
常呂川河口21号床面	+	+				
尾河台地40号石組周辺	+		+			
栄浦第一7A号埋土	○	○			+	+
栄浦第一Pit58a	+	+		+	+	+
宇津内A地点9号床面	+				+	
栄浦第二17号床面	+					+
尾河台地31号床面		+			+	+
岐阜第二15号A面床面		+				○
宇津内B地点2号床面			+		+	
TK73 470号土壌			+		○	○
中ノ島H-46 2号墳墓			+			+
栄浦第一14号床面			+			◎
常呂川河口Pit260				+	+	
宇津内B地点1号床面				+		+
尾河台地12号墓					◎	
宇津内B地点3号床面					○	
尾河台地19号床面					○	
尾河台地6号墓					○	
尾河台地11号墓					○	
尾河台地7号床面					○	+
栄浦第一8号埋土					+	+
栄浦第一Pit35c					+	+※
TK67Pit32					+	+
ピラガ丘第Ⅱ27号床面					+	+
尾河台地29号床面					+	+
尾河台地7号墓					+	○※
宇津内A地点10号床面					+	◎
栄浦第一4F号埋土						○
栄浦第二Pit87						○

＋・○・◎はそれぞれ1個体・2個体・3個体をあらわす。

※栄浦第一Pit35cのSFtypeは「側面」の文様が脱落した特殊な例。尾河大地7号墓のSFtypeは宇津内Ⅱb式を含む。

第6図 遺構一括出土宇津内Ⅱa式土器分類表（文様の割りつけによる）

#### 4) 貼瘤文・貼付文と縦の単位

貼瘤文・貼付文は宇津内式土器に特徴的な文様のひとつであり、佐藤氏や宇田川氏がその変遷過程を想定して編年の指標とした文様である。これら貼瘤文・貼付文を、文様の縦の割りつけ原理と関連させながら分類してみよう（第 8 図）。

##### a) 貼瘤文

円形や、縦長・横長の楕円形をした瘤状の貼付文である（第 9 図 5・8）。口唇に接していたり、口唇より上部にせりだしているものは、貼瘤文と言うよりはむしろ口唇上の突起であるので、第 8 図では貼瘤文として扱っていない。

##### b) 貼付文

###### i) 縄線文に平行する貼付文

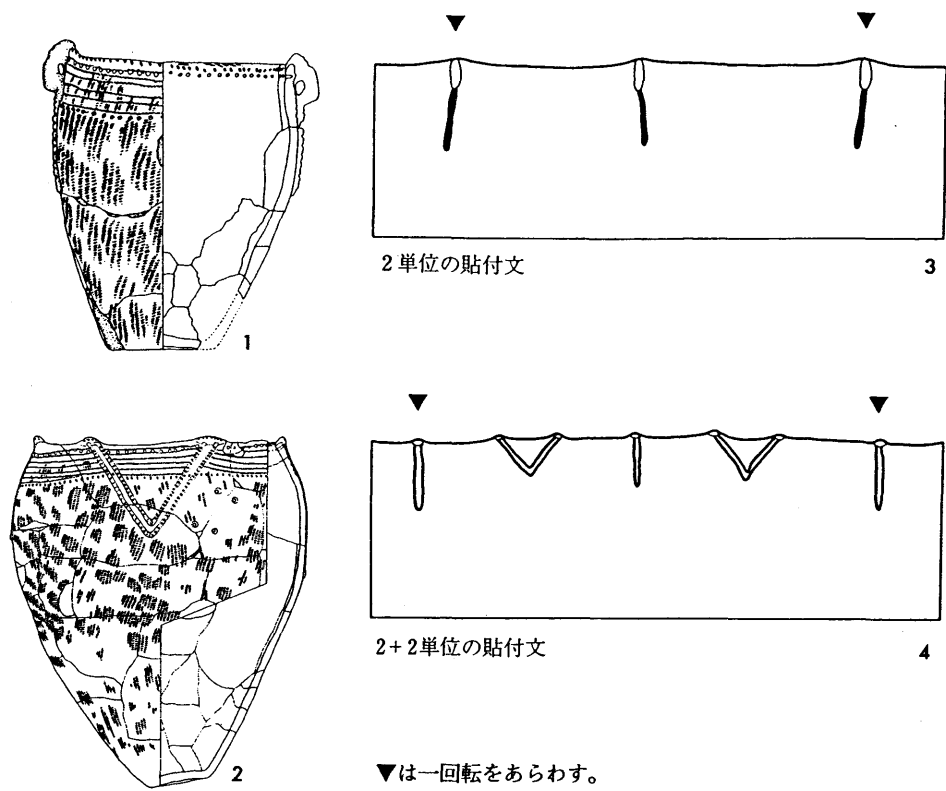
縄線文に平行して（多くの場合は水平に）貼付文が施されているもの。縦の単位は意識されていない。

###### ii) 縦 2 単位の貼付文

180° 向かい合う位置に一对の同じ意匠の貼付文が施されているもの（第 7 図 1・3、第 9 図 7・11・12）。互いに横に連結する例もあるが、縦の単位としては 2 単位といえる。多くの場合では、2 ないし 2+2 単位の口唇部突起によって割りつけられた縦の単位に従って施されているため、第 8 図の表の中の例では平縁に施された例はないが、平縁に施される例も例外的に存在する。ただし、いずれの場合にも縦 2 単位の貼付文は側面ないしは正面を強調する結果となるため、SF 類に分類できる。

###### iii) 縦 4 単位ないしは 2+2 単位の貼付文

90° 毎に縦の文様単位を有する貼付文（第 7 図 2・4、第 9 図 10・13・14）。4 単位すべて同じ意匠のものと、180° の対どうしで意匠が異なる 2+2 単位のものがある。互いに横に連結する例も多い。ほとんどの場合、2 や 4、2+2 単位の口唇部突起によって割りつけられた縦の単位に従って施されるため、SFtype に特徴的な文様であるが、平縁に 4 単位の貼付文が伴うなど、Qtype に分類できる例も例外的に存在する。



第7図 宇津内Ⅱa式土器の貼付文の展開図

縮尺不同。3は1の、4は2の展開図。 1: 尾河台地19号 2: 尾河台地29号

遺跡・遺構	P類	Q類				SF類			
		貼瘤・貼付なし	貼瘤のみあり	縄線平行貼付	縦4単位貼付	貼瘤・貼付なし	貼瘤のみあり	縄線平行貼付	縦2単位貼付
尾河台地41号石組周辺	○								
ピラガ丘第Ⅱ24号床面	○	+							
常呂川河口21号床面	+		+						
尾河台地40号石組周辺	+			+					
柴浦第一7A号埋土	○		+	+		+	+		
柴浦第一Pt58a	+	+	+			+		+	
宇津内A地点9号床面	+							+	
柴浦第二17号床面	+							+	
尾河台地31号床面		+				○			
岐阜第二15号A面床面			+				+		+
宇津内B地点2号床面			+				+		
TK73 470号土礫			+				◎		
中ノ島H-46 2号墳墓			+				+		
柴浦第一14号床面					+	+			○
常呂川河口Pt260			+						
宇津内B地点1号床面		+						+	
尾河台地12号墓						+		○	
宇津内B地点3号床面						+	+		
尾河台地19号床面						+			
尾河台地6号墓						+	+		
尾河台地11号墓						+	+		
尾河台地7号床面							○		+
柴浦第一8号埋土						+			+
柴浦第一Pt35c								+	+
TK67Pt32						+			+
ピラガ丘第Ⅱ27号床面						+	+		
尾河台地29号床面							+		+
尾河台地7号墓							+		○
宇津内A地点10号床面								○	○
柴浦第一4F号埋土									○
柴浦第二Pt87							+	+	

+・○・◎はそれぞれ1個体・2個体・3個体をあらわす。

第8図 第6図の分類と貼付文の意匠・単位の関係

ここで注意しておくべきことは、貼瘤文・貼付文は、i) の縄線文に平行する貼付文を除きほぼ全て口縁部の突起、すなわち縦の単位に従って割りつけられている点である。すなわち、貼付文を含む文様の縦の割りつけを第一に規定しているのは口唇部の突起であり、貼瘤文・貼付文の意匠を分析する際にはその点に注意を払わなければならない。逆に言えば佐藤・宇田川両氏の着目した「貼付文の発達過程」は、「文様の縦の割りつけ原理」に規定された法則性の中に包摂される現象であるともいえるのである。

次に先の第6図の序列はそのままに、各セット内の土器の貼瘤文・貼付文の意匠を分類すると第8図になる。注目すべきは先のⅡ群（P類・Q類とSF類が混在するセット）において、P類を含むセットには4ないしは2+2単位の貼付文を持つ土器がみられない点である。すなわちP類の土器と4ないしは2+2単位の貼付文を持つ土器は同時期には共存しない可能性が高い。

### 5) 宇津内Ⅱa式土器の編年

以上の分析から、宇津内Ⅱa式の各セットは、以下の4段階に編年できる（第9図）。

#### Ⅰ期

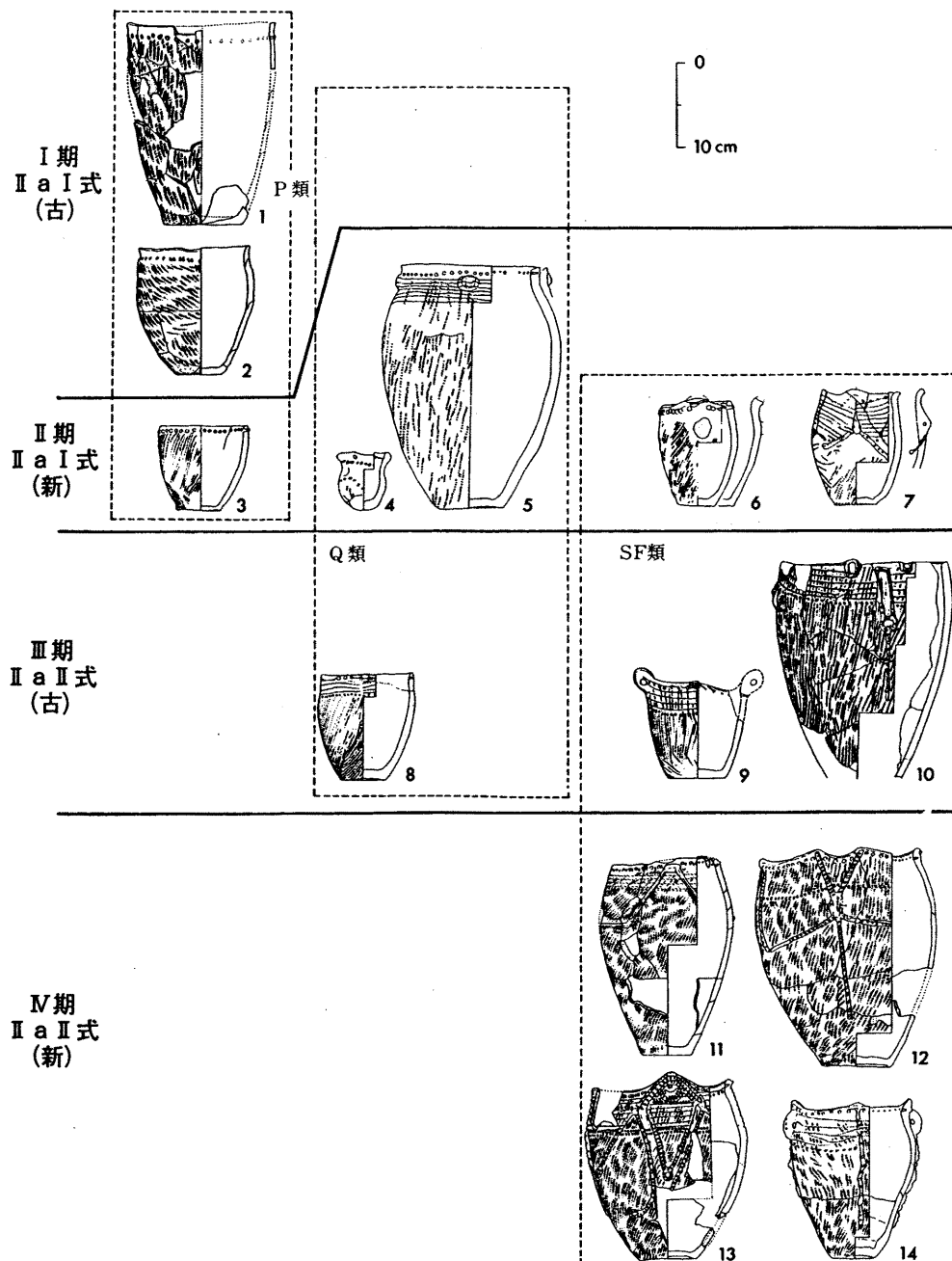
セットがP類・Q類のみからなる時期。ピラガ丘遺跡第Ⅱ地点24号竪穴の例からみると、セット中のP類の割合がQ類より多いようである。

#### Ⅱ期

Ⅰ期のセットにSF類が加わる時期。ただしセット中に占めるSF類の割合がP類・Q類よりも少ないようである。4ないしは2+2単位の貼付文を持つSF類はまだ存在しない。栄浦第一遺跡7A号住居址埋土、同Pit58aが代表的な例である。

#### Ⅲ期

Ⅱ期のセットのP類が消滅し、4ないしは2+2単位の貼付文を持つSF類が出現する時期。セット中に占めるSF類の割合がQ類よりも多くなるようである。代表的な例として、常呂町岐阜第二遺跡15A住居址床面、栄浦第一遺跡14号住居址床面がある



第9図 宇津内IIa式土器編年図

1～3 : Ptype 4・6 : QPtype 5 : QFtype 6・11 : SPtype 9 : SFtype (貼瘤文のみあり)  
 7・12 : SFtype (2 単位の貼付文) 10・13・14 : SFtype (2+2 単位の貼付文)  
 1・2 : 尾河台地41号 3～7 : 栄浦第一 Pit58a 8～10 : 岐阜第二 15号A 11～14 : 宇津内 A10号

## IV期

Ⅲ期のセットの Q 類が消滅し、SF 類のみになる時期。後続する宇津内Ⅱb 式がほぼ SFtype のみからなる点を考慮すると、新しい時期になるほどセット中の SPtype の割合が減少し、SFtype が増加すると仮定できる。ただし、尾河台地 7 号墓のセット中では、宇津内Ⅱb 式とともにⅡa 式の SPtype が存在しており、後述する岐阜第三遺跡（藤本編 1977）22 号の例からみても、宇津内Ⅱa 式では SFtype のみでセットが構成されるまでには至らないようである。宇津内遺跡 A 地点 10 号住居址床面などが代表的な例である。

I～Ⅳ期の分類基準にあてはまらない内容のセットもある。セットを構成する個体数が少なく、一時期における本来のセットの様相が確認できないことに原因の多くが求められると思われる。ただし、常呂町 TK73（常呂川河口）遺跡（武田 1995）470 号土壇の例などのように、ある程度の個体数を有していても分類基準を満たさないセットもある（第 8 図）。この TK73 遺跡 470 号土壇を例に取れば、このセットは縦の単位の分類ではⅢ期に含まれるが、4 ないしは 2+2 単位の貼付文を持つ土器を含んでいない。これはⅡ期～Ⅲ期の間期的な様相を示している。

このように筆者の I～Ⅳ期の編年は、各期の分類基準を満たさないセットが散見される、という点で検討の余地を残しているともいえる。しかし、各期の分類基準を満たさない中間的な内容をもつセットの存在は、宇津内Ⅱa 式における型式学的変遷の連続性の強さを反映したものであって、宇津内Ⅱa 式における型式学的変遷の過程は、縦の文様の割りつけ原理を柱とする型式の構造が緩やかに変化するかたちで推移していくものであると筆者は考える。少なくとも、従来の編年よりも本章の編年の方が宇津内式土器の変遷のすがたを実態に即してとらえていることは明らかであろう。

以上の I～Ⅳ期の各段階を細別型式として再編成してみよう。型式としてのまとめ、という点で、P 類と 2+2 単位の貼付文を有する土器とが共伴しないことを重要視してみたい。すなわち I・Ⅱ期とⅢ・Ⅳ期の間に細別型式を設定して、それぞれ宇津内ⅡaⅠ式・ⅡaⅡ式とし、それぞれに古段階・新段階を設定する。つまり、

- ・ I 期・・・宇津内ⅡaⅠ式古段階
- ・ Ⅱ期・・・宇津内ⅡaⅠ式新段階
- ・ Ⅲ期・・・宇津内ⅡaⅡ式古段階
- ・ Ⅳ期・・・宇津内ⅡaⅡ式新段階

のようになる。

## 6) 「元町 2 式」土器との関係

「元町 2 式」と、宇津内ⅡaⅠ式古段階は、器形・文様の上で非常に共通点が多く、両者の変遷はスムーズにとらえられる。詳述はしないが、例えば、前節で分類した元町 2・3 遺跡Ⅲ類と、尾河台地遺跡 40 号石組周辺出土の土器群（金盛ほか 1983：第 152 図 1・2）を比較してみれば共通点が多いことは明らかである。

「元町 2 式」土器と宇津内ⅡaⅠ式土器との間の変遷をとらえる上で注意すべき点は、両型式間における縦の文様単位の関係である。「元町 2 式」土器では突起を有する例が存在し、それらの単位は 2 単位、4 単位である。それに対し、宇津内ⅡaⅠ式古段階のセットには 4 単位の Qtype がそ見られるものの、平縁の例であって突起を有する例は確認できない。突起がみられるようになるのは、次の宇津内ⅡaⅠ式新段階からである。宇津内ⅡaⅠ式新段階にみられる 2+2 単位の突起と、「元町 2 式」の 2 ないしは 4 単位を直接連続させることで、これらの間に位置する宇津内ⅡaⅠ式古段階の実在を否定することも一見可能なようにみえるが、筆者は以下に記すような理由から、縄文晩期以来の 2 ないしは 2+2 単位の突起と、宇津内式のそれを直接連続させることはせず、平縁のみからなる宇津内ⅡaⅠ式古段階を実在するものとみなす。

「元町 2 式」土器に見られる突起の形態の多くは B 状突起、ないしは突起の頂部より垂下する縦の太い貼付帯を伴う突起であり、縄文晩期末～続縄文初頭の土器群の伝統を受け継ぐものである。このような形態の突起は、宇津内ⅡaⅠ式には認められない。この他「元町 2 式」には、B 状の刻みや縦の貼付帯を伴わない 4 単位の突起も栄浦第二遺跡 13 ハ号埋土の例などに存在する。しかし宇津内ⅡaⅠ式の突起の配置・形態はこれらとは異なっており、4 単位均等の突起というものはまれである。宇津内ⅡaⅠ式の 4 単位=Qtype は平縁が基本であって、例外的に見られる 4 単位ほぼ均等の突起を有する例は 2+2 単位の SFtype のバリエーションと考えられるものが多く、それらは第Ⅲ期以降に位置づけられる。

このように、「元町 2 式」土器に見られる 2 ないし 4 単位の突起は、縄文晩期からの伝統上に位置づけられるものであって、これらの突起は幣舞式以降衰退し、宇津内ⅡaⅠ式古段階には一旦消滅する。その一方、宇津内ⅡaⅠ式新段階以降に見られる 2 ないしは 2+2 単位の突起の形態は、縄文晩期的な特徴を有しておらず、「元町 2 式」との間にはわずかであるが空白・断絶が生じる。

ちなみに以上のように考えると、縄文晩期の 2 ないし 2+2 単位と宇津内式のそれは系統的に連続しないことになるが、文様単位以外の点では道東部の型式変遷には強い系統性が認められるわけであるから、文様単位の断絶のみを強調することにあまり意味はない。突起の消滅をもって編年の一段階が設定できる、という事実こそが重要である。また、このような「平縁化」は道東



部のみならず全道的な傾向として指摘できるようであり、その点も注意を要する。

## 5. 宇津内Ⅱb式土器の編年

### 1) 宇津内Ⅱa式とⅡb式の差

宇津内Ⅱb式について検討する前に、宇津内Ⅱa式とⅡb式の差異について金盛氏の指摘（金盛 1973、同 1982）を引用するとともに、少し補足を加えてみよう。

#### a) 器形

口唇部断面形が、Ⅱa式は平らか丸味を帯びているのに対し、Ⅱb式では鋭角をなす（金盛 1973）。

底部はⅡa式が平底・上げ底両方の形態を有するのに対し、Ⅱb式では上げ底のみになる（金盛 1973）。

この2点に加えて、ここでは壺型の器形はⅡa式にほぼ限られる点を指摘しておきたい。

#### b) 文様

Ⅱa式は突瘤文を有するものが多く、Ⅱb式では失われる（金盛 1982）。

貼付文は、Ⅱa式は断面形が半円形であるのに対し、Ⅱb式の断面は三角形で、器面を縦横にめぐらされる（金盛 1973）。

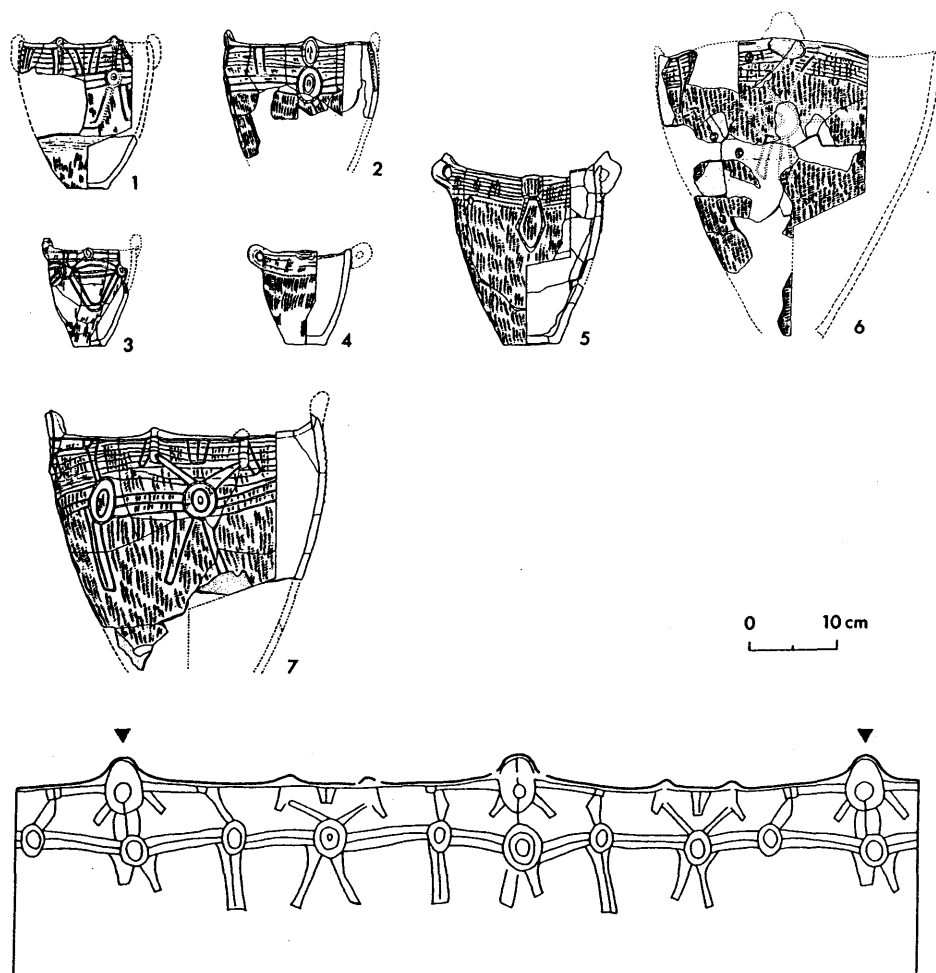
ここでは以下の点を補足しておく。

地文の原体は、Ⅱa式がRLの縄文の例を主体にしながらも、LRの縄文、Rの撚糸文の例を含むのに対し、Ⅱb式では条が縦走するRLの縄文の例にほぼ統一される。

施文順は、千代肇氏や金盛氏も指摘している（千代 1984、金盛 1996）が、Ⅱa式の多くが地文→貼付文・貼瘤文→縄線文→突瘤文・縄端圧痕文の順であるのに対し、Ⅱb式では、多くの例が地文→縄線文→貼付文と、縄線文と貼付文の施文順序が逆になっている。これは、口縁部の縄線文が、いわば「地文化」してしまったことを意味する。

貼付文の形状としては、断面形の差異の他に、貼付文上に施された縄端の刺突の、細かさに差がある。Ⅱb式の貼付文上の刺突は施文の間隔が細かく、施文も浅い。これはⅡb式の次の段階での「微隆起線化」につながってゆく。

貼付文の意匠をみると、Ⅱb式では口唇部直下に貼付文が口唇に沿ってめぐっているという特徴がある。縦の単位については後述する。



▼は一回転をあらわす。

8

遺跡・遺構	SP	SF	SF+4
岐阜第三22号床面直上	+	+	+
常呂川河口Pit261		○	
宇津内A地点5号床面		○	
尾河台地26号床面		○	+
柴浦第一Pit16a		+	+
宇津内A地点3号床面		+	+
尾河台地3号床面		+	+
尾河台地27号床面		○	●
尾河台地9号床面		+	◎
宇津内A地点2号床面			○
尾河台地15号床面			○

+・○・◎・●はそれぞれ1個体・2個体・3個体・5個体をあらわす。

第10図 上：尾河台地遺跡27号縦穴床面出土土器群（宇津内ⅡbⅠ式）

下：遺構一括出土宇津内Ⅱb式土器分類表（文様の割りつけによる）

8は7の展開図。 4・5：SFtype 1～3・6・7：SF+4type

宇津内式土器がⅡa式・Ⅱb式の2型式に大別されることについては異論はないであろう。しかし言うまでもないがⅡa式とⅡb式は型式学的な連続性が強い。実際に尾河台地遺跡7号墓のセット内ではⅡa式とⅡb式が共伴している。Ⅱa式・Ⅱb式が共伴するという事実は、Ⅱa式・Ⅱb式の連続性をよくあらわすと同時に、共伴例がこの1例のみであることはまた、Ⅱa式・Ⅱb式という大別の正しさを示してもいと筆者はとらえている。

## 2) 縦の文様単位数

宇津内Ⅱb式土器(第10図)は、Ⅱa式と同じ基準で縦の文様単位による分類を行うと、ほぼ全ての個体がSF類に分類される。宇津内ⅡaⅡ式新段階との違いは、Sptypeがほぼ消滅し、SFtypeのみでセットが構成される点である。特に口唇部の突起数に注目すると、一部の例外を除き、全ての例が2+2個、または2+4個(「正面」に位置する突起が2個1組となっている)の突起を有するようになる。

また、口縁部・胴部文様にも変化が現れる。口唇直下に貼付文が付加されることは先に述べたが、それ以上に重要な点は、2+2単位の口縁部～胴部文様の各単位と単位をつなぐ中間部に、新たに貼付文による縦の割りつけが加わることである(SF+4type)(第10図1～3・6～8)。新たに割りつけられた部分の意匠には、口縁部に縦の貼付文が短く施されるものと、同心円状の貼付文が2+2単位の単位間を連結するように施されるものがある。このように、新たな割りつけが加わるSF+4typeであるが、2+2単位の割りつけ原理そのものは変化していない。

なお、後述するように、後続する後北C<sub>1</sub>式併行の土器型式では全ての個体がSF+4typeとなるので、型式学的にはSFtypeからSF+4typeへという変遷が仮定できる。

## 3) 遺構一括出土土器群の検討

遺構に伴う一括土器群内におけるSFtypeとSF+4typeのあり方を示したのが第10図の表である。SFtype主体のセットからSF+4type主体のセットへ、という連続的な変遷をみることも可能である。ただし、岐阜第三遺跡22号(藤本編1977)の例ではⅡa式に近いSptypeと、SF+4typeが共伴している点を考慮すると、SFtype・SF+4typeを指標として宇津内Ⅱb式の細別型式を設定するのは難しいようである。ここでは、宇津内Ⅱb式土器の型式学的変遷の最終段階では、2+4個の突起を有するSF+4typeがセットの主体を占めるようになることを指摘するにとどめたい。

## 4) 微隆起線を有する土器群

宇津内Ⅱb式に関連して、これまで検討してきた宇津内Ⅱb式よりはやや新しい様相を示す土器群がある。貼付文上の刻みが消滅し、貼付文がいわゆる「微隆起線」になる土器群である。こ

これらの土器群の縦の文様単位数は、口縁部の突起は 2+2 単位（多くの例は 2+4 個）であり、全ての土器が SF+4type に分類される。

これらの土器群は、型式学的には 2 つのタイプに分類可能である。

微隆起線土器 I 類：SF+4type の宇津内 II b 式土器の、貼付文が微隆起線に変化したもの（第 10 図 2）。口縁部縄線文が消滅する例もある。

微隆起線土器 II 類：I 類の土器の地文として帯縄文が施されるもの（第 11 図 2）。口唇直下の微隆起線が横に 2 本施されるようになる。口縁部・胴部の微隆起線は横・斜めへの連関を強め、より複雑化する。

これらの土器群は、型式学的には微隆起線土器 I 類→II 類という変遷が仮定できる。編年については、出土数が少なくまとまった出土例もあまり確認されていないので細別型式として設定しうるか否か判断が難しい。ここでは以下のように考えておこう。

まず微隆起線土器 I 類については、尾河台地遺跡 27 号竪穴では一般的な宇津内 II b 式と共伴しており、細別型式としては宇津内 II b 式の範疇内でとらえるのが妥当であろう。

微隆起線土器 II 類については、一般的な宇津内 II b 式との直接的な層位的関係がとらえられる例はない。しかし、後述する後北 C<sub>I</sub> 式との関係も含めると、以下の例がある。

- a) 一般的な宇津内 II b 式と共伴する例がない。
- b) 岐阜第二遺跡 Pit28（藤本・宇田川編 1982）（第 11 図）や栄浦第一遺跡 pit106（武田編 1995）では、微隆起線土器 II 類と後北 C<sub>I</sub> 式が共伴する。
- c) 常呂川河口遺跡では、Pit22a（宇津内 II b 式）を切って Pit22（後北 C<sub>I</sub> 式）が構築されている。

以上の a) ～c) の事例からすると、これら微隆起線土器 II 類は、これまでに検討した宇津内 II b 式に後続する別型式の土器群と考えてよいだろう。となると後北 C<sub>I</sub> 式との関係が問題となってくる。次節でさらに検討しよう。

## 6. 宇津内式土器と後北 C<sub>I</sub> 式土器の関係

微隆起線土器 I 類において生じた、擬縄貼付文から微隆起線への変化は、道央の後北 B 式土器から C<sub>I</sub> 式土器への変遷で認められる、同様の変化と同期したものであろう。また、微隆起線土器 II 類では、帯縄文が施され、微隆起線が複雑さを増すなど、後北 C<sub>I</sub> 式土器との「折衷」ないしは「融合」ともいうべき内容が見て取れる。このように個々の文様に注目した場合、微隆起

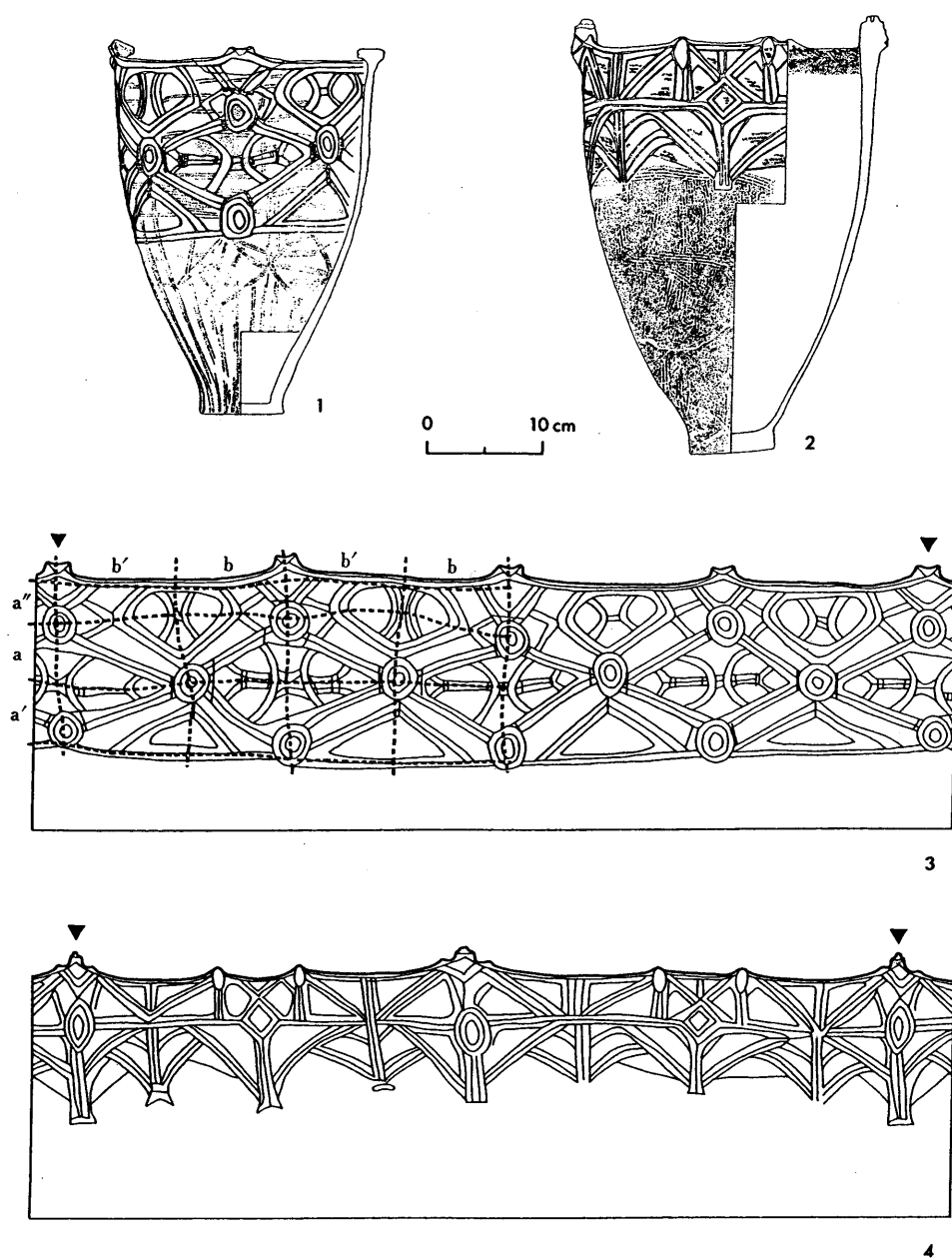
線土器Ⅱ類は一見、宇津内Ⅱb式土器は後北C<sub>1</sub>式土器へとスムーズに連続・交替する過程の中の最終段階として位置づけられるようにも思われる。では前述の微隆起線土器Ⅱ類は一般的に考えられているとおり後北C<sub>1</sub>式として理解すべきなのだろうか。

実は微隆起線土器Ⅱ類の文様割りつけ原理においては、後北式系統とは異なる宇津内式の伝統が維持されている。後北C<sub>1</sub>式土器と隆起線土器Ⅱ類が共伴している岐阜第二遺跡 pit28（第11図）を例に、両型式の文様の割りつけ原理について分析し、比較してみよう。

まず後北C<sub>1</sub>式（第11図1・3）である。胴部の文様帯に施された文様は、縦・横両方の単位に分割してとらえることができる。横方向の単位の構成についてみると、第11図3で横方向の3段の帯に分割された中央の単位をaとすれば、下の段はaの横方向の線対称の単位a'、上の段はaの横方向の線対称が変形した単位a''としてとらえることができる。一方縦方向の単位は、口唇部突起を基準に土器を縦に8等分した単位の一つをbとすると、bに隣り合う縦の単位は、bの縦方向の線対称の単位b'としてとらえられる。これは突起を中心とした、b+b'という縦の文様単位が4つあるものとしてまとめることも可能である。このように、胴部文様帯において、横方向には文様単位が多段化(注10)し、縦方向には各単位が線対称な4つの単位で構成される文様構成を持つ土器は、後北C<sub>1</sub>式では一般的なものである。

もう一方の微隆起線土器Ⅱ類（第11図2・4）についてみよう。まず文様の縦の割りつけであるが、口唇上の突起は2+2単位で、宇津内Ⅱb式と同じである。また、各突起の下部にみられる同心円+長方形の微隆起線による意匠も、宇津内Ⅱb式土器と基本的に同じであり、2+2単位を構成している。しかし、2+2単位の、各突起下の縦のモチーフをつなぐ斜めの微隆起線は線対称的に構成されており、後北C<sub>1</sub>式の縦の割りつけ原理の影響が認められる。一方、横の割りつけであるが、地文には横方向の帯縄文が施され、後北C<sub>1</sub>式と同じ多段化された胴部文様帯が意識されている。しかし微隆起線の文様は、横方向の2単位から構成されているとみることも可能ではあるが、上・下の「単位」間で幅・文様意匠の差が大きく、多段化もしていない。すなわち、文様の横の割りつけ原理についても後北C<sub>1</sub>式の影響が認められるが、後北C<sub>1</sub>式そのものとは異なっているといえる。

以上のように、微隆起線土器Ⅱ類の文様の割りつけ原理は、後北C<sub>1</sub>式の影響を受けつつも宇津内Ⅱb式の伝統が維持されたものになっている。



第 11 図 岐阜第二遺跡 Pit28 出土土器群

3 は 1 の、4 は 2 の展開図。1 : 後北 C<sub>1</sub> 式 2 : 宇津内 II b II 式 (微隆起線土器 II 類)

本章で微隆起線Ⅱ類とした土器群は、従来「江別 C<sub>1</sub> 式」(藤本 1982a : 19)、あるいは「後北 C<sub>1</sub> 式に相当する土器群」(金盛 1982) としてとらえられてきた。微隆起線土器Ⅱ類の器形・個々の文様・割りつけ原理に認められる後北 C<sub>1</sub> 式の影響をどう評価するかという点が問題になってこよう。本章では、微隆起線土器Ⅱ類には宇津内Ⅱb 式の文様の割りつけ原理の伝統が維持されている点を重視し、後北 C<sub>1</sub> 式とは別型式ととらえておきたい(注 11)。具体的には、以下のように細別型式を設定する。

- ・宇津内ⅡbⅠ式・・・前節で検討した宇津内Ⅱb 式と微隆起線土器Ⅰ類
- ・宇津内ⅡbⅡ式・・・微隆起線土器Ⅱ類

すなわち宇津内Ⅱb 式の定義を従来よりも拡大し、網走地域では後北 C<sub>1</sub> 式と宇津内ⅡbⅡ式が共伴するととらえるわけである。このように宇津内ⅡbⅡ式土器は、後北 C<sub>1</sub> 式が網走地域に分布を拡大し、影響を強める(注 12)中であって、宇津内式の系統上に位置する土器型式の最終末のすがたである、という位置づけが与えられよう。後北 C<sub>1</sub> 式と宇津内Ⅱb 式の関係をこのようにとらえる点において、筆者の編年対比は、従来の見解とは異なることになる(注 13)。

一方、土器製作時における異系統文様の伝習、という面に着目すると、宇津内ⅡbⅡ式と後北 C<sub>1</sub> 式では、帯縄文・微隆起線などの製作技法上はほとんど差がないにも関わらず、文様の割りつけ原理が異なっている点が注目される。すなわち、後北 C<sub>1</sub> 式の製作技術を持つ土器製作者が、宇津内Ⅱb 式の文様の割りつけ原理に従って土器を製作したことになる。宇津内ⅡbⅡ式の出土例が少ないこともあって多くのことはいえないが、一つの土器製作集団の中で、ごく短期間の間であるが、文様の割りつけ原理を異にする 2 つの土器型式が作り分けられていた可能性(注 14)などが考えられよう。このように、宇津内ⅡbⅡ式土器と後北 C<sub>1</sub> 式土器の間で認められる土器の関係は、その背景となる道東部と道央部の間での人や土器の動きを考える上で、興味深い問題を提起する。

なお、宇津内ⅡbⅡ式の類例としては、栄浦第一遺跡 pit106、常呂川河口遺跡 pit32 などの例があり、先述したように栄浦第一の例では、やはり後北 C<sub>1</sub> 式と共伴している。

## 7. 小結

### 1) 編年と型式変遷過程のまとめ

以上、宇津内式土器の検討を中心に、網走地域における縄文時代晩期末から続縄文時代前半期

に至る土器編年を概観してきた。本章で検討・設定した土器型式を時系列順に並べると以下のようになる。

- ・幣舞式後半段階（栄浦第二 13 ホ号）
- ・「栄浦第二・第一遺跡の土器群」(注 15)
- ・「元町 2 式」
- ・宇津内ⅡaⅠ式 古段階・新段階
- ・宇津内ⅡaⅡ式 古段階・新段階
- ・宇津内ⅡbⅠ式
- ・宇津内ⅡbⅡ式（後北 C<sub>1</sub> 式併行）

なお本論では、文様の割りつけ原理と文様単位数の問題を、重要な鍵として編年を行ってきた。上記の型式群における、文様の縦の割りつけ原理と文様単位数の変遷についてまとめると以下のようになる。

- a) 幣舞式後半段階にみられた 4 単位、2 および 2+2 単位の口唇部突起は、栄浦第二・第一遺跡の土器群から「元町 2 式土器」にかけて衰退し、宇津内ⅡaⅠ式古段階ではほぼ消滅する。
- b) 宇津内ⅡaⅠ式古段階では、縦の文様単位は一定の単位数なしの例と 4 単位の例のみであり、文様の縦の割りつけ自体もあまり意識されていないが、ⅡaⅠ式新段階以降、2+2 単位の口唇部突起の発達とともに口縁部・胴部文様にも側面一正面観を強調した縦の割りつけ原理が次第に強く働くようになり、宇津内ⅡaⅡ式古段階では口縁部・胴部に貼付文による 2+2 単位の文様出現する。
- c) 宇津内ⅡaⅡ式新段階になると、文様の縦の割りつけ原理は全て 2+2 単位を基本としたものになる。
- d) 続く宇津内ⅡbⅠ式になると、口縁部・胴部文様における縦の単位間に新たに縦の割りつけを加えた土器が出現する。次の宇津内ⅡbⅡ式では、全ての土器がこの種の割りつけを有するようになる。

## 2) 文様の割りつけ原理が有する性格とその評価

さらに本章では、異系統文様・技術が新たに伝習される際に、在地の文様の割りつけ原理の伝統・系統性が土器製作者のなかで保持される点にも注目した。具体的には、網走地域の宇津内ⅡbⅡ式では後北 C<sub>1</sub> 式の製作技術と宇津内Ⅱb 式の文様割りつけ原理が一つの土器の中に共存していることに注目し、その現象の解釈として、一つの土器製作集団内で異なる系統の土器型式が作



り分けられている可能性を指摘しておいた。

近年、土器の製作技術論的側面に注目することにより、土器製作者のレベルでヒト・土器・情報の動きを解説しようとする研究が盛んである（石井 1997a）。これらの研究で核となる方法とは、土器型式間で交渉が生じる際に、土器の諸属性の中に「伝わりやすい属性」と「伝わりにくい属性」があることを仮定した上で、特に後者の「伝わりにくい属性」が伝習・模倣されているか否かに着目して土器製作者の接触強度・様態を判断する、というものである。先に筆者が提示した「作り分け」の解釈もこの方法論の延長線上にある。詳述すれば以下になるだろう。

宇津内ⅡbⅡ式には非在地系の特徴が多くもたらされている。とりわけ「帯縄文」の施文技法や、微隆起線の細かな特徴など、「伝わりにくい属性」に分類できる特徴がほぼ正確に伝習されている点からすると、その背景として後北式系統と宇津内式系統の土器製作者どうしの直接的な接触が想定できる。しかしその一方で、「視覚的」属性で本来は「伝わりやすい」はずの文様割りつけ原理は完全には受け入れられず、在地の伝統が保持されている。技術論的には一見矛盾するようなこの現象は、「情報を受容する側の意志」という視点を導入することにより解釈可能となる。すなわち、宇津内ⅡbⅡ式の製作者が伝統的な文様割りつけ原理を維持しようとするのを、ある種の「価値判断」に基づく意図的な行為としてとらえるのである。

このように、本章では近年の方法論を援用しつつ、そのような方法論から推定される型式伝播のパターンとは一見矛盾するような現象がある点を指摘した。筆者はそれをある種の「価値判断」として解釈したが、実は論理的には別の解釈も可能である。それは、「文様割りつけ原理は一見したところわかりにくい属性であるから、『視覚的属性』であっても、『伝わりにくい属性である』」という考え方である。このように解釈すれば本章での現象も製作技術論で説明可能となるが、今度は別の問題が浮上する。すなわち、ある属性に対し「伝わりやすい」／「伝わりにくい」という分類を客観的に行うことは難しい、という問題である。これは実際に過去の土器作りの場を観察できない以上やむを得ないともいえるが、実際に属性の「伝わりやすさ」の客観的判定が難しくなるのであれば、土器の製作技術論的分析に基づいて復元された情報伝達のありかたを一般化・モデル化する際には問題が生じることになってくる(注 16)。

ただし誤解のないように言っておくと、筆者は近年盛んに行われている製作技術論的分析や、それに基づいたモデル化を行うこと自体に対して批判的態度をとるつもりはない。むしろその可能性を認め、今後そのような視点・方法を積極的に活用したいと考えている。ここで指摘したかったのはそのような方法を実際に運用する際の留意点である。

#### 注

- (1) 「前北式」「後北式北見型」として把握されてきた道東の土器群が、今日提唱されている続縄文土器型

- 式へと整理・編年されてゆく学史的経緯については、大沼忠春氏（大沼 1977、1982c）、金盛典夫氏（金盛 1982）、工藤研治氏（工藤 1994）らが詳細にまとめている。
- (2) 土器の文様における縦の割りつけ原理と単位数の問題を取り上げる上で、筆者は鈴木公雄氏（SUZUKI1970）、谷井彪氏（谷井 1979）、今村啓爾氏（今村 1983）の論考を参考にした。むろん、文様の割りつけ原理や単位に関する理解に手落ちがあれば、全て筆者の責任である。
- (3) 常呂町教育委員会の報告書で「栄浦第一遺跡」とされている地点であるが、これはそれ以前に刊行された東京大学の報告書では栄浦第二遺跡に含まれている部分に相当する。この錯誤の原因は、北海道教育委員会作成の遺跡分布地図に遺跡の範囲が誤って記載されていたことによる（武田編 1995：3）。
- (4) これは常呂町教育委員会の報告書で言う「栄浦第一遺跡」から出土した土器群となるのだが、注 3 に記したような錯誤がありややこしいので、掲載報告書の題名を採用して「栄浦第二・第一遺跡の土器群」と呼称する。
- (5) ただし第 1 図 4 の土器のモチーフは、工字文を模した可能性がある。
- (6) 縄文晩期末～続縄文初頭における在地系土器群の系統問題に関連して興味深いのは、先にも引用した大貫氏の発言、すなわち「幣舞的な文様から変化したものには一部に地文をそのまま残したものが残り、亀ヶ岡式の影響を受けているものには地文が無いという傾向がある」という点である。実はここで「幣舞的な文様」とされている菱形の沈線文は「北部亀ヶ岡式土器」である聖山式に由来するものであるから（福田 2000）、どちらも元々の系統は「亀ヶ岡式」に由来する文様であることになる。しかし幣舞式経由の非在地系文様と、それ以外の非在地系文様との間で扱いに差が認められるとすれば興味深い事実となろう。その背景としては、当時、網走地域の土器製作者においては「幣舞的な文様」はすでに「異系統」としての評価を失っており、それらとは別に新しく導入された非在地系文様のみが「異系統」と認識され評価されていたことなどが想定されよう。このような想定は、東北地方から道央部を經由して道東部へ至る情報伝達のルートや情報流入の時期といったものを再検討する契機となろう。
- (7) 中ノ島遺跡例が、縄文晩期末と宇津内式との間の時期に位置づけられることは、金盛氏がすでに指摘しているところである（金盛 1982）。
- (8) 第 9 図 6 の土器は、吊耳と思われる突起を 1 個のみしか有しておらず、他に口縁部文様にも縦の割りつけはないが、SPtype のバリエーションとしておく。
- (9) 以下の資料は、遺構に伴う一括土器としてとらえるには疑問があるか、遺構に伴うか否か不明であったため、本章では分析対象には含めていない。天塩川川口遺跡 3 号堅穴（森田 1967）、オムサロ遺跡 78 号住居址（因幡 1977）、住吉遺跡 C 堅穴（大場・奥田 1960）、尾河台地遺跡 1 号堅穴、谷田遺跡の全例（金盛・松田 1988）。
- (10) この胴部文様における「多段化」については、金盛氏のすでに指摘しているところである（金盛 1982）。
- (11) このように、文様の割りつけ原理に基づいて宇津内式・後北式の型式区分を行う理由は、後述するよ

うに、宇津内式・後北式それぞれの胴部文様の割りつけ原理が、各々連続的・系統的に変遷していることによる。すなわち、文様の割りつけ原理は、宇津内式と後北式の伝統・系統を把握し、両者を区分するための指標として有効になる。よって、本稿では宇津内式・後北式の型式区分の上でも文様の割りつけ原理を重要視する立場をとっておきたい。なお、「共存する諸系統の土器を一括して、一型式としてよぶのが適当かどうか」という問題については、佐藤達夫氏による検討があり（佐藤 1974）、本稿でも参考にしている。

- (12) 後北式土器の割りつけ原理は、宇津内ⅡbⅠ式の時期にすでに道東に波及している（岐阜第三遺跡 22 号竪穴の例（藤本編 1977: Fig.68-1）など）。逆に、後述のように、道央の後北 C<sub>1</sub> 以前の土器群にも、道東の影響とみられる 2+2 単位の文様が認められる。このように、道東・道央間での文様割りつけ原理の影響関係は宇津内ⅡbⅡ式・後北 C<sub>1</sub> 式以前の時期から始まっているようである。
- (13) 筆者は、以前の論文（熊木 1996）で、金盛氏（金盛 1982）らの見解に従うかたちで、宇津内Ⅱb 式と後北 C<sub>1</sub> 式を前後関係としてとらえる立場をとった（熊木同上：第 3 表及び註 35）が、本文で述べたように訂正しておきたい。ちなみに熊木 1996 で「宇津内Ⅱb 式」としたのは本章でいう宇津内ⅡbⅠ式に相当する。
- (14) 網走地域の後北 C<sub>1</sub> 式を搬入品とみるならば、後北 C<sub>1</sub> 式と宇津内ⅡbⅡ式とは土器製作集団が異なる、という反論が可能かもしれない。しかし本文で述べたように宇津内ⅡbⅡ式と後北 C<sub>1</sub> 式とは製作・施文技法上の共通項が多く、宇津内ⅡbⅡ式の製作者が後北 C<sub>1</sub> 式を製作する場合に技術的な困難があるようには思えない。さらに近年、常呂川河口遺跡において後北 C<sub>1</sub> 式がややまとまって、宇津内ⅡbⅡ式よりも多く出土した状況を考慮するならば、網走地域の後北 C<sub>1</sub> 式の全てが搬入品であるという見方は逆に不自然となるであろう。
- (15) 栄浦第一遺跡 1 群・2 群土器を細別型式として設定する際の問題点は、本文に述べたとおりである。本章では栄浦第一遺跡 1 群・2 群土器を、網走地域のこの時期の段階を代表する土器群として括弧付きで提示する。
- (16) これは、如何に「伝わりにくい属性」といっても、その認定は胎土分析等の理化学的な分析を除いて、第三者の我々が肉眼で土器そのものを観察することによって行われている、というパラドックスが存在することと関係しよう。逆に言えば過去の土器製作者が搬入土器のみから（製作者どうしの接触なしに）整形・調整・施文などの「伝わりにくい」技法を復元し、模倣する可能性は皆無とは言えないのである。もっとも、実際にはそのような可能性が低いことは、近年の認知考古学理論が「暗黙知」・「身体技法」等の観点から説明しており（石井 1997a 参照）、そこは筆者も大筋で異論はない。ここではそのような認知考古学理論を実際の考古学的事象に適用する際の難しさを指摘しておくに止める。おそらく今後、属性の「伝わりやすさ」／「伝わりにくさ」の分類を行うにあたっては、理論的・演繹的に規定するだけでなく、実際の考古資料・民族資料から事例を集め、帰納的に判断する作業が欠かせなくなるであ

ろう。

## 第2章 下田ノ沢式土器の編年と型式交渉

### 1. 本章の目的

下田ノ沢式土器は、厚岸町下田ノ沢遺跡出土土器を標式として澤四郎氏が1969年に設定した土器型式であり（澤1969）、続縄文前半期の釧路～南千島地域を中心に分布する。先行する興津式土器と共に、釧路地域における続縄文前半期を代表する土器型式である。併行する網走地域の宇津内式土器とは、「文様構成、縄線文、突起、地文などで」（藤本1979：132）類似しており、両者は「近縁関係」にあることが指摘されている（藤本前掲）。

しかし下田ノ沢式土器は現在においてもまとまった資料が少なく、土器型式の実態や、宇津内式との関係（工藤1994）については未だ不明な点が多い。例えば、宇津内Ⅱa式と型式学的に近い下田ノ沢Ⅰ式は、宇津内Ⅱa式とは別型式として認識できるのか否かという問題や、そこからどのようなプロセスを経て地域色が強化され、下田ノ沢Ⅱ式／宇津内Ⅱb式が成立するのかという問題等、解決すべき課題は山積している。

具体的な検討に先立ち、道東部の土器型式交渉について概観しておこう。まず型式学的内容を見ると、興津式期で確立したように見えた網走／釧路間の地域差は下田ノ沢Ⅰ式期になると再び縮小し、下田ノ沢Ⅰ式の側がほとんど一方的に宇津内Ⅱa式の影響を被り、下田ノ沢Ⅰ式はあたかも宇津内Ⅱa式の地域的変異であるような型式内容となる。しかし次の下田ノ沢Ⅱ式では宇津内Ⅱb式との型式差は再び拡大し、宇津内Ⅱb式と下田ノ沢Ⅱ式が接触する地域では同一遺跡内で両系統の型式が併存するようになる。さらに同一土器個体内に両系統の文様が折衷される例も出現する。このように、下田ノ沢Ⅰ式・宇津内Ⅱa式の時期と下田ノ沢Ⅱ式・宇津内Ⅱb式の時期とでは両型式間の型式学的関係に変化が生じている。このように興津式・下田ノ沢式の型式学的な実態を、宇津内式と比較対照しつつ把握するのが本章の第一の目的である。

もう一つの目的は、上記のような型式変遷と連動した型式分布圏および型式交渉経路の変化をトレースすることにある。分布圏に関しては、まずは宇津内Ⅱa式の分布拡大があり、次の時期には下田ノ沢Ⅱ式の分布圏が同Ⅰ式よりも東へシフトする等といった現象が起こる。さらにそれと連動して型式交渉の舞台・経路も、道東部全域から知床半島南岸地域を中心としたものへと変化する。このように、下田ノ沢式と宇津内式の間で起こる、型式分布圏と型式間交渉経路の変遷

をトレースするのが本章の第二の目的となる。

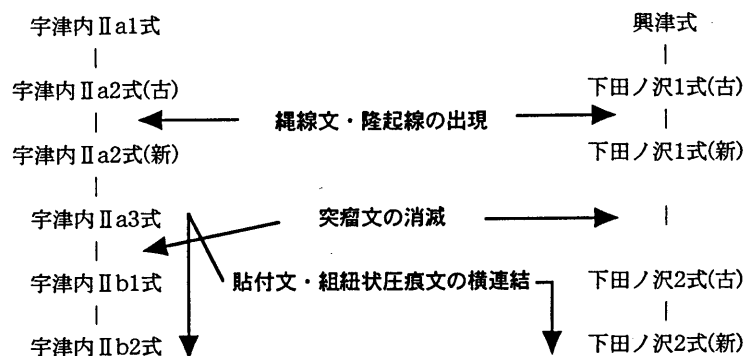
## 2. 研究小史と本章の構成

興津式土器・下田ノ沢式土器の編年と、網走地域との横の影響関係については、それぞれ研究の蓄積がある。本章の内容はそれらを基礎とする部分も大きいので、まず初めに重要な先行研究である澤氏及び宇田川洋氏の編年について回顧してみよう。

興津式・下田ノ沢式の型式設定と編年研究の経緯については、設定者の澤氏による解説がある（澤 1982）。氏によると、はじめに存在が意識されていたのは興津式であり、1963 年には続縄文前半期の土器型式として位置づけられた（澤 1963）。1969 年の下田ノ沢式の設定（澤 1969）の後、下田ノ沢Ⅰ式とⅡ式の細分は 1972 年に発表され、その時点では「興津式に併行もしくはそれより少し遅く位置する」土器型式として認識されている（澤 1972）。その後、釧路市三津浦遺跡（澤・西編 1976）と 3 次にあたる釧路市興津遺跡調査（澤・西編 1977、澤編 1978a、澤編 1979）の出土資料の分類が行われる過程で、各型式の編年が進み、釧路地域続縄文前半期の土器型式変遷が具体的・連続的に描かれるようになっていった。以上の編年研究の経過を、土器型式の対照というかたちで表にすると第 12 図上のようになる。第 12 図上の表で見ると一目瞭然であるが、資料の増加に伴い、型式の細別に重点が置かれて研究が進められてきたことが理解されよう。比較的限定された小地域内で型式設定をおこなった上で、型式のさらなる細別を追究するという型式設定の方法に則って研究が進められたことがわかる。

一方、澤氏らの地域編年研究と併行して、釧路地域の土器編年を他地域の編年に対比させる試みも行われてきた（大沼 1977、宇田川 1977、宇田川 1982 など）。道東部の続縄文土器編年研究の流れについては工藤研治氏の論考（工藤 1994）があるので詳細はそちらに譲りたい。ここで取り上げておきたいのは、宇津内式土器と下田ノ沢式土器の編年対比をおこなうにあたって重要な視点を提起した宇田川氏の編年（宇田川 1982）である。なお、宇田川氏の一連の下田ノ沢式土器編年は、1977 年の『北海道の考古学 2』上で発表された、いわば「旧編年」と、1982 年の「道東の続縄文土器」論文で発表された「新編年」があるが、本章で取り上げるのは「新編年」の方である。

下田ノ沢報告 <sup>(1)</sup>	三津浦報告 <sup>(2)</sup>	興津Ⅱ報告 <sup>(3)</sup>	興津Ⅲ報告 <sup>(4)</sup>
—	Ⅱ群1類	Ⅲ群2類	Ⅲ群3類(興津式)
1群1類		Ⅲ群3類	Ⅲ群4類(下田ノ沢Ⅰ式〔古〕)
1群2類	Ⅱ群2類	Ⅲ群4類	Ⅲ群5類(下田ノ沢Ⅰ式〔新〕)
			Ⅲ群6類(下田ノ沢Ⅱ式〔古〕)
			Ⅲ群7類(下田ノ沢Ⅱ式〔新〕)



第12図 上：澤四郎氏による興津式～下田ノ沢式土器編年研究の経過

下：宇田川洋氏による宇津内式・下田ノ沢式土器編年の内容

(1) は澤編 1972、(2) は澤・西編 1976、(3) は澤編 1978、(4) は澤編 1979 及び澤 1982

氏の編年は、まず宇津内式の編年が提示されたあと、興津式・下田ノ沢式の編年がそれに対置されて述べられるという構成が取られている。興津式・下田ノ沢式の具体的な型式細分は、種々の文様要素の有無・消長に重点を置き、宇津内式との併行関係にも留意しながら説明がなされている。宇津内式、興津式・下田ノ沢式のそれぞれの編年に着目した場合には、個々の文様要素等の有無・消長などがばらばらに取り上げられているようにも見えるが、実は氏の編年のなかでは、宇津内式、興津式・下田ノ沢式の型式細分において共通の指標が用いられている。具体的にまとめてみると、第 12 図下のようになる。

宇田川氏は下田ノ沢土器編年について、「宇津内文化と類似する部分と、やや異質な面をもっている」（宇田川 1982：125）と説明している。宇津内式と下田ノ沢式が近縁関係にあることは氏の編年以前から指摘されてきたが、両型式の伝統に配慮しつつ（「やや異質な部分」）、両型式の変化内容がある部分で一致するという視点（「類似する部分」）を氏が具体的に示したことで、続縄文前半期道東部の土器編年の枠組みが新たに形成されることになったわけである。

下田ノ沢式土器をめぐる型式編年研究は以上のように進められてきたが、1980 年代前半以後は、資料の増加が少ないこともあり研究に進展はほとんど見られていない。現在求められているのは、両型式の系統と交渉—すなわち宇津内式と下田ノ沢式は通時的には各々いかなる系統的変遷をし、共時的には各時期においてどのような型式交渉がなされたのか—を明らかにし、両型式の編年を縦と横の構造体として記述することである。

宇津内式／下田ノ沢式の間には存在する型式差をこのような視点から解明するためには、まずは網走とは異なる、釧路地域の系統の流れをはっきりさせなければならない。具体的には澤氏の編年を再トレースして型式細別を再検討する作業である。澤氏や宇田川氏の編年と重複する記述も必要で煩瑣になるが、下田ノ沢式の縦の系統と、宇津内式との横の関係を明らかにする上で不可欠な部分である。系統や地域差をはっきりさせないまま特徴的な個々の要素についてのみ着目して「宇津内式」・「下田ノ沢式」のレッテルを貼り付け、そこから各々の縦の細別を行うに止まるのであれば、各型式に対する理解は不十分なままであり続け、土器型式の地域構造とその動態を把握するという目的の達成は困難になる。ちなみに本章で縦の細別を行うにあたっては基本的に先学を踏襲し、より細かい細別は行わないが、細別基準を明確にすることにより型式への理解を容易にするつもりである。

次に釧路・網走の両地域間での型式交渉について検討してゆくが、これは宇田川氏の編年でいわば「暗示」されていた宇津内式・下田ノ沢式間の影響関係について、より詳細な検討を行うことを意味する。両型式の関係を研究するに際しては、下田ノ沢式＝釧路地域／宇津内式＝網走地域というような図式的把握で両土器型式・単位地域を等質にとらえる、という先験的かつ単純な二分法的理解へと進むのではなく、道東部における土器型式の内容・型式間交渉を資料の実態に



即して検討することが求められる。

なお、前章では宇津内式土器の編年が文様の縦の割りつけ原理と文様単位数の変遷を鍵として組み立てられることを示した。筆者は下田ノ沢式も大筋では宇津内式と同様の変遷過程を経るという見通しを抱いているが、未だ下田ノ沢式土器は完形資料・遺構一括資料が少なく、現状では前章での方法に基づく分析はできない。よって、方法的には不統一な部分があるが、今回はやむを得ず他の視点から型式内容について整理を行い、編年を再検討する。ちなみに下田ノ沢式と宇津内式の間では、特に下田ノ沢Ⅱ式期以後において、文様の縦の割りつけ原理と文様単位数の変遷に関する地域差が顕在化するようである。詳細は後述する。

### 3. 釧路地域の編年

#### 1) 興津式（第13図）

##### a) 概要

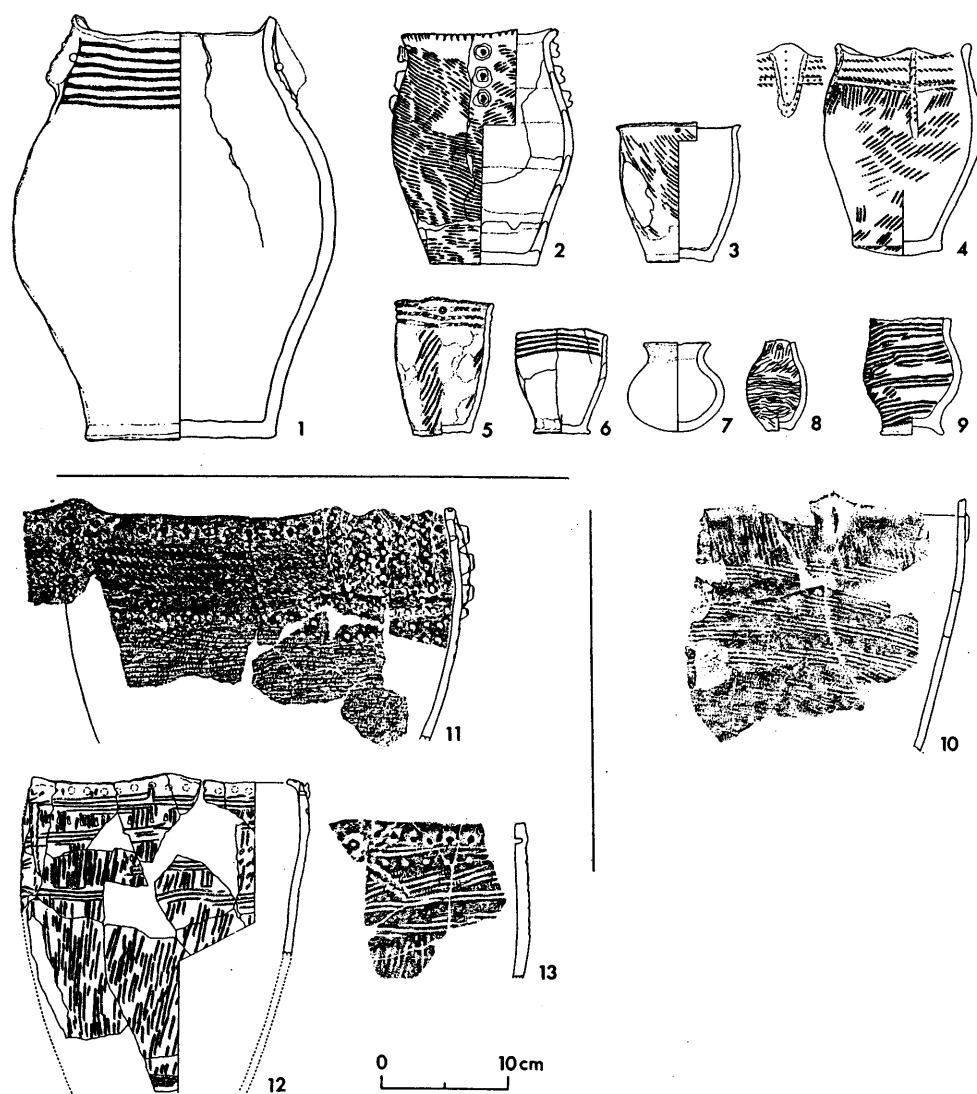
興津式は、釧路地域では標式遺跡の興津遺跡でややまとまって出土しているが、下田ノ沢Ⅰ式と混在しており、型式としてのまとまりが今ひとつ不明確なままであった。しかし、近年の幣舞遺跡（石川編 1994、石川編 1996）の調査では、縄文晩期から連続し且つ下田ノ沢Ⅰ式をほとんど混じえずに、興津式がまとまって出土した。この幣舞遺跡の資料によって興津式の内容と編年上の位置はより鮮明になったと言えよう。

興津式を特徴づけているのは、口縁部がややくびれて外反する器形、沈線文の消失、「横走」する地文、口唇部突起下のボタン状突起・垂下する貼付文などであろう。以下に興津式の特徴について、澤氏・宇田川氏の指摘に基づきつつ、再確認してみたい。

##### b) 型式学的特徴

##### i) 器形

「基本的には深鉢と壺からなっている」（澤 1982：95）。深鉢については、縄文晩期末～続縄文初頭の時期の深鉢では直線的に開く器形が多いのに対し、興津式では胴部がやや張り出して湾曲し、口縁部がややくびれる器形が増加する。丸底及び丸底気味の小型の壺がこの型式にとりわけ特徴的な器形であるが、下田ノ沢Ⅰ式では姿を消すようである。なお、後続の型式よりも薄手の器壁を持つ傾向にあるが、縄文晩期末からの伝統であろう。



第13図 興津式土器（上段）と網走地域の関連資料（下段）

1～3・5～9：幣舞 4：択捉島留別付近 10：興津 11・12：常呂川河口 13：中ノ島

## ii) 山形突起及び文様単位数

平縁の他に、山形突起及び突起下の貼付文を有する例がある。山形突起の頂部に刻みを有する例があるが、いわゆる「B 状突起」の名残であり縄文晩期からの伝統である。文様単位数は、4 単位・2 単位が多いが、平縁で貼付文を持たない 0 単位や、2+2 単位の例もある。2 単位が縄文晩期の「舟形土器」からの伝統であることは、網走地域の「元町 2 式」での例と同じである（前章参照）。

## iii) 地文

縄文の条を長めに施文するいわゆる縦走縄文・横走縄文の他、条の短い（幅の狭い）斜縄文もある。また、横走するいわゆる「帯縄文」の例はこの型式に特徴的なものである。原体は RL と LR の両者がある。他に撚糸文や無文の例などがあり、やや変化に富む。

## iv) 文様要素

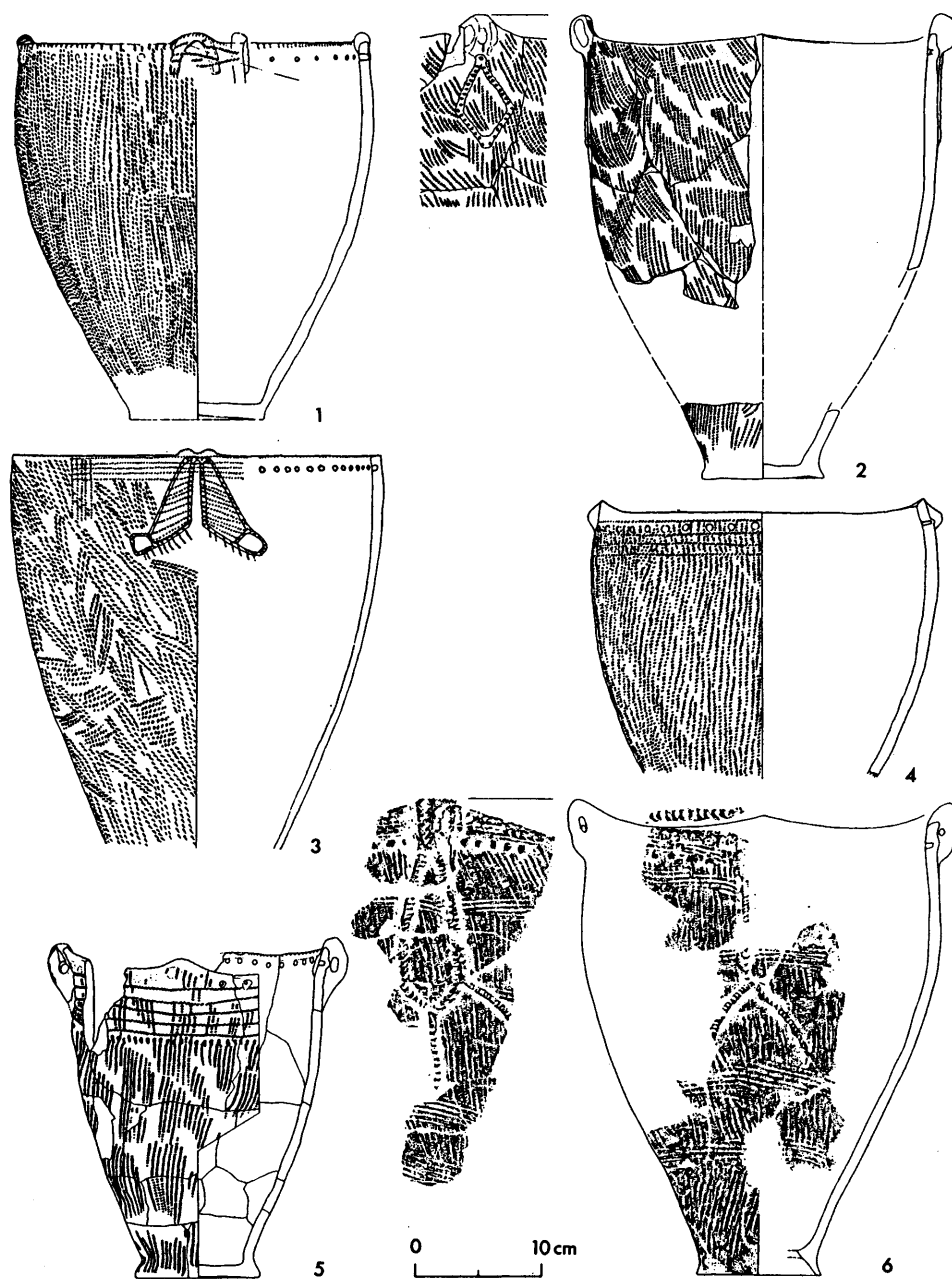
山形突起下部のボタン状貼付文、垂下する貼付文が特徴的であり、その他、口縁部に縄線文を施す例も多いが、地文のみの例が目立つのもこの型式の特徴といえる。縄文晩期末～続縄文初頭に見られた口縁部の沈線文はかなり減少するようである。突瘤文については、幣舞遺跡のまとまりが示すように興津式ではまだみられず、釧路地域では突瘤文が施された段階から下田ノ沢Ⅰ式と考えてよいようである。

## c) 興津式の地域差

興津式は道東部太平洋側～根釧原野～知床半島南岸の地域を中心に分布する。釧路地域以外の道東部では、羅臼町・標津町・中標津町（大沼 1972）のいくつかの遺跡群、である程度まとまった出土が確認されている。南千島にも出土例がある（相田 1993 など）。なお後述するように、網走地域でも常呂町常呂川河口遺跡（武田編 1996）や北見市中ノ島遺跡（久保 1978）で関連資料が出土している（第 13 図）11～13）。

興津式における地域差を示すものとして、横走する帯縄文が施された土器（以下、「帯縄文系」興津式）の存在をあげておきたい。これら「帯縄文系」興津式は、釧路及びそれ以西の地域に認められ、羅臼町や標津町では確認できない（注 1）という地域差がある。横走する帯縄文は宇田川氏・工藤義衛氏らの指摘どおり道央部ないしそれ以西との関係でとらえられるので（宇田川 1982、工藤 1986、乾 1991b、川内谷 1998）、「帯縄文系」興津式の分布にあらわれた地域差は道央部との交渉を反映した結果であるといえる。

## 2) 下田ノ沢Ⅰ式（第 14 図）



第14図 下田ノ沢I式土器

1・3・4: 下田ノ沢 2・5・6: 興津

## a) 概要

興津式と下田ノ沢Ⅰ式の区分となる基準について、澤氏は「器壁がやや厚くなり、撚糸文を施すものが多く、貼付帯はやや細くなる。突瘤文はほとんど全部の土器に認められる」（澤 1982 : 99）と述べている。興津式からの変遷は漸移的であるが、文様要素から言えば、前述したとおり突瘤文の出現を重要なメルクマールのひとつとしてよいと思われる。

## b) 型式学的特徴

## i) 山形突起及び文様単位数

山形突起及び吊耳状貼付文を有する例が多いが、平縁も存在するようである。山形突起の頂部の刻みが残る例もある。完形土器が少ないため文様単位数ははっきりしないが、基本的には宇津内Ⅱa式と同じで、0単位、4単位、側面－正面観を強調した2単位及び2+2単位、の各例が存在するようである。

## ii) 地文

地文となる縄文は興津式の伝統を維持する傾向にあるが、口縁部に水平の縄線文が数条施文される土器にはRLの縦走縄文が施される場合が多いようである。これは宇津内Ⅱ式特有の組み合わせであり、宇津内Ⅱa式からの影響が考えられる。横走する帯縄文は残存するが、量的にはまれになる。撚糸文の例は興津式よりも増加する。

## iii) 文様要素及び文様構成

突瘤文、縄線文、貼付文が主要な文様要素である。これらの文様要素は全体として宇津内Ⅱa式からの影響を被っており、型式学的類似度は強まっている。文様要素について、下田ノ沢Ⅰ式と宇津内Ⅱa式とを区別する細部の特徴を以下にあげておく。

突瘤文は、宇津内Ⅱa式のそれと比べた場合、施文具の径が太く、「瘤」があまり突出せず、突瘤文どうしの間隔が広いという特徴がある。

縄線文は、宇津内Ⅱa式と比較した場合、施される例が少なく(注2)、施される例でも条数が宇津内Ⅱa式より少ない傾向にある。また、宇津内Ⅱa式に見られる縄線文下部の縄端による刺突列は省略される傾向にある。地文との関係は先に記したとおりである。

貼付文については、興津式で見られた山形突起下のボタン状貼付文・垂下する貼付文は古手のものには残るようである。宇津内Ⅱa式で一般的ないわゆる「擬縄貼付文」については、縦の単位に則って施される例もあるが、宇津内Ⅱa式と比べて施文例が非常に少ない。

宇津内Ⅱa式に比べて、各文様要素による装飾が全体的に少ない傾向にあるといえよう。

## c) 下田ノ沢Ⅰ式の細別について

下田ノ沢Ⅰ式の細別案には、澤氏・宇田川氏の両案がある。澤氏の細別は、興津遺跡Ⅲ次報告（澤編 1979）のⅢ群 4 類・5 類をそれぞれ「古手」・「新しい手」に読み替えたものである。細別基準ははっきり明記されていないが、提示された図版から判断すると、口唇面の文様に基づく細分のように思われ、RL の縄の側面圧痕を施す例が 5 類（新しい手）、それ以外の例が 4 類（古手）となっているようである。一方、宇田川氏の細分は先に見たとおり、縄線文・擬縄貼付文の出現がメルクマールとなっている。一方の極に興津式、もう一方に下田ノ沢Ⅱ式を置き、その間の型式組列を下田ノ沢Ⅰ式の変遷・細分とする型式学的方法が採用されており、加えて宇津内式編年との統一が図られている点に特徴があるといえる。

筆者は、文様の縦の割りつけを基準にした細分が適当だと考えるが、先述の通り現状では資料的制約から証明が難しい。細別自体は可能だと思われるが今後の課題としておく。

### 3) 下田ノ沢Ⅱ式（第 15 図上段）

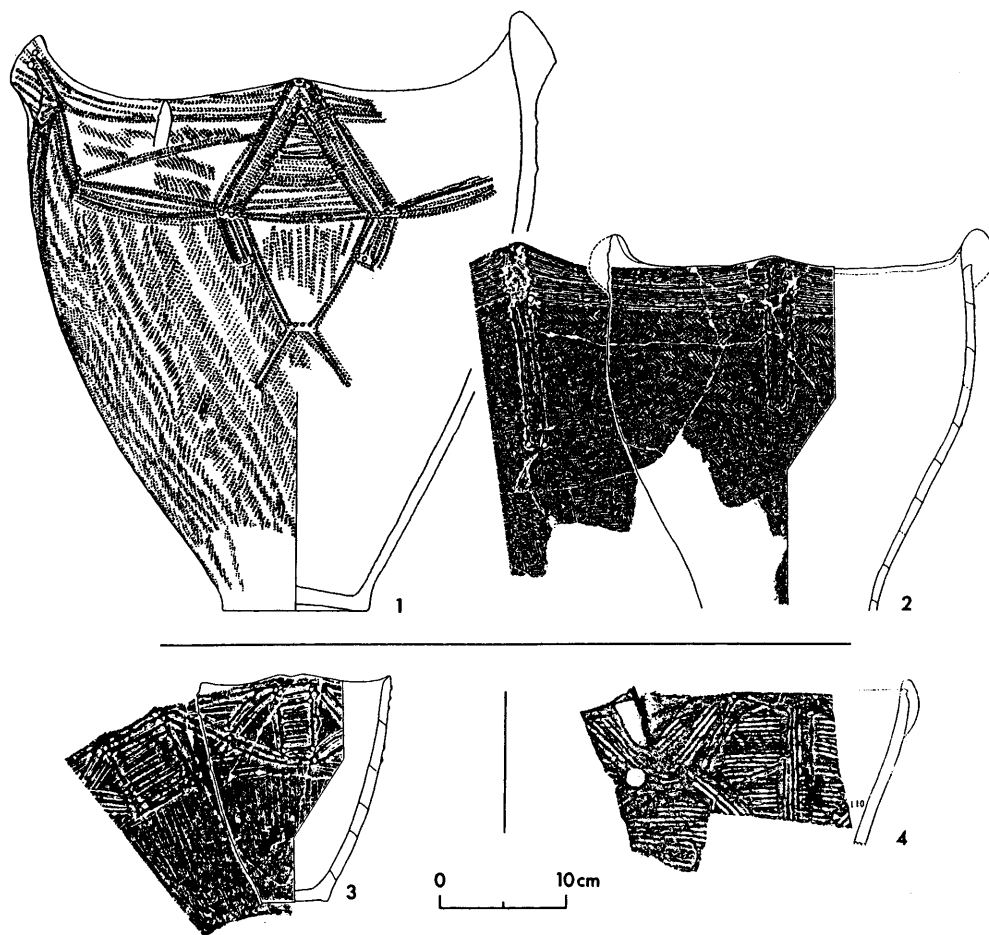
#### a) 概要

下田ノ沢Ⅰ式とⅡ式の区分で問題になるのは、突瘤文（Ⅰ式の特徴）と 2 本 1 単位の縄線文（Ⅱ式の特徴）とが一個体に併存する土器群の位置づけであろう。この部分の区分についても澤氏と宇田川氏では見解がやや異なっている。澤氏の区分では、明記されてはいないけれども 2 本 1 単位の縄線文の出現が重要なメルクマールになっているようであり、突瘤文を有していてもⅡ式に分類されている例がある。一方宇田川氏の区分では前述のとおり突瘤文の消滅が基準の一つになっている。いずれにしろ下田ノ沢Ⅰ式からⅡ式への変遷は漸移的であり、層位的所見や一括資料が期待できない現状では細別には困難が伴う。小論では暫定的に、宇田川氏の基準、すなわち突瘤文の消滅を主要な基準とする立場をとっておきたい。というのも、下田ノ沢Ⅰ式と宇津内Ⅱa 式、下田ノ沢Ⅱ式と宇津内Ⅱb 式とが交渉関係を保ちつつ併行することがほぼ首肯される現状では、編年が確定している宇津内Ⅱa 式・Ⅱb 式の細別基準（突瘤文の消滅はその一つ）を参照した方がより確実と考えられるからである。

#### b) 型式学的特徴

##### i) 文様単位数

大多数の例は 2+2 単位となっている。2 単位などが存在する可能性もあるが、はっきりしない。平縁の例も存在するようであるが、特異な例か否かは資料数が少ない現状では判断できない。宇津内Ⅱb 式で出現する、2+2 単位の、単位と単位の間部にさらに割りつけ単位が付加される「SF+4 単位」（前章参照）は、釧路地域の資料では確認できない。



第15図 下田ノ沢Ⅱ1式土器（上段）・後北式B式と下田ノ沢Ⅱ1式の「折衷」土器（下段左）・  
下田ノ沢式の伝統を残す後北C<sub>2</sub>・D式土器（下段右）  
1：下田ノ沢 2：幾田 3・4：相泊

ii) 地文

条の短い（幅の狭い）斜縄文が大多数を占めるようになる。原体は LR が多いようであるが、RL もある。下田ノ沢Ⅰ式で認められた条を長めに施文するいわゆる縦走縄文の例は、下田ノ沢Ⅱ式ではみられなくなり、いわば「先祖帰り」的な様相を呈する。他に撚糸文・無文の例も少数ある。

iii) 文様要素及び文様構成

貼付文・縄線文とも宇津内Ⅱb 式との差が拡大する。後節（第 17 図の表）にて宇津内Ⅱb 式との差をまとめておいたので、そちらを参照していただきたい。

4) 下田ノ沢Ⅱ式と後北 C<sub>1</sub> 式

澤氏は釧路地域における下田ノ沢Ⅱ式と後北 C<sub>1</sub> 式の関係性を前後関係にとらえ、「下田ノ沢Ⅱ式から、後北 C<sub>1</sub> 式への交替」（澤 1982 : 100）と位置づけている。この澤氏の見解を再検証してみよう。

まず最近、羅臼町相泊遺跡(注 3)で出土した例である（涌坂編 1996）（第 15 図 3）。この土器の地文、縄線文、貼付文上の刺突は下田ノ沢Ⅱ式と共通するが、貼付文の意匠は後北式の系統に属する。横の割りつけが多段化されていないところからすると、いわゆる後北 B 式に併行する可能性が高い。このことから、下田ノ沢Ⅱ式といわゆる後北 B 式がほぼ並行することは認められてよいだろう。

次に問題となるのは南千島色丹島出土例（甲野ほか編 1964 : 図版 242、市立函館博物館編 1994 : 図版 207）である。澤氏は、この色丹島出土例を「後北 C<sub>1</sub> 式を下田ノ沢Ⅱ式の製作手法で模倣したのではないか」と性格づけている（澤 1982 : 99）。筆者も澤氏と同様に、この土器の胎土・器形・口縁部突起などは下田ノ沢Ⅱ式そのものである一方、文様意匠は後北 C<sub>1</sub> 式に由来すると考えるが、そうであるならば、少なくとも南千島では、後北 C<sub>1</sub> 式の段階まで下田ノ沢Ⅱ式の伝統が存続していることになる。しかし残念ながらこの時期の土器セットのあり方は不明であり、この色丹島例のような土器がまとまって存在するのか、ごく稀な折衷・模倣の例であるのか確認できない。ただし、少なくとも南千島では下田ノ沢Ⅱ式の伝統を強くとどめる土器が後北 C<sub>1</sub> 式の段階まで存在するのは確実と見てよい。よって、小論では前章までに述べてきた一般的な下田ノ沢Ⅱ式を「下田ノ沢Ⅱ 1 式」として設定し、それに後続する、ここで述べたような南千島例に代表される下田ノ沢式系統の土器群を「下田ノ沢Ⅱ 2 式」として仮設したい。

なお、下田ノ沢Ⅱ式の伝統は、相泊遺跡出土例（澤ほか 1971 : Fig.32-110）（第 15 図 4）に見られるように、一部地域では後北 C<sub>2</sub>・D 式の初頭の段階まではわずかながら残存するようである。この相泊遺跡出土例では口縁部にみられる吊耳状突起がそれに該当する。この例なども、先



立つ時期の「下田ノ沢Ⅱ2式」の存在を示唆していると考えてよいだろう。

#### 5) 釧路地域の系統のまとめ

釧路地域の土器型式編年について検討してきた。釧路地域の系統の変遷を、他地域、特に網走地域からの影響に着目してまとめてみよう。

縄文晩期末～続縄文初頭の土器群（緑ヶ岡式及びその直後の土器群）から興津式への型式学的変遷は比較的スムーズである。ただし、「帯縄文系」興津式が南西部地域に偏るという地域差は、道央以西の影響として注意すべきである。次の下田ノ沢Ⅰ式の段階になると、宇津内Ⅱa式の影響を被るようになる。これは突瘤文・縄線文などの文様要素及び文様意匠に止まらず、一部で地文にまで及び、宇津内Ⅱa式の地域的変異とも言えるような様相となる。しかし続く下田ノ沢ⅡⅠ式では、宇津内式との型式差は再び拡大する。特に地文において釧路地域の伝統に戻る点は注目される。以上の変遷過程において、釧路地域の伝統として維持されている要素として地文をあげておきたい。興津式～下田ノ沢ⅡⅠ式を通じて、縄文の条の短い斜縄文と撚糸文は時期によって盛衰はあるものの維持されている。これは、宇津内式の地文がいわゆる縦走縄文へと傾斜を深めていくのとは異なる特徴であり、特に宇津内ⅡbⅠ式と下田ノ沢ⅡⅠ式を対比する際に重要になってくる。

以上、釧路地域の変遷はとぎれのない漸移的なものであるが、下田ノ沢Ⅰ式の段階で網走地域との関係（型式学的類似）が一旦強まり、その後再び網走地域から離れて独自性を増す、という内容を有している。一方、網走地域の方は、変化が系統的かつ累積的で、最終的には道央部の後北式系統との関係を強める方向へと変化しており、釧路地域とは型式変化の契機や方向性が異なっている。

なお、文様の縦の割りつけ原理については前述のように、釧路地域と網走地域は基本的には一致した変遷過程を経ると思われるが、特に宇津内Ⅱb式・下田ノ沢ⅡⅠ式の段階ではこの部分でも差が拡大するようである。

### 4. 釧路地域・網走地域間における型式交渉の推移

#### 1) 併行関係の確認

釧路地域と網走地域の併行関係は以下ようになる（宇津内式土器の細別は第1章参照）。

興津式－「元町 2 式」

下田ノ沢 I 式－宇津内 II a I 式～ II a II 式

下田ノ沢 II 1 式－宇津内 II b I 式

下田ノ沢 II 2 式－宇津内 II b II 式（後北 C<sub>1</sub> 式併行）

ここでは道東部における各々の型式の分布圏と交渉経路、および土器そのものにあらわれた型式間交渉内容の変遷について、時系列順に検討する。なお、続縄文土器型式の分布圏の通時的な変化については、大沼忠春氏が分布図の形で発表しており、小論でも参考にしている（大沼 1982a）。

## 2) 興津式と「元町 2 式」の型式交渉（第 16 図上段）

### a) 地域差の顕在化①突瘤文など

縄文晩期末～続縄文初頭の、緑ヶ岡式及びその直後の土器群を共通の母胎として（注 4）、網走地域には「元町 2 式」、釧路地域には興津式がそれぞれ成立する。両型式間でもっとも大きな型式学的差は突瘤文の有無であるが、他に器形や地文でもやや差がある。この段階において網走・釧路地域間の地域差がより明瞭になるといえよう。

### b) 地域差の顕在化②帯縄文

前節で興津式には「帯縄文系」土器の有無という地域差があり、それは道央との交渉を反映したものであることを述べた。興津式と「元町 2 式」の交渉について検討する前に、網走地域の帯縄文の様相について確認してみよう。

この時期の網走地域で主体となるのは「元町 2 式」であるが、「元町 2 式」の標式遺跡である美幌町元町 2 遺跡（荒生・小林編 1986）は網走川をややさかのぼった内陸、すなわち釧路に近い地点に位置する点に注意しておきたい。その元町 2 遺跡周辺では横走する帯縄文は認められない。帯縄文が認められるのは、網走川以西の常呂川流域である。常呂町常呂川河口遺跡（武田編 1996）では、第 13 図 11 のような、「元町 2 式」に横走縄文が施されたと言えるような土器が出土している。さらに、同じ常呂川流域の北見市中ノ島遺跡でも、この常呂川河口遺跡と同様の突瘤文と横走する帯縄文を有する土器（第 13 図 13）が、典型的な「帯縄文系」興津式、「元町 2 式」と混在する形で出土しており（注 5）、網走地域と釧路地域の交渉が確認できる。さらに、これら「突瘤文＋横走帯縄文」を有する土器群は常呂川流域のほか、富良野市三の山 2 遺跡（杉浦編 1986）やえりも町東歌別遺跡（扇谷 1963）でも確認されている。富良野やえりもと網走地域を結びつけるには現状ではやや飛躍があるかもしれないが（注 6）、ここでは網走地域との交渉が

釧路地域に加え道央部との間にもあったことを示す例として位置づけたい。

このように、常呂川流域では帯縄文を有する資料が存在し、釧路及びそれ以西の地域との交渉が明確であるのに対し、より東の網走～斜里地域では元町 2 遺跡の様相が示すとおり道央部や釧路地域との交渉は相対的に乏しいようである。すなわち、網走地域においても釧路地域と同様に帯縄文に係わる地域差が存在するといえる。

#### c) 網走地域・釧路地域と道央部の関係

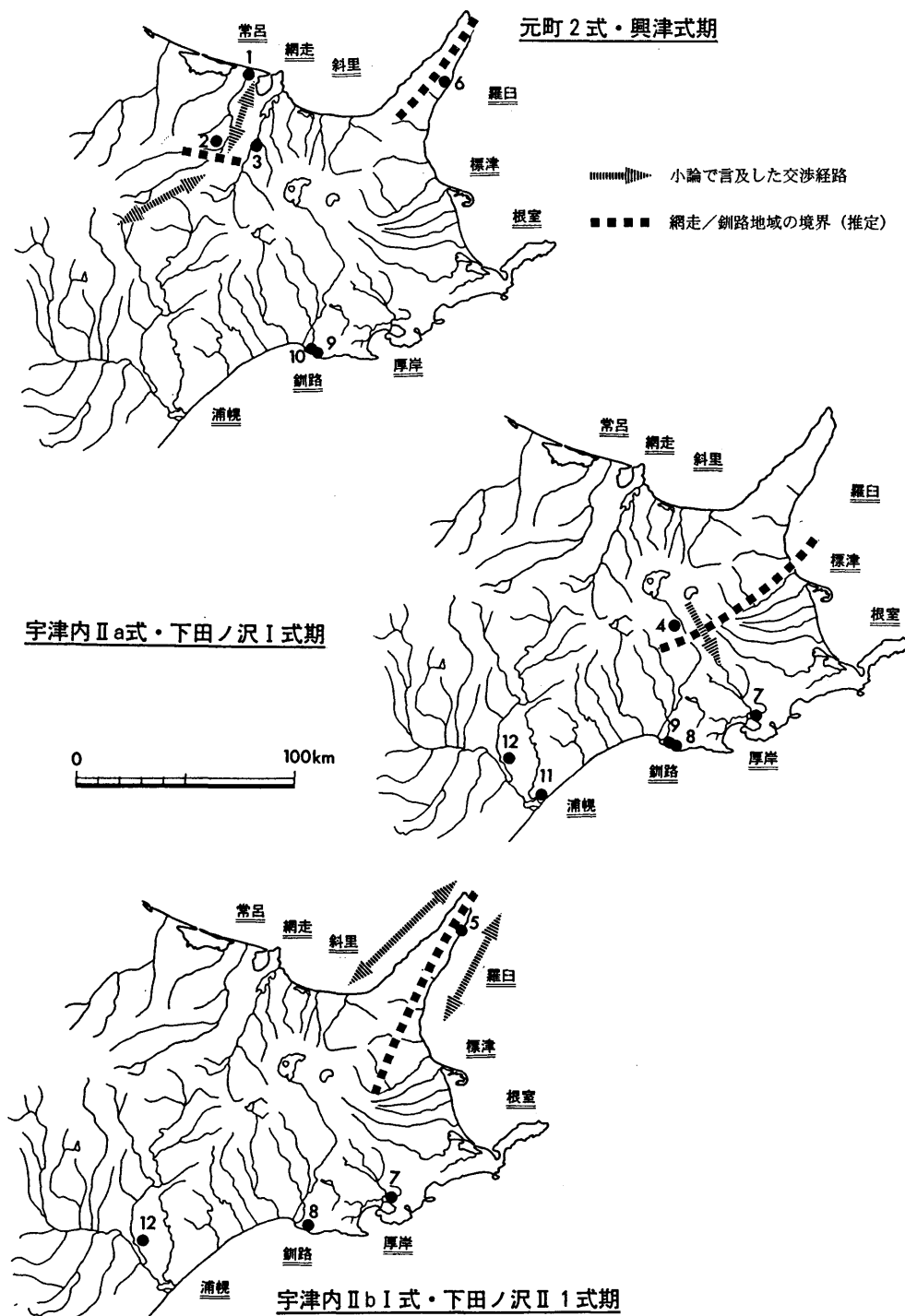
道東部における「帯縄文」の存在が示すのは、道東部―道央部間の型式交渉であり、それらの交渉は、帯縄文の偏在にあらわれているとおり、釧路・網走地域とも、より道央部に近い地域で活発に行われていることが確認できた。重要なのは、道東部―道央部間の交渉のみならず、釧路―網走地域間の交渉も、中ノ島遺跡の事例が示すように常呂川流域等の道東部・道央部間の境界域側でより頻繁に行われていたと考えられる点である。釧路―網走地域間の交渉に道央部が何らかの形で関わりを有していたことを伺わせる。

一方、釧路地域と網走地域との型式接触は、東側の羅臼でも認められるようである。例えば羅臼町チトライ川北岸遺跡（涌坂編 1985）では「元町 2 式」と興津式の両者が出土している。しかし出土量は少なく、型式交渉の詳細は不明である。

### 3) 下田ノ沢Ⅰ式と宇津内Ⅱa 式の型式交渉（第 16 図中段）

#### a) 分布圏の変化

興津式・「元町 2 式」のそれぞれに後続して下田ノ沢Ⅰ式・宇津内Ⅱa 式が成立するが、道東部での分布圏をみると下田ノ沢Ⅰ式のそれは興津式よりやや縮小し、逆に宇津内Ⅱa 式の方は「元町 2 式」より拡大するようである。興津式・「元町 2 式」期において両者が混在していた地域で確認してみよう。常呂川流域と羅臼町では、ほぼ宇津内Ⅱa 式のみ出土となるようである（注 7）。また、標津川をややさかのぼった中標津町は、前段階では興津式の分布圏であって「元町 2 式」は認められないようであるが、この時期には下田ノ沢Ⅰ式・宇津内Ⅱa 式の両者が確認されている。これらの例は宇津内Ⅱa 式の分布圏拡大の証左となろう。一方、釧路川上流に位置する弟子屈町矢沢遺跡（澤・松田編 1977、澤編 1978b）で下田ノ沢Ⅰ式を混じえず宇津内Ⅱa 式のみが出土していることは注目に値する。弟子屈町ではそれ以前の様相がはっきりしないので宇津内Ⅱa 式の分布圏拡大の例としてはあまり適当ではないが、釧路川上流での遺跡分布は、網走川流域と釧路川流域をつなぐ内陸の交渉経路を示唆する一例として重要である。



第16図 土器型式分布域と交渉経路の推移、及び本文中で言及した遺跡の位置

- 1：常呂川河口 2：中ノ島 3：元町2 4：矢沢 5：相泊 6：チトライ川北岸 7：下田ノ沢  
8：三津浦 9：興津 10：幣舞 11：十勝太若月 12：池田3

一方の下田ノ沢Ⅰ式は、前述の通り常呂川流域や羅臼町では姿を消すものの、池田町（横山編 1993）・浦幌町（石橋ほか 1975）～釧路地域～標津町といった道東部太平洋岸～根釧原野の地域では引き続き分布が認められるようである。

#### b) 網走地域からの影響増大

次に下田ノ沢Ⅰ式と宇津内Ⅱa式の型式交渉についてみてみよう。下田ノ沢Ⅰ式は全体として宇津内Ⅱa式の影響を強く受けていることは前述の通りである。そのことに加えて釧路地域の三津浦遺跡や下田ノ沢遺跡（澤編 1972）などでは、胎土・文様が網走地域と共通し在地のものとは全く異なる、搬入品と考えられる宇津内Ⅱa式が少数ではあるが存在する。一遺跡内の各個体について宇津内式の影響度をみた場合には、在地色の強いものから地文及び文様要素・文様構成が宇津内Ⅱa式に近い例まで入り混じっており漸移的な様相を呈している（注8）。

一方の網走地域では、下田ノ沢Ⅰ式の搬入は認められず、また下田ノ沢Ⅰ式の影響を受けたような土器も確認できない（注9）といったように、釧路地域とは対照的な様相を示している。

以上のような下田ノ沢Ⅰ式が宇津内Ⅱa式の影響を一方的に被るという状況は、先に見た宇津内Ⅱa式の分布圏拡大と連動した動きとみることができよう。

#### c) 交渉経路の変化

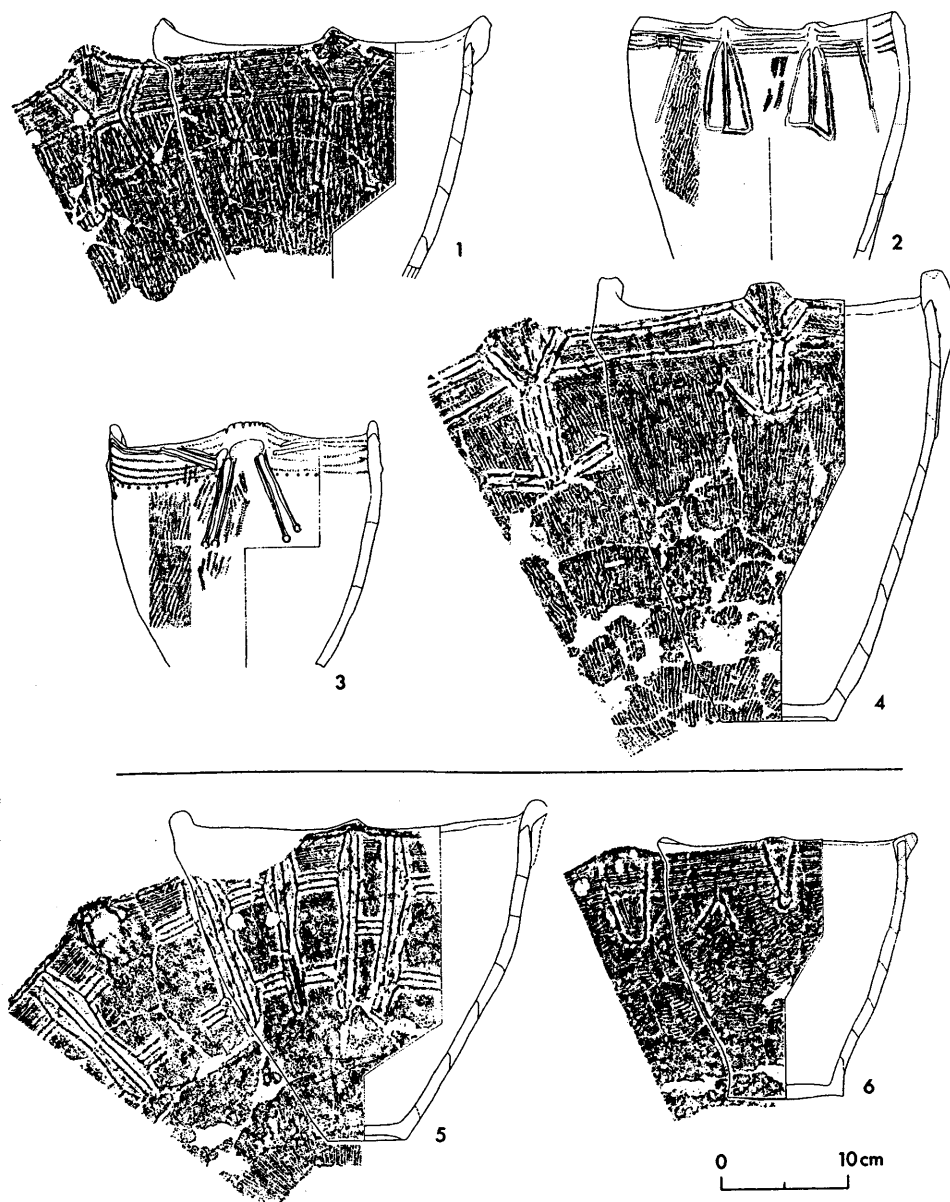
前段階の興津式期に常呂川流域の経路で認められた、釧路地域－網走地域間の交渉を絡めた道東部－道央部間の交渉は、この時期になるとやや衰退するようである（注10）。その一方で、釧路川上流で宇津内Ⅱa式がまとまって出土している点は、新たに網走川流域－釧路川流域間の交渉経路が活発化したことを示唆するものとして重要である。釧路地域で確認されている宇津内Ⅱa式の搬入土器は、この経路を介在してもたらされた可能性が考えられよう。

	宇津内ⅡbⅠ式 (U)	下田ノ沢Ⅱ1式 (S)
器形	底径は狭く、口縁部はやや内灣し、全体的に細長い。	底径が広く、口縁部は大きく開く。
地文	RL 縦走のみ。無文はない	条の短い斜縄文で、LR が多い。燃糸文や無文もある
貼付文	口唇直下に横環する。SF+4 単位がみられ、同心円モチーフなどが発達する	口唇直下ではなく、胴部にも発達しない。SF+4 単位は存在しない。交点に竹管文様の刺突を施す
縄線文	1 本ずつの意匠。施文順は貼付文より先	2 本 1 組の意匠。施文順は貼付文の後

型式	下田ノ沢系宇津内ⅡbⅠ式				宇津内系下田ノ沢Ⅱ1式	
図版番号	1	2	3	4	5	6
器形	U	U	U	U	S	S
地文	U	U	U	U	S	S
貼付文	U	U	U+S	U+S	U	U
縄線文	S	U+S	U	S	S	S

第 17 図 上：宇津内ⅡbⅠ式土器と下田ノ沢Ⅱ1式土器の対比

下：「下田ノ沢系宇津内ⅡbⅠ式」と「宇津内系下田ノ沢Ⅱ1式」の内容と系統  
(U・S の略号については上の表参照)



第18図 「下田ノ沢系宇津内ⅡbⅠ式」土器（上段）と「宇津内系下田ノ沢ⅡⅠ式」土器（下段）

1～3・6：幾田 4・5：ボン春刈古丹川北岸

#### 4) 下田ノ沢ⅡⅠ式と宇津内ⅡbⅠ式の型式交渉（第 16 図下段）

##### a) 分布圏の変化

下田ノ沢ⅡⅠ式は確認されている遺跡数がごく少ないので確実なことは言えないが、分布の中心は南千島を含めた根釧原野以東へと移動するようである（澤 1982、大沼 1982a）。ただし、釧路地域以西の池田町池田 3 遺跡（横山編 1993）でも下田ノ沢ⅡⅠ式は確認されており、分布圏は今後の調査の進展を待って判断する必要がある。一方、宇津内ⅡbⅠ式の分布圏は宇津内Ⅱa式期とほぼ同じと思われるが、東側では、分布境界域が再び羅臼側に押し戻されるという若干の変化が見られる。

##### b) 相方向的な型式交渉

宇津内ⅡbⅠ式・下田ノ沢ⅡⅠ式の分布境界域となる羅臼町では宇津内Ⅱb式・下田ノ沢ⅡⅠ式が一遺跡内に混在する。具体的には、宇津内ⅡbⅠ式そのもの、下田ノ沢ⅡⅠ式そのものに加えて、一個体中に両型式の特徴を併せ持った「折衷的な」土器（第 18 図）の三者が混在している。この「折衷的な」土器群について検討してみよう。

まず、宇津内ⅡbⅠ式・下田ノ沢ⅡⅠ式そのものの型式学的特徴について器形・文様別にまとめてみた（第 17 図上の表）。いくつかの「折衷的な」土器においてこれらの属性がどのように組み合わせられているかをみたのが第 17 図下の表である。組合せパターンは大きく 2 種類に分けられる。すなわち、宇津内ⅡbⅠ式の器形・地文の上に下田ノ沢ⅡⅠ式的な装飾（貼付文・縄線文）が認められるタイプ（「下田ノ沢系宇津内ⅡbⅠ式」・第 18 図上段）と、逆に下田ノ沢ⅡⅠ式の器形・地文の上に宇津内ⅡbⅠ式的な装飾（貼付文）が認められるタイプ（「宇津内系下田ノ沢ⅡⅠ式」・第 18 図下段）である。ここで重要なのは、組合せパターンは完全にランダムにはならず、器形と地文とは必ず同一系統がセットになっている点である。すなわち、どちらかの系統の「器形・地文」のベースの上に文様要素が折衷する、というパターンとなっているわけである。この時期の羅臼町周辺の土器製作者の間では二つの系統が完全に意識・区別されており、その上で何らかの意図を持って文様要素が二つの系統間で交換されていた、と見ることができよう。

しかしながら、二つの系統が「対称的・拮抗的に」併存する状況は、主に羅臼町周辺で認められるのみで、他の地域ではきわめて稀にしか確認されていない。オホーツク海岸沿いの斜里町～網走市～常呂町では、下田ノ沢ⅡⅠ式そのものと「下田ノ沢系宇津内ⅡbⅠ式」の出土は認められるが、「宇津内系下田ノ沢ⅡⅠ式」はきわめて稀にしか確認できないようである（注 11）。逆に羅臼町以東・以南では、宇津内ⅡbⅠ式そのものは存在するようであるが、「下田ノ沢系宇津内ⅡbⅠ式」を確認することはできなかった。



## c) 交渉経路の変化

下田ノ沢Ⅱ1式・宇津内ⅡbⅠ式の交渉経路であるが、羅臼町～斜里町～網走市・常呂町と西にくるに従い下田ノ沢Ⅱ1式・「下田ノ沢系宇津内式」の出土割合が逡減すると思われる点から、オホーツク海沿岸の経路が想定できる。内陸の経路については資料の少ない現状では判断が難しい。中標津では下田ノ沢Ⅱ1式と宇津内ⅡbⅠ式が混在しているようである（大沼 1972）。前段階で認められた網走川流域と釧路川流域の交渉経路については、存続を示すような資料はない。ただ、もし仮に内陸経路が存在したとしても、下田ノ沢式系の傾斜的分布状況から見ると、交渉経路がオホーツク海沿岸の方に集約されていることは認められてよい。このような交渉経路の変化は、前述した下田ノ沢Ⅱ1式の分布圏の変化と関連する可能性があるだろう。

5) 釧路地域における後北 C<sub>1</sub> 式と在地の系統のゆくえ

前節までにみたとおり、道東部では後北 C<sub>1</sub> 式と併行して宇津内ⅡbⅡ式が存在し、さらに南千島においては「下田ノ沢Ⅱ2式」の存在が推定される。

宇津内ⅡbⅡ式と後北 C<sub>1</sub> 式の関係については前章で述べたが、網走地域ではこの時期、後北 C<sub>1</sub> 式の分布が拡大すると共に型式学的影響も強くもたらされ、宇津内ⅡbⅡ式は文様の縦の割りつけ原理に関する特徴以外はほぼ後北 C<sub>1</sub> 式に準ずる内容となる。なお前章では触れなかったが、道央部では宇津内ⅡbⅠ式以後宇津内式系の土器の出土がわずかながら増加する傾向にあり（例えば深川市北広里3遺跡（葛西 1994・葛西 2002）、札幌市 N316 遺跡（羽賀編 1994：25 図 11-2・3）、中富良野町本幸遺跡（富良野工高郷土史研究会編 1968）など）、後北式と宇津内式の相互交渉が宇津内ⅡbⅠ式以後強まる傾向にあることがわかる。

一方で釧路地域では、西に隣接する浦幌町十勝太若月遺跡（石橋ほか 1975）で後北 C<sub>1</sub> 式がまとまって出土するなど、後北 C<sub>1</sub> 式の分布拡大が認められる一方、下田ノ沢Ⅱ式の伝統を残す「下田ノ沢Ⅱ2式」は、釧路地域では確認されていない。すなわち、釧路地域における後北 C<sub>1</sub> 式の分布拡大は、現状では相互交渉の確認できない一方的な「交替」としてとらえられるようである。これには、澤氏が指摘したように（澤 1982）、先立つ時期に下田ノ沢Ⅱ1式の分布圏が東へシフトしているような状況と関連づけられると思われる。ただ、どちらが原因でどちらが結果であるかは今後検討の必要があるだろう。

南千島では「下田ノ沢Ⅱ2式」に見られるように下田ノ沢式と後北式の交渉の痕跡がみとめられる。しかしながら、文様要素から地文に至るまで共通性の高い後北 C<sub>1</sub> 式と宇津内ⅡbⅡ式との関係と、文様モチーフ等の類似しか認められない後北 C<sub>1</sub> 式と「下田ノ沢Ⅱ2式」との関係とは、類似度・関係の強さが異なっている。この点からすると、後北 C<sub>1</sub> 式－宇津内ⅡbⅡ式－「下田ノ

沢Ⅱ2 式」というような、宇津内ⅡbⅡ 式を間に介した間接的な交渉の可能性を考えるべきかもしれない。なおこのような間接的な交渉の背景として、下田ノ沢Ⅱ1 式期において発達したオホーツク海沿岸の交渉経路がこの時期にも利用されていたと考えると、道央部―網走地域―根室～南千島地域の関係を図式的に・容易に理解できるようになると思われる。

## 5. 小結

下田ノ沢式土器と宇津内式土器の型式交渉の推移をトレースしてきた。もう一度両型式の型式交渉と交渉経路・型式の分布圏の変化をまとめておこう。

- 1) 縄文晩期末～続縄文初頭の時期においては道東部内の地域差はそれほどはっきりしていなかったが、次の興津式／「元町 2 式」の時期になると道東部内で地域差がはっきりしてくる。一つは突瘤文の有無や器形・地文等の地域差で、これは道東部内の南北、すなわち釧路／網走地域で異なる差であり、地域差として大きなものである。もう一つは帯縄文に関わる地域差で、こちらは主に道東部内の東西、すなわち常呂川流域・釧路川流域／それ以東で異なる地域差であり、道央部との型式交渉がその背景にある。このようにこの時期の道東部内の地域差は、南北と東西の差が重層するやや複雑な構造となっている。なお、釧路―網走地域間の交流自体も常呂川流域等の道央部に近い側で活発に行われていた点からすると、釧路地域・網走地域・道央部の三者間交流がこの時期重要な意味を有していたことが伺える。
- 2) 下田ノ沢Ⅰ式／宇津内Ⅱa 式の時期になると、網走地域の系統、すなわち宇津内Ⅱa 式の分布圏が拡大する一方、釧路地域の系統すなわち下田ノ沢Ⅰ式の分布圏は縮小する。型式内容も、それと連動するように網走地域側からの影響が強まって地域差は縮小し、下田ノ沢Ⅰ式は宇津内Ⅱa 式の地域的変異とも言えるような内容となる。また、道央部との型式交渉はこの時期影を潜める一方、網走川流域―釧路川流域というやや東寄りの内陸交渉経路が新たに活発化する。
- 3) 下田ノ沢Ⅱ1 式／宇津内ⅡbⅠ式の時期になると釧路／網走地域間の地域差が再び拡大する。両系統の接触が盛んな羅臼町周辺では一つの遺跡内に両型式の土器が併存するほか、一個体内で文様要素が折衷する土器も認められる。両系統の型式交渉は羅臼町周辺以外でも認められるが、羅臼町周辺から離れるに従い折衷的な土器が遞減する傾向がある。このような地理的傾斜の状況から推測すると、この時期の交渉経路はオホーツク海沿岸を中心とするものであった可能性が高い。

- 4) 後北 C<sub>1</sub> 式の時期になると道東部では道央部からの影響が強まる。ただし網走地域では在地の系統が残り、後北 C<sub>1</sub> 式と宇津内ⅡbⅡ式が併存するのに対し、道東部太平洋側では在地の系統は著しく衰退して後北 C<sub>1</sub> 式との「交替」が起こり、在地の系統は南千島地域において「下田ノ沢Ⅱ2 式」が確認されるのみとなる。宇津内ⅡbⅡ式の側は道央部との相互交渉が認められる点からすると、この時期の地域間交渉は後北 C<sub>1</sub> 式（道央部）－宇津内ⅡbⅡ式（網走地域）－「下田ノ沢Ⅱ2 式」（根室・南千島地域）というような構造・経路で行われていた可能性が考えられる。

以上のように続縄文前半期の道東部においては、網走－釧路地域間でも、道東部－道央部間でも土器型式交渉の様態が時期ごとに変動していることが明らかになったといえよう。また、土器型式の分布圏と交渉経路についても、型式交渉の変動と密接に連動しながら変化していることを指摘してきたつもりである。

以上新たに判明した土器型式の実態を、従来の研究と対比させて評価すると、以下のような新視点が新たに導き出されよう。

- 1) これまで宇津内式と下田ノ沢式はそれぞれ等価なものとして扱われ、網走地域・釧路地域を代表する型式として対比されたり、「宇津内・下田ノ沢式」と一括されて道央部・道南部の諸型式と対置されたりすることが多かったように思われる。無論、このような理解は大筋では正しい。しかし細かく見ると、宇津内式と下田ノ沢式とはその存続期間全体を通じて同じ関係を有していたわけではないし、両型式と道央部との関係も時期によって様々に変化していることが明らかになった。特に、宇津内Ⅱa 式期には型式的にも分布上も宇津内式系統の勢力が強まる一方で、下田ノ沢式系統の独自性は衰退する点、また続く時期では宇津内式系統が次第に後北式系統との関係を強めていく一方で、下田ノ沢式系統はいったん失った独自性を回復し、道央部との関係を強めない方向に変化してゆく点などは、これまであまり注意されなかった点(注 12)として留意する必要があるだろう。網走地域＝宇津内式／釧路地域＝下田ノ沢式という図式で二分法的に理解してしまうと、型式の実態を見誤る恐れがあることを指摘しておきたい。
- 2) 上のような型式の実態と関連して、道央部との道東部の型式交渉の推移についても新たな事実が明らかになった。縄文晩期末～続縄文初頭の時期では道央部と道東部の地域差は少なく、続く「元町 2 式」・興津式期でも道央部・網走地域・釧路地域の交渉は常呂川流域等の道央部に近い地域で活発に行われていた。しかし次の時期には釧路地域の系統がやや衰退するのと連動して、次第に地域間交渉の経路・構造が道央部－網走地域－釧路・南千島地域というあ

り方に変化し、道央部と道東部太平洋側の関係が相対的に希薄になる。そして道東部太平洋側には後北 C<sub>1</sub> 式が単独で（在地の系統と併存しない形で）侵入する。このように続縄文前半期では、当初は道央部・道東部で一体性が強かったが、まず道央部／道東部という点で地域差が顕在化し、さらに続いて道央部－網走地域－釧路・南千島地域という構造へと変化する。

このような変化の背景には、道東部内および道東部－道央部間でのヒト・土器・情報の流れの変化があると考えられる。

では上記 1) 2) の背景としては、どのような社会の変化が想定されうるであろうか。この問題に答えるのは容易ではないが、いくつかの可能性を指摘しておきたい。

一つは網走地域の人口増(注 13)である。宇津内Ⅱa 式の分布と影響力が拡大する背景としてはまずこの可能性が考えられる。またこの人口増説は、交渉経路の変化、すなわち宇津内式系統と道央部の関係が累積的に強化される一方、釧路地域と道央部間の情報の流れが相対的に希薄になることへの説明としても魅力的である。ただし現状では現時点ではデータが不足しており、遺跡数・遺跡規模の分析から人口増説を検討するのは難しいし、そもそも考古学的資料から人口の増減を証明すること自体、かなりの困難を伴うことは否めない。ここでは今後分析を行う際に、人口増説が検討価値のある一視点となりうることを指摘するに止めたい。

もう一つは、南千島地域の発展である。道央部－網走地域－釧路・南千島地域という地域構造・情報の流れが成立するもう一つの背景としては、釧路地域から南千島地域へと下田ノ沢式系統の中心地が移動し、それに伴って下田ノ沢式系統と道央部とは直接的な交渉が途切れ、下田ノ沢式系統にとっては網走地域との交渉が地域間交渉のメインルートとなった、というような推移が想定される。もっともこのような想定を裏付けるような考古学的データが南千島地域で得られているわけではなく、筆者の想定も思いつきのレヴェルに過ぎない。一応、南千島で出土している資料の現状をみておくと（杉浦 1999）、絶対数が不足しており確言するのはためられるが、続縄文前半期では下田ノ沢式系統が優勢である一方で、宇津内式系統も若干出土している。さらに下田ノ沢Ⅱ式～後北 C<sub>2</sub>・D 式にかけての資料がやや目立つようである。以上の現状と先の筆者の想定との間には、とりあえず矛盾はない。

さらに想像を逞しくすれば、南千島地域発展の背景としては、人口の自然増、あるいは釧路地域からの移動による増加等が考えられるが、この実態も全く不明である。とりあえず、釧路地域から南千島地域へヒトが移動したような考古学的データ（下田ノ沢Ⅰ式期以後、継続性が途切れるような遺跡が多いような状況）は全く確認できていない。さらに、先に想定した網走地域の人口増と、ここで想定した南千島地域の発展の間にある関係も明らかではない。

以上、本章では土器型式そのものの実態はかなりの程度明らかにすることができたが、その背景となる社会の変化については、(それが土器型式のみの検討によって明らかになるわけではないのは自明のことであるが)十分に明らかにすることは出来なかった。この問題については今後の研究に委ねられる部分が大きいが、今回本章で得られた成果は、続縄文時代における地域性の変化プロセス、すなわち前半の「地方色の豊かな時代」から後半の「斉一性の強い時代」(藤本 1982b: 13)へと推移してゆく過程を解明するための基礎データとして、有意義なものとなるであろう。

#### 注

- (1) 後続する下田ノ沢Ⅰ式の時期では、伊茶仁チシネ第一竪穴群に帯縄文の例がある(相田・相田編 1992: 第24図7)。よって、この段階の羅臼町・標津町周辺地域にも「帯縄文系」興津式が分布する可能性はあるが、釧路地域以西よりもその割合が少ないことは認められてよいと思われる。
- (2) 宇津内Ⅱa式でも縄線文は施される例とされない例があるが、新しくなるに従って施される例が増加する傾向にある。下田ノ沢Ⅰ式の場合にも同様の傾向が認められるか否かは現状では確認できない。
- (3) 相泊遺跡については、かつては「合泊」(澤ほか 1971)が正式な表記とされていたが、現在では「相泊」(涌坂編 1996)という表記が採用されているということである。小論では後者に統一した。なおこの件については宇田川洋・涌坂周一両氏のご教示を得た。
- (4) 前章で筆者は、網走地域におけるこの時期の土器群を「栄浦第二・第一遺跡の土器群」としてまとめた。その際に触れたが、この段階でも網走地域・釧路地域間で若干の地域差は存在するようである。むしろ、「元町2式」・興津式期と比較した場合にはその地域差は小さいと言えるのだが、本文で述べているような地域構造の成立に関わる問題として注意が必要である。
- (5) これらの土器は下田ノ沢Ⅰ式であって、「元町2式」より新しい時期のものという考え方もできよう。しかし第13図11の土器の存在や、中ノ島遺跡では後続の宇津内Ⅱa式がほとんど出土していない点からすると、中ノ島遺跡におけるこれら「突瘤文+横走帯縄文」土器群の大部分は興津式・「元町2式」併行で、第13図11のような「折衷的」性格の土器とみてよいように思われる。
- (6) これら富良野・えりもの土器群の編年に関しては、宇田川氏(宇田川 1982)や大沼氏(大沼 1982b, 1982c)の他に、工藤義衛氏、乾芳宏氏、川内谷修氏が詳細な検討を行っており(工藤 1986、乾 1991b、川内谷 1998)、氏らはこれらの土器群を下田ノ沢Ⅰ式(の古手)併行と位置づけている。確かに、えりも町東歌別遺跡の「東歌別式」の一部は、貼付文の特徴からすると下田ノ沢Ⅰ式の時期まで下る可能性があり、そのように考えた場合には、この時期、えりも方面や十勝川流域内陸部に向かって下田ノ沢Ⅰ式の分布拡大があったと位置づけることができよう。すなわち、釧路経由の侵入ないし影響拡大である。しかし筆者は前註5)で述べたとおり、前述の各氏の見解よりやや古く、大部分は「元町2式」併行だと考え

ている。すなわち、この時期・地域の、特に突瘤文に関しては、網走地域もしくは道央部（前段階の道北～日本海側に分布するいわゆる「メクマ式」（大場・管 1972）や「琴似式」（千代 1965）などからの流れ）経由の波及を推定している。

なお、今後この地域の編年を考える際には、先行する縄文晩期末～続縄文初頭の時期の資料との系統関係や連続性について配慮する必要があると思われる。現状ではこの地域及び周辺における当該期や後続時期の資料が非常に少ないため、系統・編年の詳細は不明とせざるを得ない。

- (7) ただし常呂川流域では前註 5) の通り下田ノ沢 I 式が残る可能性がある。
- (8) ちなみに、これら「宇津内式の影響度」の差を時間差と考える積極的な証拠はない。
- (9) 前註 5) 7) の通り、中ノ島遺跡等、常呂川流域の遺跡例は下田ノ沢 I 式を含む可能性がある。しかしその場合でも下田ノ沢 I 式の影響は宇津内 II a 式成立期の一時的・地域的なもので、宇津内 II a 式の後半までは及ばないと思われる。
- (10) 芦別町滝里 33 遺跡では宇津内 II a 式の影響を受けていると思われる土器が出土している（佐川編 1993：図 IV-20-3）。一方、量的にはまれであるが下田ノ沢 I 式には帯縄文が残存する。これらのことから、この時期においても道東部～道央部間の交渉は多少なりとも存続していると考えられる。しかし、全体としては道央部からの直接的な型式学的影响は稀になり、型式交渉は衰退するようである。
- (11) 常呂町トコロチャシ跡遺跡では「宇津内系下田ノ沢 II 1 式」が 1 個体出土している（宇田川・熊木編 2001：Fig.26-3）。
- (12) もっともこの点に関しては、宇津内 II b 式を「後北式北見型」として把握していた河野広道氏の系統認識（河野 1958）を改めて再評価する必要があると筆者は考えている。
- (13) 逆に、釧路地域での人口減があったとする想定も論理的には成立しよう。しかし資料がかなり限られる現状では、興津式～下田ノ沢 I 式にかけての釧路地域で遺跡数や遺跡規模の変化を問題にすることはかなり難しい。むしろ、網走地域の「元町 2 式」～宇津内 II a 式にかけての人口増を問題にすることが、（現状では本文中に述べたとおり困難が多いが）データの取り組みが容易であろうし、実感としてもイメージしやすいであろう。

## 第3章 後北式土器の成立過程

### 1. 研究の現状と本章の目的

後北式土器は、「後期北海道式薄手縄紋土器」の略称として、河野広道氏が1933年に設定した土器型式群である(河野 1933b)。当初、この後北式についてはA型、B型、C型、D型という4つの細別型式が時期差を持つものとして設定されたが、後に河野氏自らの改訂(河野 1955、河野 1959)やC<sub>2</sub>式とD式の共存の指摘(大沼 1977、大沼 1982b)などがあり細別や型式名が変更されてきた。現在、河野氏の定義に従い「後北式」という型式名称を用いる場合には、A式、B式、C<sub>1</sub>式、C<sub>2</sub>・D式の4細別を採用するのが一般的である。

これらの後北式土器の編年上の位置づけであるが、現在ではおおよそ縄文中期～後期(巻末付図1上の縄文土器編年表参照)に至る時期と考えられている。分布については、初期に道央部で成立した後、後北C<sub>1</sub>式からC<sub>2</sub>・D式にかけて全道はもとより越後平野からサハリン南部・南千島に至る広域に拡散することが判明している。このように後北式土器は幅広い時期・地域にわたって存在する土器であり、まさに縄文土器型式を代表する型式群とすることができる。

本章ではこれらの後北式土器のうち、後北A式の成立からC<sub>1</sub>式に至までの変遷を検討する。それはすなわち、道央部における縄文前半期の土器編年に関する考察でもある。道央部縄文前半期の編年については、河野広道氏による後北式の設定と山内清男氏による「縄紋式」の提唱(馬場ほか 1936、山内 1939)を端緒として、すでに多くの研究の蓄積がある(千代 1965、森田 1967、大沼 1977、菊池 1978、大沼 1982b、大沼 1982c、木村 1982、高橋 1984、大沼 1989、鈴木 1998、青野 1999、佐藤 2000、鈴木 2003、その他)。型式名称や大別・細別の基準等については諸説あるが、道央部在地の系統の型式変遷や、道南部の恵山式との編年対比に関しては理解が共有されつつあると筆者は認識している。そのような中で後北式の編年を論じるのは屋上に屋を架すようなところもあるが、本章では以下の二点を特に問題としたい。一点は道東部との編年対比と型式交渉に関する部分であり、もう一点は文様割りつけ原理という視点から見た後北式の評価である。

後北式土器の成立過程と系統をめぐっては、これまでにやや異なる2つの見解が提起されてきた。一つは道央部に分布を拡大させた恵山式と、道東部の型式群が接触して後北式が成立したと

する見解（森田 1967、木村 1982、高橋 1984）であり、もう一方は、前者の見解に比して他地域からの影響をやや少なめに評価し、道央部の在地の伝統をやや強調する意見（大沼 1982b）である。両者の見解は互いに相容れないほど対立するようなものではないが、いずれにしる後北式の成立過程に関しては、縦の系統と横の影響関係が十分に整理されているとは言い難い状況にあることはここからも伺える。よってこの問題を検討するためにはまず、道央部と道南部・道東部の正確かつ緻密な編年対比を行わなければならない。道央部と道南部の対比に関しては研究がかなり進展し編年対比も確定しつつあると筆者は理解しているが、道央部と道東部に関しては、後北式系統と宇津内式系統の共伴事例や、両者の型式交渉を明瞭に示す例がこれまで限られていたため編年対比は漠然としたものにならざるを得なかった。そのため特に後北式の成立過程にみる道東部からの影響については、それがどの時期の宇津内式からもたらされたものなのかははっきり言及されてこなかったのである。しかし近年、深川市北広里 3 遺跡で両系統の共伴事例が確認されるなど、研究は新たな局面を迎えつつある。ここでは近年の北広里 3 遺跡の事例等をもとに道央部と道東部の編年対比を確定させ、そこから明らかになる後北式系統と宇津内式系統の横の影響関係について具体的に考察してみたい。結論から先に言えば、後北式の成立過程においては、後北 A 式の時期から宇津内式系統との交渉が活発に行われていたことが明らかになるであろう。

後北式の成立に際しては以上のような道東部との関係がある一方で、それに先立つ時期では道南部の恵山式からの影響が強く及んでおり、それが後北式の母胎ともなっている。このような道南部・道央部・道東部の三者の関係については、文様の割りつけ原理という観点から構造的に分析すると理解が容易になると筆者は考えている。本論第 1 章で後北 C<sub>1</sub> 式土器の文様の割りつけ原理の分析を行った際に用いた、胴部文様を縦・横の単位に分割してとらえる視点で後北式土器の文様割りつけ・文様単位の変遷を概観し、この方法・視点が続縄文土器全体を構造的に理解する上で有効であることを示すのも本章の目的の一つとなる。

改めて言うまでもなく、続縄文期における土器型式交渉については、文様割りつけ原理の比較のみで全てが明らかになるわけではない。その意味では本章の分析はあくまで予察に止まるが、続縄文土器編年全体を一つの法則を用いて説明し、縦の編年と横の影響関係を整理して土器編年の骨組みを構築する、という意味では従来の編年研究にはない簡潔明瞭な視点が新たに提供されることになろう。その点に本章の意義を見出していただければ幸いである。

## 2. 道央部における在地の系統とその編年

### 1) はじめに



道東部との編年対比を行う前に、道央部在地の系統(注 1)の変遷過程とその細別・大別について確認しておこう。先述したように、これまで多くの研究者が道央部の編年について論じてきた。その過程で様々な型式名称が提唱されてきたが、土器の変遷過程そのものに対する理解にはあまり差がないと筆者は認識している。問題は連続する組列の何処に細別の境界を設定するかであり、その際に何を重視するかであろう。ここでは河野広道氏の定義と型式名称を尊重し、巻末付図 1 上のように型式・段階を設定する。結果として大沼忠春氏の編年(大沼 1982a)とほぼ同じ理解に至ることになった。以下に編年表の内容を説明し、あわせて道南部との編年対比も確認しておこう。

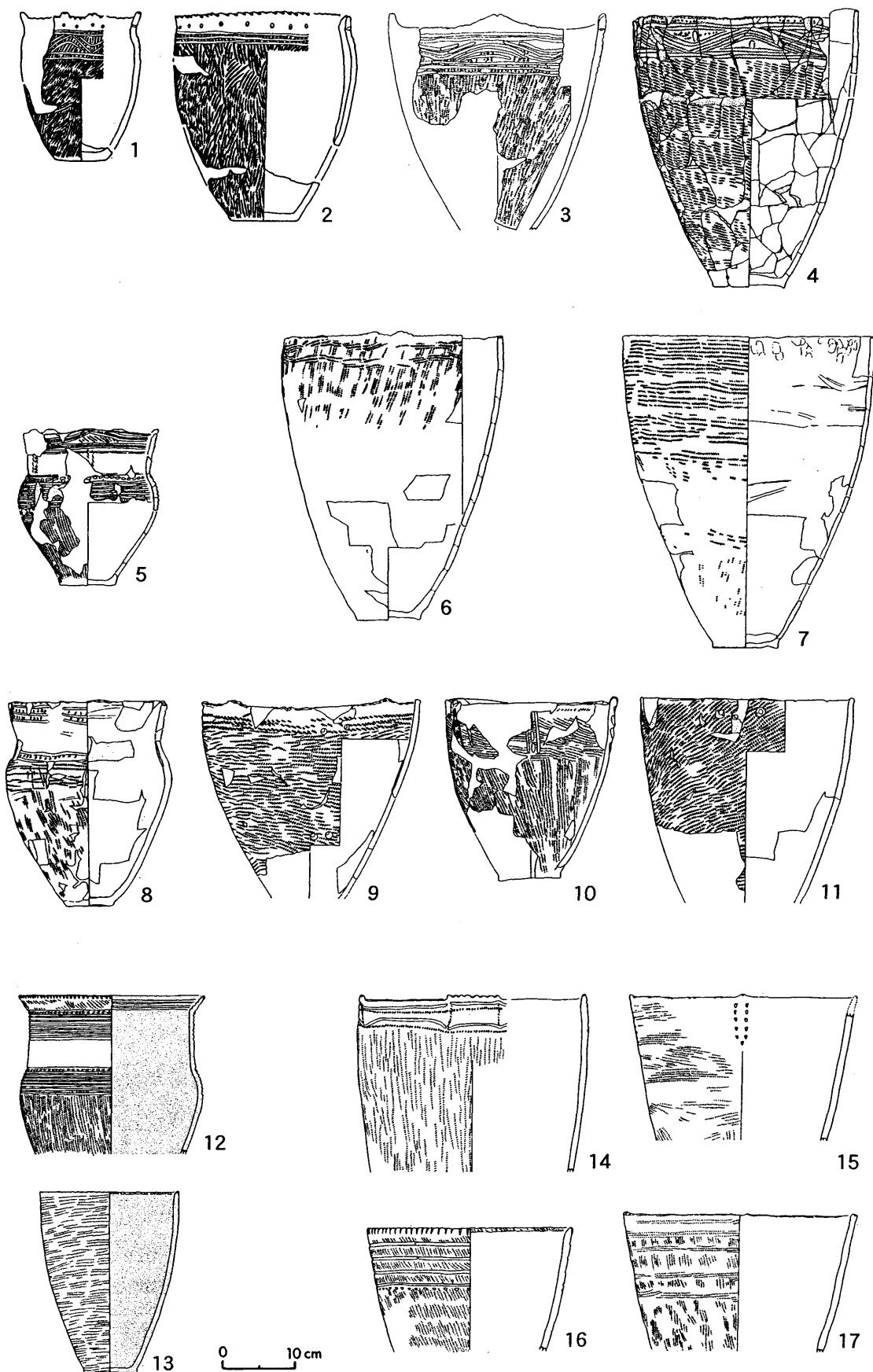
## 2) 続縄文早期

まず続縄文早期(「砂沢式～二枚橋式併行期」：第 19 図 1～11)である。縄文晩期後葉の幣舞式と比較すると器種の単純化、口縁部突起の衰退、平底化、沈線文の減少等の変化はあるが、深鉢の基本的な特徴はプロポーション・文様帯・文様要素とも幣舞式の伝統下にある土器群といえる。これらの土器群に対しては様々な型式名称(琴似式(千代 1965)、トニカ式(森田 1967)、大狩部式(藤本 1961、乾 1988)等)がこれまで提唱されてきた。確かにこの時期の型式内容には複雑な部分があるため(高瀬・福田 2001)、これ以後の型式とは違って系統・細別に関する各氏の認識は一致していないのが現状である。ただし、これらの型式群に関する議論が本章で扱うテーマに大きな影響を及ぼすわけではないので、ここでは問題に深入りせずこの時期を一括し、「砂沢式～二枚橋式併行期」として扱うことにする。最近、札幌市 N30 遺跡(上野編 1998)からまとまって出土した土器群(第 19 図 8～11 にその一部を示す)はこの時期の好例である。ここで出土した第 19 図 8 の土器には二枚橋式(第 19 図 5)の強い影響が認められる。帰属時期を示す例といえよう。

## 3) 続縄文前期

### a) 「恵山式アヨロ 1 式併行期」(第 19 図 12～17)

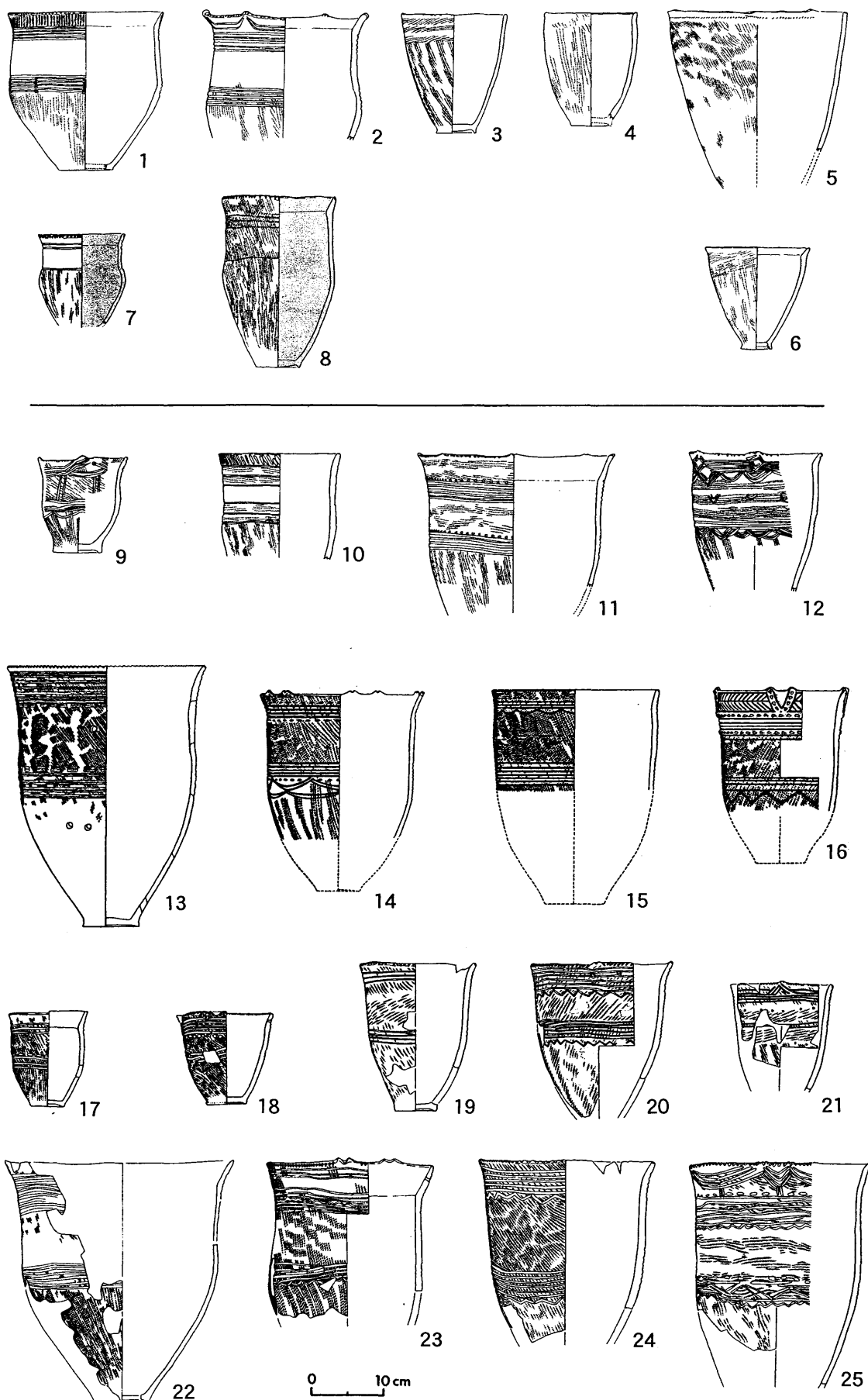
二枚橋式併行期に後続する時期であり、恵山式の系統ではアヨロ 1 式が設定されているが(高橋 1884)、道央部在地系の土器を同じように細別するのは難しい。例えば白老町アヨロ遺跡(高橋ほか 1980)墓 19 で恵山式アヨロ 1 式(第 19 図 12)と共伴した在地系土器(同図 13)をみると、前段階の土器とほとんど選ぶところがない。ここでは高橋正勝氏による編年(高橋 1984)を参考に、江別市江別太遺跡(高橋編 1979)Ⅴ層出土土器群の一部を標式として、「恵山式アヨロ 1 式併行期」という段階を仮設しておく。前段階の土器群と比較した場合、波状文のモチーフが消滅するという違いが生じていると予想されるが、確証はない。



第19図 1～11：「砂沢式～二枚橋式併行期」の土器群（5は二枚橋式）

12～17：「恵山式アヨロ1式併行期」の土器群（12は恵山式アヨロ1式）

1・2：「琴似式」 3：大川 4：ユカンボシ E7 5～7：H37 栄町地点 8～11：N30・2号竪穴  
 抜粋 12・13：アヨロ・墓19 14～17：江別太V層



第20図 上段：「江別太Ⅲ6層段階」の土器群（1・2・7は恵山式アヨロ2a式、3～6・8は在地系）

下段：「恵山式アヨロ2b式相当段階」の土器群

1～6：江別太Ⅲ6層 7・8：アヨロ・墓15 9～12：江別太Ⅲ5層 13～16：紅葉山33号  
17～25：N295

b) 「江別太Ⅲ6 層段階」(第 20 図 1~8)

次の段階になると道央部でもアヨロ 2a 式相当の恵山式の出土が増加し始めるが、土器組成の主体はこの段階までは在地系の土器となっていたようである(高橋 1984: 371)。江別太遺跡Ⅲ6 層(第 20 図 1~6)の内容からその傾向が確認できる。「江別太Ⅲ6 層段階」という段階を仮設しておこう。なおこの段階の在地系土器は、第 20 図 8 のような特殊な例(恵山式の模倣?)を除いて基本的に前段階からあまり変化していない。

c) 「アヨロ 2b 式相当段階」(第 20 図 9~25)

次の段階になると恵山式の影響が道央部に強く及び、恵山式/在地系という 2 系統の並立は解消されて恵山式系統のみの組成となる(高橋 1984)。「アヨロ 2b 式相当段階」として設定する。

「相当」という表現を使ったのは地域差が認められるからである。すなわち、大沼氏によって言及され(大沼 1982c)、さらに近年では高瀬克範氏が詳細に分析したように(高瀬 1998)、この段階の道央部の恵山式には器形・文様ともに地域色が認められ、さらに製作技術面に関しても在地の伝統が保持されている。そのような在地の系統を示す特徴として、ここでは以下の 2 点に注意しておきたい。第 1 点は器形、具体的には頸部のくびれ度である。道南部では頸部のくびれがやや強いものが多いのに対し、道央部ではくびれの少ない後北式的な器形(いわゆる「倒鐘形」(河野 1933b))が多い。第 2 点は稀な例ではあるが、口縁部突起下の貼付文(第 20 図 16)についてである。大沼氏も述べているように(大沼 1982c)、このような貼付文は道東部と関連する要素であると同時に、次の後北 A 式につながるものでもある。このように、この段階の道央部の土器は恵山式の範疇に含まれるものの、在地的な特色は様々な要素の中に保持されており、それらは次の後北 A 式まで引き継がれてゆく。

4) 続縄文中期

後北式土器型式群の変遷に関しては、最近、鈴木信氏が型式組列と編年を具体的かつ詳細に提示している(鈴木 2003)。鈴木氏が提示した型式組列には頷ける部分も多いが、細かい点では筆者と理解が異なる部分もある。また鈴木氏は細別(段階設定)を非常に細かく行っている(例えば後北 A 式では 4 段階、後北 B 式では 3 段階など)が、鈴木氏の細別が全て時期差として設定できるかについては議論の余地があると筆者は考える。さらに鈴木氏は「後北 A 式」等の学史に則った型式名を用いているが、氏がそれらの型式名で呼ぶ土器の内容をみると、型式設定者によるオリジナルな定義・分類とは異なっている部分がある(注 2)。以上の点から、ここでは鈴木氏の設定した型式組列に従いつつ若干の組み替えを行い、さらに大別の境界の設定、すなわち型式名の当てはめを第 25 図のように改変して編年を行う。鈴木氏の型式組列を採用する理由は筆

者の型式変遷に対する理解が鈴木氏と近いからであり、氏の大別・型式認識を採用しない理由は学史上の定義を尊重し、混乱を避けるためである。

#### a) 後北 A 式 (第 21 図)

「アヨロ 2b 式相当段階」の次にくる型式については、例えば高橋正勝氏は後北 A 式の名称を避けて「江別太 1～3 式」を設定している (高橋 1984)。定義がやや曖昧な「後北 A 式」を採用しない高橋氏の意図は理解できるが、筆者はこの段階を後北 A 式として再定義しても混乱は生じないと思う。ちなみに筆者は、後北 A 式を細別して段階を設定するのは現時点では難しいとみるが、前後の型式の特徴から推定される型式組列としては、以下のような型式内部の変遷過程が想定できると考えている。

- ・沈線による連続山形文を持つもの (第 21 図 1・3・7・12～14・16) から持たないものへ
- ・横走沈線に区画された連続斜線文を持つもの (第 21 図 2・5・8・11・13) から横走沈線に区画されない連続斜線文を持つものへ
- ・口縁部突起下から垂下する文様意匠 (貼付文や沈線文等) を持たないものから持つもの (第 21 図 2・8・10・12～21・23・25～27) へ

他に、口縁部直下に水平に巡る貼付文も基本的に新しい要素と思われるが、これについては宇津内式系統からの影響を考える必要があるので後述する。

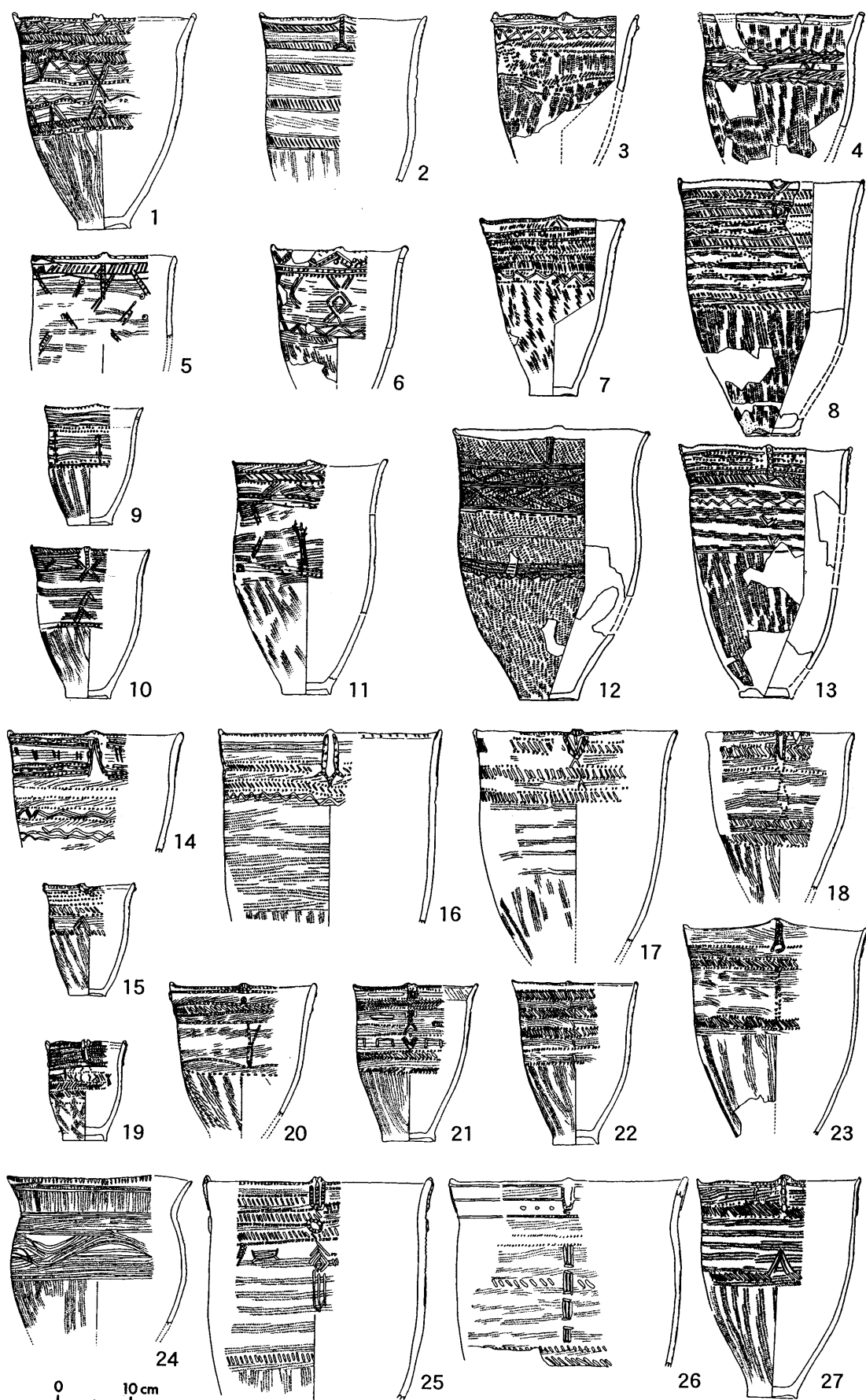
なお、第 21 図 24 は江別太遺跡Ⅲ3 層より出土した恵山式アヨロ 3a 式土器である。同じ層からは第 21 図 15・17・18・22・23・26 の後北 A 式が出土しており、併行関係が示唆される。

#### b) 後北 B 式 (第 22 図)

後北 A 式と B 式の型式学的関係は漸移的である。特に第 22 図 1～4 は貼付文による文様が口縁部に集中しており、後北 A 式との中間的様相を示す。ここでは連続山形文や連続斜線文の消失を以て両者を区分しておく (注 3)。

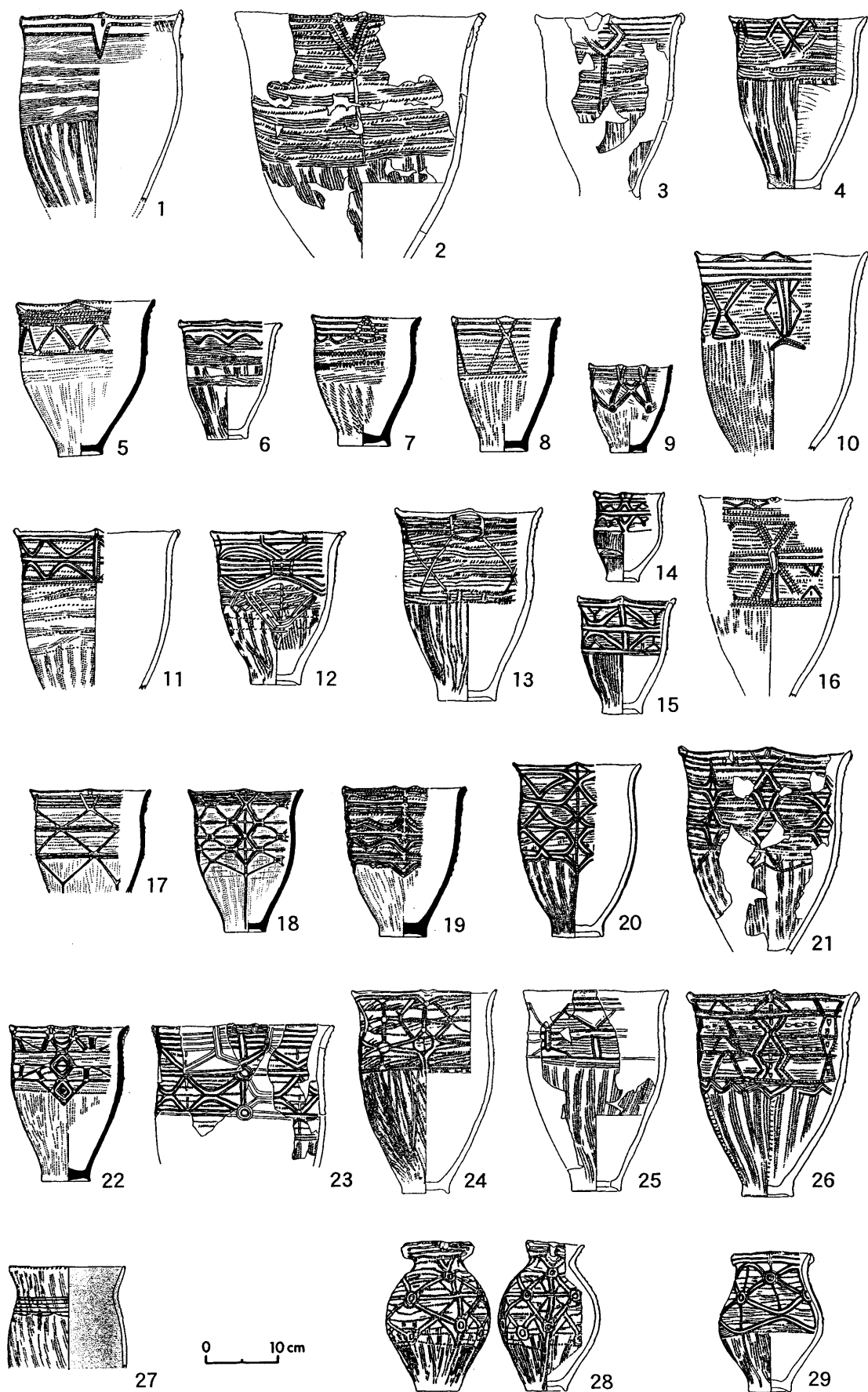
後北 B 式の型式組列としては、文様割りつけに着目すると以下のような変遷過程が想定できる。

- ・貼付文の施文位置が口縁部のみの例 (第 22 図 1～4・6・7) から胴部上半まで拡がる例 (第 22 図 5・11) へ、さらに胴部全面まで拡大する例 (第 22 図上記以外) へ
- ・貼付文による文様意匠の、横方向の単位数が 1 (第 22 図 1～9) から 2 (第 22 図 11～16)、さらに 3 以上 (第 22 図 17～21・23・26・28・29) へ
- ・貼付文による文様意匠の、縦方向の単位数 (意匠の分割位置) が 4 (第 22 図 1～4・8・9?) から 8 (第 22 図上記以外) へ



第 21 図 後北 A 式土器 (24 は併行する恵山式アヨ口 3a 式)

1・2・5・14・16・19・20・25：江別太Ⅲ4 層 6：N156 3・4・7：北広里 3 8・12・13：北広  
 里 3・1 号住居址 15・17・18・22・23・24・26：江別太Ⅲ3 層 9・10・11：旧豊平河畔・墓 132  
 21：江別太Ⅲ2 層 27：町村農場 2



第22図 後北B式土器 (27は併行する恵山式アヨロ3b式)

1: 江別太Ⅲ1層 2・3・23・25: ユカンボシ C15 4・26: オサツ 2・GP2 5・19: 坊主山・Ⅶ-4号 6・12・15・29: 萩ヶ丘・墓112 7・9: 坊主山・Ⅲ-1号 8・17・18: 坊主山・Ⅶ-14号 10・11・16・20: タブコブ 13: 萩ヶ丘 14・27: アヨロ・墓105 21: 静川 22: 及川コレクション 24: 大川 28: 天内山

型式組列としては以上のような変遷過程が想定できるのであるが、実際には、例えば第 22 図 6 と 12・15・29 は同一の墓で共伴しているので、後北 B 式を細別して時期差を示す段階を設定することは難しい。

第 22 図 27 は恵山式アヨロ 3b 式土器で、アヨロ遺跡の墓 105 から出土している(高橋ほか 1980)。同じ墓からは同図 14 の後北 B 式土器も出土しているが、出土状態を見ると確実に共伴とは言い切れない状況である。しかし両者を併行関係とみても前後の時期と矛盾は生じないので、層位的な裏付けには乏しいものの、ここでは両者を併行関係と捉えておく。

c) 後北 C<sub>1</sub> 式 (第 23 図)

先学の編年を踏襲する。特に追加・変更する点はない。C<sub>1</sub> 式の細別も行わない。

### 3. 道東部との編年対比

#### 1) 編年対比の基点

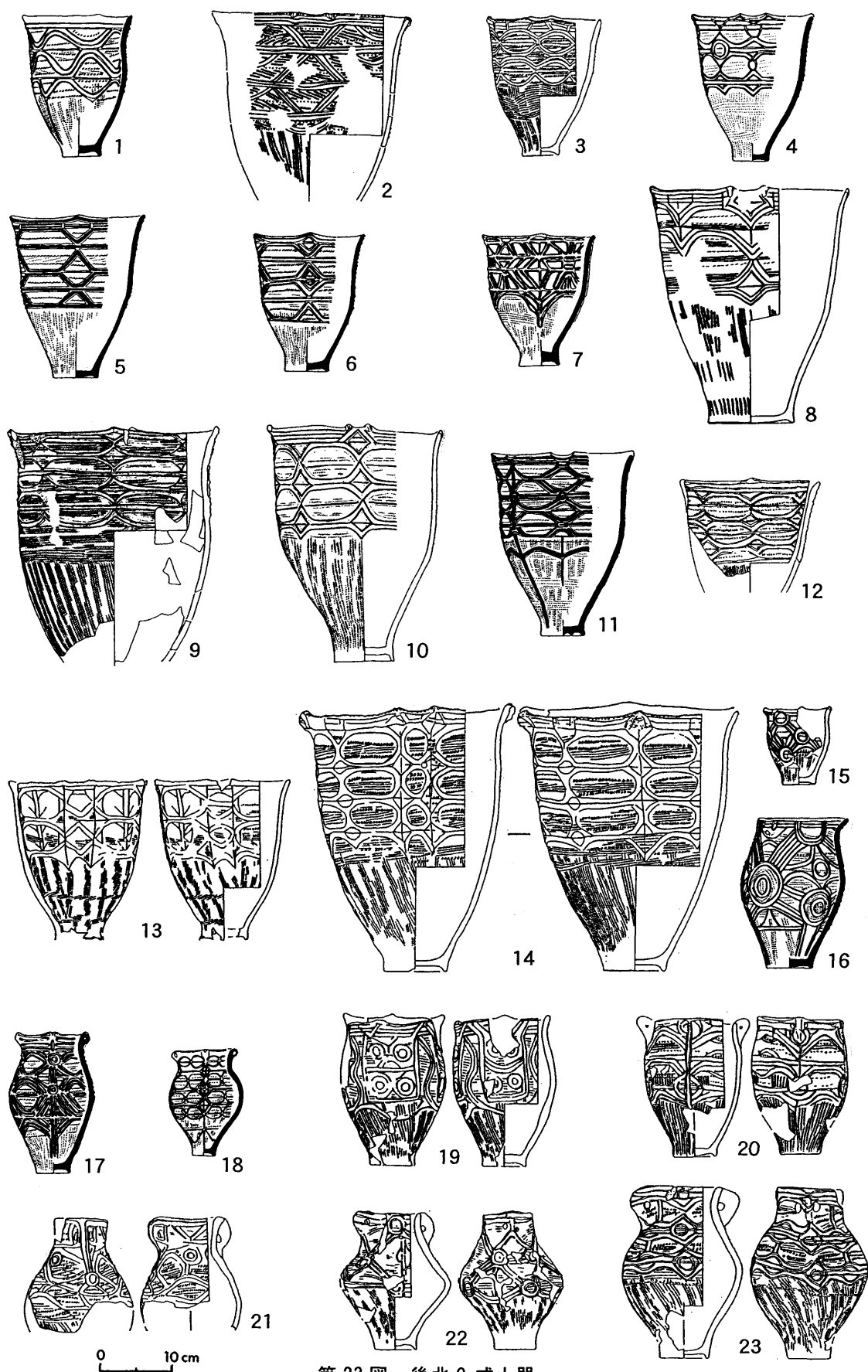
次に道央部と道東部の編年を対比する。基点となるのは以下の 6 例である。

- a) 道東部の「元町 2 式」に施された工字文・変形工字文のモチーフ。
- b) 稚内市声問川大曲遺跡(土肥・種市 1993) から出土した IO 突瘤文を持つ恵山式土器。
- c) 深川市北広里 3 遺跡(葛西 1994、同 2002) 1 号住居址での後北式と宇津内式の共伴・混出。
- d) 羅臼町相泊遺跡(涌坂編 1996) における後北 B 式と下田ノ沢Ⅱ 1 式の折衷土器。
- e) 室蘭市大黒島遺跡(大場 1962b) から出土した貼付文を有する恵山式。
- f) 常呂町栄浦第二遺跡(藤本編 1972) 11 号竪穴床面下ピット 3 出土の土器群。

以下の議論は煩瑣であるので巻末付図 1 上の編年表も参照していただきたい。

a) の「元町 2 式」の工字文・変形工字文のモチーフについては第 1 章で紹介したので詳細は省く。このモチーフを元に道央部との併行関係を考えると、「元町 2 式」併行となるのは、「砂沢式～二枚橋式併行期」後半段階となろう。鈴木信氏の編年ではより新しい段階(江別太遺跡Ⅲ 7 層～Ⅲ 6 層段階、氏の名称では「H37 栄町」期)まで「元町 2 式」併行とされているが、このモチーフの編年上の位置を重視すればそこまで降らせることはできないと筆者は考える。





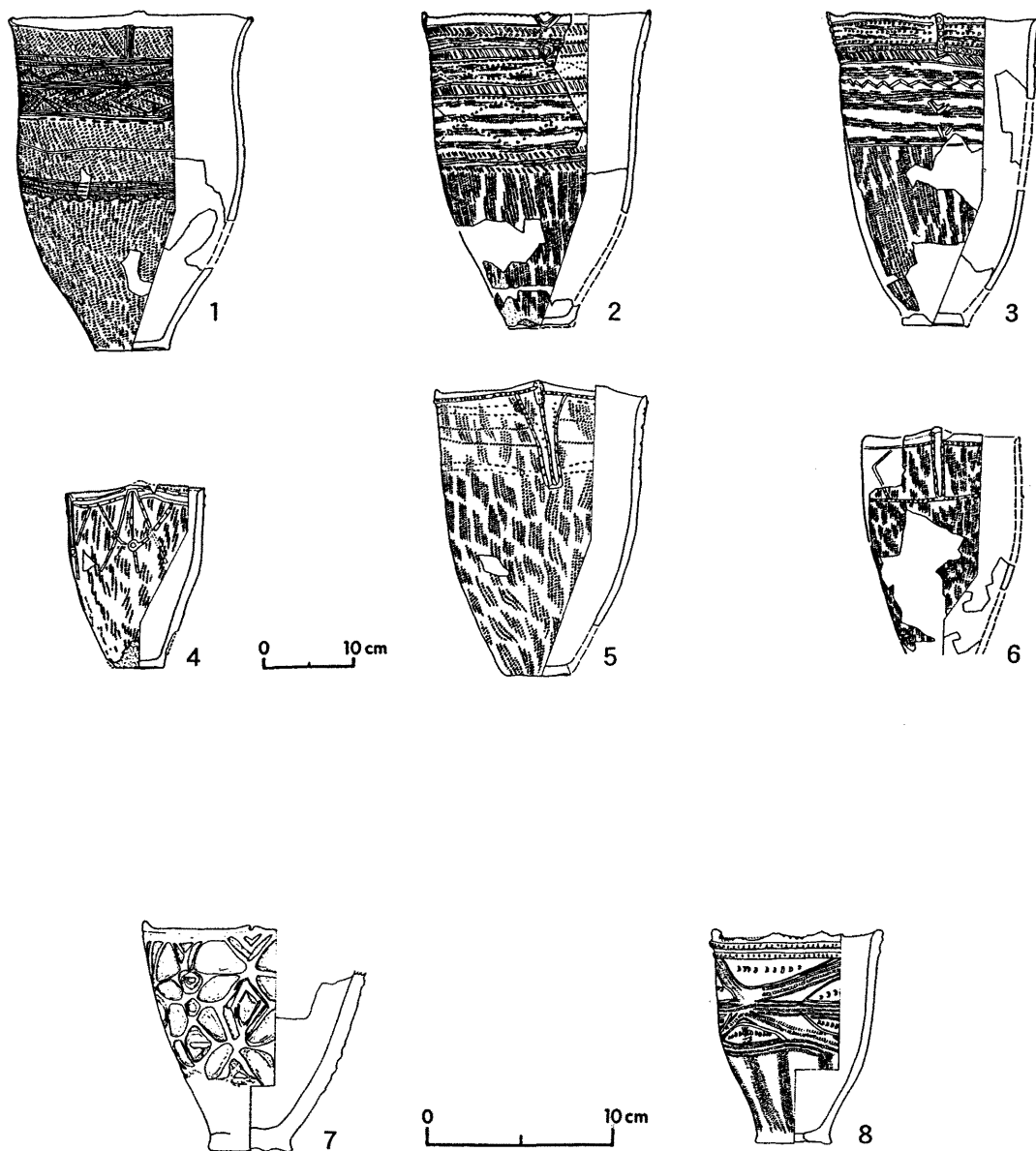
第23図 後北C<sub>1</sub>式土器

1・4・5・6・17・18：坊主山 2・8：厚真 3・14：天内山C区2号墳墓 7：及川コレクション 9：美々2 10：タブコブ 11：後藤 12：K135 15：静川 37 16：萩ヶ岡 13・14：天内山C区2号墳墓 19・20・21・22・23：天内山C区6号墳墓

b) の声間川大曲遺跡出土恵山式土器であるが、これはアヨロ 1 式（高橋 1984）相当の恵山式に、道東部の土器に特徴的な IO 突瘤文が施された折衷的な土器である。この土器に影響を与えたのが道東部のどの型式であるかが問題となる。この遺跡で主体となっている土器群（「Ⅲ群 B 類」）の内訳を見ると、「元町 2 式」相当の土器も若干含まれるものの、大半はそれより新しい宇津内ⅡaⅠ式古段階併行の土器となっている（熊木 1997）。このデータのみに依拠して宇津内ⅡaⅠ式古段階と恵山式アヨロ 1 式の併行関係を確定させるのには問題があるが、両者を併行と考えると上記 a) の例や、恵山式アヨロ 1 式－江別太Ⅲ7 層段階の併行関係（高橋 1984）とも整合することになる。よって以上のデータから、「元町 2 式」－「砂沢～二枚橋式併行期」後半段階－下添山式（高橋 1984）と、宇津内ⅡaⅠ式古段階－「江別太Ⅲ7 層段階」－アヨロ 1 式の併行関係をそれぞれ設定する。

c) の深川市北広里 3 遺跡からは何人かの研究者の編年観とはやや異なるデータが得られており、この c) が今回最も注意すべき事例となる。最も良好な層位的まとまりを示すと見られる平成 5 年度調査 1 号住居址出土土器群（第 24 図 1～6）からまず見てみよう。これらの土器群について報告者の葛西智義氏は「特徴の異なる土器であることに加え、出土位置にも違いが見られる（第 24 図 1・4・5 は住居内南側から、2・3・6 は同住居内の北側から出土している…筆者注）。このため、まったく同時のものとは考えていない」（葛西 2002）と述べている。しかし、住居内南側と北側の土器を系統別に比較すると、住居内南部／北部の土器群間で顕著な時期差は確認できない。つまり、宇津内式系統の間でも（第 24 図 4・5 と 6）、後北式系統の間でも（同図 1 と 2・3）南部／北部の土器群間に時期差は認定できないのである。よってこれらの土器群は全てほぼ同時期とみなすのが妥当と筆者は考える。この考えが正しいのであれば、筆者編年の宇津内ⅡbⅠ式は後北 A 式と併行することになる。

d) の相泊遺跡例については第 2 章で言及したので繰り返さない。後北 B 式と下田ノ沢Ⅱ1 式が併行関係にあることを示す例である。



第 24 図 1～6：北広里 3 遺跡住居 1 出土土器群（1～3：道央部系統・4～6：道東北部系統）  
7・8：栄浦第二遺跡 11 号竪穴床面下ピット 3 出土土器群

e) の室蘭市大黒島遺跡から出土した土器（大場 1962b：写真 100 右、菊池 1984：第 6 図 4）は、恵山式と後北式系統の併行関係を検討する際にしばしば取り上げられる、折衷的な内容の土器である（中村 1973、菊池 1978、大沼 1982b、石本 1984 など）。恵山式と対比した場合、帯縄文とそれに沿う沈線文の特徴などからみてアヨロ 3a 式以後に位置づけられることになる。帯縄文間に列点文が施されている点からすると、聖山 KII 群段階まで降る可能性が高い。一方、貼付文の特徴はこれまで後北 C<sub>1</sub> 式に比定されることが多かったが、口縁部に付加された 1 対の吊耳状突起及びその下部から垂下する貼付文は、2 単位という割りつけからしても、貼付文の意匠からみても、宇津内 II b 式、詳しく言うと第 1 章でいう宇津内 II b I 式の「微隆起線土器 I 類」～宇津内 II b II 式のそれに対応するとみるのが妥当である（大沼 1982b）。よってこの土器は、道南部の恵山式アヨロ 3b 式～聖山 KII 群段階と新手の宇津内式 II b I 式～宇津内 II b II 式の併行関係を示すものとして再評価すべきであろう（注 4）。

f) の栄浦第二遺跡例（第 24 図 7・8）は道央部と道東部の対比というよりも、後北式系統と恵山式系統の対応を示す例だが、参考のため言及しておこう。これらの土器は同一の墓墳から出土したもので、ピット内の出土位置に多少の問題はあるが、両者とも底部に穿孔されている点からすると副葬土器として共伴した可能性が高い。土器の特徴をみると、第 7 図 7 は地文が無い点の特異であるが、後北 C<sub>1</sub> 式土器としてよい。第 7 図 8 は帯縄文とそれに沿う沈線文等の、恵山式アヨロ 3a 式以後の要素が認められる一方で、口縁部に刻み目のある貼付文を持つ等、後北式の要素も認められる折衷的な土器である。乾氏が述べるように（乾 1992）、この土器は恵山式の最終末が後北 C<sub>1</sub> 式まで降ることを示す例と言えよう（注 5）。

ちなみに道東部以外で宇津内式系統の土器が出土した例については工藤研治氏が言及しているが（工藤 1994）、編年対比の基点となるようなデータは得られていない（注 6）。

また、道東部で道央部以南の系統の土器が出土した例も多いが、やはり上記以外に確実な層位データは無いようである。例えば恵山式については宇田川洋氏や乾芳宏氏が言及しており（宇田川 1982、乾 1991a、乾 1992）、また後北 A 式以後についても最近常呂川河口遺跡等で出土例が増えているが、今のところ上記以外に編年対比の参考となるデータは得られていない。

## 2) 先学の編年との対比

以上 a) ～f) の基点をもとに編年対比を行うと、巻末付図 1 上の編年表のようになる。筆者編年を先学の説と比較すると、工藤氏（工藤 1994）や大沼忠春氏（大沼 1982a）の見解とはほぼ一致する一方で、他の各氏との間では若干の相違が生じることになる。例えば高橋正勝氏は宇津内 II b I 式をもう少し新しく位置づけ、江別太 III 3 層～III 1 層段階（注 7）に併行するとしているし、

鈴木編年		本章での分類
型式名	段階	
江別太1式	古 <sub>カ</sub>	アヨロ2b式相当
	新 <sub>カ</sub>	
江別太2式	古 <sub>カ</sub>	後北A式
	新 <sub>カ</sub>	
後北A式	古 <sub>1</sub>	後北B式
	古 <sub>2</sub>	
	新 <sub>1</sub>	
	新 <sub>2</sub>	
後北B式	古	
	中	
	新	

第 25 図 鈴木信氏の編年と本章での分類の対比

鈴木信氏（筆者編年との対応は第 25 図参照）はさらに新しくみて、宇津内ⅡbⅠ式の上限を筆者の後北 B 式併行まで下げている。これらの齟齬は小さいようだが、「どちらがどちらに影響を与えたのか」というような型式交渉の解釈においては重要な意味を持ってくる。次節で詳述してみたい。

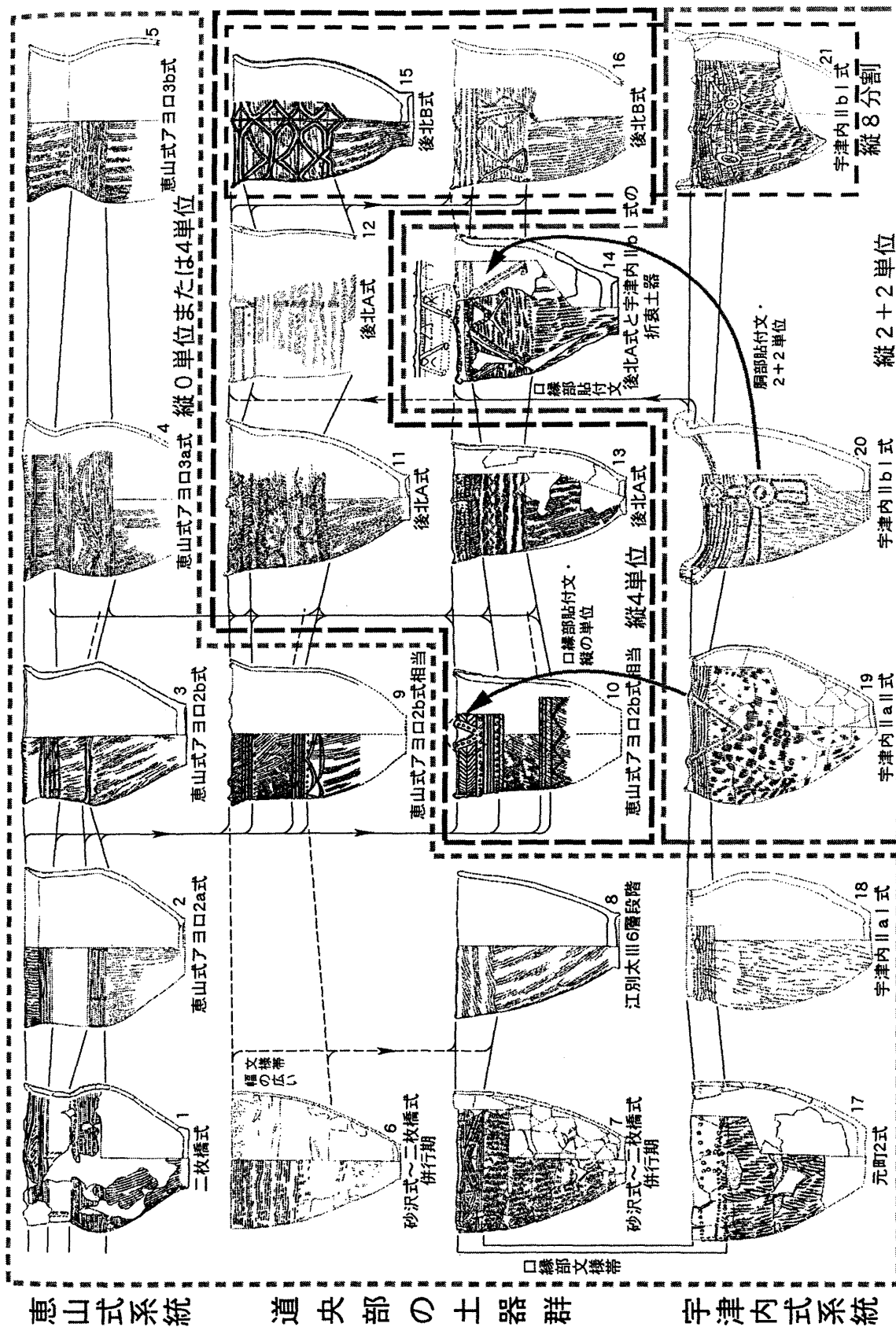
#### 4. 道央部における文様割りつけ原理・文様単位の変遷と型式交渉

##### 1) はじめに

続縄文前半期の土器群の型式変遷過程を、特に文様帯と縦の文様単位に注目して図示したのが第 26 図である。まず先に恵山式系統と宇津内式系統の変遷を確認しておこう。恵山式の文様帯は基本的に口縁部と胴部の間に無文帯を挟む二帯の文様帯からなる(注 8)。縦の文様単位は、第 26 図で図示した例は同図の 4 を除いて割りつけのない 0 単位であるが、恵山式にはこのような 0 単位の他に口縁部突起や胴部文様などに 4 単位を基本とした割りつけも多く認められる(注 9)。宇津内式系統については第 1 章で分析したとおりである。宇津内式の文様帯は縄文晩期の縄線文系土器のそれを引き継ぎ、数条の縄線を巡らせるなどして形成されたやや幅の狭い口縁部文様帯が宇津内ⅡbⅠ式まで保持される。縦の文様単位は、0 単位から 4 単位、さらに正面一側面観を強調した 2+2 単位へと緩やかに変化し、宇津内Ⅱb 式になると縦 8 等分の位置にも新たに割りつけが出現する。道央部ではこれらの恵山式、宇津内式の影響を順番に受けつつ、独自の変遷過程を経て後北式が成立してゆく。以下にその流れをトレースしてみよう。

##### 2) 文様帯の変遷

まずは文様帯である。砂沢式～二枚橋式併行期から江別太Ⅲ6 層段階にかけては縄文晩期の縄線文系土器のそれを引き継ぎ、口縁部に幅の狭い文様帯が形成される（第 26 図 7・8）。アヨロ 2b 式相当期になると道南部から恵山式が侵入して口縁部と胴部の 2 帯の文様帯が道央部に導入され、それが後北式の文様帯へとつながってゆく。ここで注意すべき点は二点ある。第一点は、後北式の胴部文様帯の系統である。後北式にみられる胴部文様帯や、その胴部文様帯を横方向の単位に分割する手法の系統については、前述のとおり恵山式からの流れとして捉えられるが、道央部の在地系統の土器群（第 26 図 6）にも、地文の縄文ないしは帯縄文の横走という形で「後北式の地文の手法」が萌芽的に認められるという指摘がある（大沼 1982c: 85）。在地の系統が途切れずに、底流として続いているという視点には興味深い点があるが、資料が少ないこともあり現段階で結論を出すのは難しい。アヨロ 2b 式相当期にこの手法が継続されていると確認できるか否



第26図 統縄文前半期土器群の型式変遷過程

1・6：H37 栄町地点 2・8：江別太Ⅲ6層 3：アヨロ 4：江別太Ⅲ3層 5：アヨロ 7：ユカンボンシE7 9・10：紅葉山33号 11：江別太Ⅲ4層  
12：江別太Ⅲ3層 13・14：北広里3 15・16：タブコブ 17・19・21：尾河台地 18・20：栄浦第一

かが評価の分かれ目となろう(注 10)。第二点は後北式の口縁部文様帯に認められる、横にめぐる貼付文の系統である。このような文様は後北 A 式の時期から一部の土器に認められ(第 12 図 12)、後北 B 式(第 12 図 15・16)以後に一般的となる。貼付文という文様要素は先に宇津内式系統の方に現れるので、道央部での出現は宇津内式系統からの影響であることは疑いない。問題はそれが文様要素としての借用なのか、口縁部文様帯丸ごとの転写なのかである。宇津内 II b 式の口縁部貼付文は口唇直下に 1 条のみであるのに対し、後北式系統では第 12 図 12 に代表されるように口縁部文様帯の全面に幅広く貼付文が展開するという違いがある。この点から判断すると、後北式への貼付文の導入は、在地の文様帯・文様割りつけが保持されたまま、文様要素としての貼付文が借用されるかたちで行われたと見てよさそうである。例外は第 12 図 14 の土器で、この例では地文は後北 A 式の伝統に則って施文されているが、貼付文は口縁部文様帯や縦の割りつけ・意匠も含めて宇津内 II b I 式のものが丸ごと転写されている。ただしこのような折衷的な土器は、北広里 3 遺跡のような道央部・道東部の系統が接触する地帯で例外的に認められるものであり、石狩低地帯では確認できない。道央部への貼付文の導入は、あくまでも在地の文様帯が保持されたまま行われたと見るべきであろう。

なお、胴部文様帯の横方向の分割は、後北 A 式に認められる帯縄文や列点文などによる分割において確立するが、これには恵山式アヨロ 3a 式の胴部文様との関連がまず考えられよう。続く後北 B 式では貼付文によって胴部文様帯の分割ないし文様単位の重畳が行われ、後北 C<sub>1</sub> 式においてもっとも多段化して発達する。その後は次章で詳述するが、後北 C<sub>2</sub>・D 式になると胴部文様帯の分割・重畳は次第に衰退し、北大 I 式で消滅する。これらの変遷は連続的であるといえよう。

### 3) 縦の文様単位の変遷

次に縦の文様単位を確認してみよう。砂沢式～二枚橋式併行期から江別太 III 6 層段階にかけての道央部では、縄文晩期の縄線文系土器からの流れを引き継ぎ、割りつけのない 0 単位と、4 単位の口縁部突起を有する割りつけが主体となる。このような文様単位のあり方は、文様意匠や突起の形態などに大きな違いはあるものの、単位数に限って言えば同時期の恵山式系統・宇津内式系統と共通している。道央部以外の地域との差が明瞭になるのはアヨロ 2b 式相当～後北 A 式の時期にかけてである。この時期、恵山式系統ではアヨロ 2b 式以後も 0 単位と 4 単位が併存する一方、後北式系統では後北 A 式の時期に 0 単位の例はなくなり、4 単位のみとなる。また、宇津内式系統では 2+2 単位が主体となる。ここで一つ問題となるのは、第 26 図 10 の土器に認められるような口唇部突起から縦に垂れ下がる貼付文の系統である。この文様について大沼氏は、「道東や道北で発達したものとみられるが、古くさかのぼれば、晩期の船形土器などにまで系譜がた



どれそうである」と述べている（大沼 1982c : 88）。問題はこれが在地の系統（道央部の伝統）なのか横の影響関係（道東部からの影響）なのかである。前章までに、縄文晩期の「舟形土器」などにみられるこの種の貼付文は、道東部では「元町2式」と興津式にわずかに引き継がれるが、宇津内ⅡaⅠ式古段階や下田ノ沢Ⅰ式の古手では一時的にみられなくなることを述べた。道央部の砂沢式～二枚橋式併行期から江別太Ⅲ6層段階にかけてもこの種の文様は消滅しているので、第26図10の口縁部貼付文は宇津内ⅡaⅡ式からの、すなわち横からの影響・借用として捉えるのがよいと思われる。

本章冒頭で述べたように、後北A式期以後の道央部では、恵山式系統との交渉は徐々に影を潜める一方、逆に宇津内式系統との交渉が活発化し始める。例えば前述のとおり、第26図14のような直接的な折衷土器がこの時期に認められている。この例はやや極端な例外であるが、道央部全体を見渡した場合でも、このような交渉活発化を背景にしたと見られる変化が二点ほど、縦の文様割りつけに関して生じている。第一点は4単位の割りつけの盛行である。後北A式では、先に述べたように全ての土器に4単位を基本とした口縁部突起が付けられる。これは自律的な変化とも考えられるが、突起が文様のデザイン上重要な意味を持っている宇津内式系統に触発された変化である可能性が高い。また、後北A式では胴部にも縦4単位の割りつけを持つ土器が出現する（第21図1・6・11・20・21・25・26、第26図11・12）が、これは第21図6のような文様モチーフが存在する点からみて、明らかに宇津内式系統の影響が介在しているのであろう。第二点の変化は前段階で既に一部出現していた、口縁部突起から縦に垂れ下がる貼付文に関してである。後北A式ではこの文様を持つ例が前段階よりさらに増加するが、興味深いことに、その中には正面と側面で意匠がやや異なる例が散見される（第26図13など）。宇津内式の文様がそのまま転写されているわけではないが、このような2+2単位的な割りつけには宇津内式系統からの影響が反映していると考えられる。

その後、後北B式になると4単位をさらに等分した8単位の位置を基点に新たな割りつけ（文様の分割）が出現する（第26図15）。縦の文様単位を後北B式と宇津内ⅡbⅠ式とで比較すると、前者は4単位、後者は2+2単位を基本としている点で根本的に異なるが、8単位の位置に新たな割りつけが出現するという点は両者で共通する。第26図16のように、宇津内ⅡbⅠ式の文様意匠を借用したと見られる後北B式が存在する点からしても、この時期の文様割りつけの変化・同期は両者の相互交渉の結果として捉えられるであろう。

次の後北C<sub>1</sub>式における道央部と道東部の交渉については前章までに論じた。網走地域では互いの文様割りつけ原理を意識した「作り分け」が生じていることが明らかになっている。実はこの時期の道央部と道東部の関係は、前者から後者へ一方向的に影響が及ぶのではなく、逆方向の、すなわち道東部側から道央部への影響も存在する。第23図14・17～23の土器に付加されている

ような、2+2 単位の口縁部の吊耳状突起がそれである。ただしこのような土器においても、貼付文の縦の文様割りつけは図示したように 4 単位が基本となる。先述した大黒島遺跡の 2 単位の例は実は例外的なものといえよう。

その後、後北 C<sub>2</sub>・D 式の時期になるとこれらの縦の単位の重畳・分割も衰退し、4 単位から、次第に縦の単位があいまいになり、ついには縦の単位もなくなり北大式へと続く。この時期の文様割りつけの変化プロセスには地域差があるのだが、それについては次章で詳述する。以上のように、後北式系統においては胴部文様の縦の割りつけ原理も、全体として連続的に変化する。

## 5. 小結

本章で述べてきた続縄文前半期の道央部における土器型式の変遷と地域交渉について、以下にまとめてみよう。

- 1) 砂沢式～二枚橋式併行期から江別太Ⅲ6 層段階の道央部においては、すでに先学によって指摘されているように、当初は縄文晩期後葉の幣舞式から続く在地系土器が主体となるが、次第に恵山式の侵入が目立つようになる。一方、宇津内式等の道東部からの影響は皆無ではないが、稀にしか認められない。
- 2) アヨロ 2b 式期併行になると在地系の系統はほぼ消滅し、恵山式単純の組成となる。この時期においても道東部からの影響は稀である。
- 3) 後北 A 式になると、恵山式系統（アヨロ 3a 式）に加えて宇津内式系統（宇津内ⅡbⅠ式）との交渉が生じてくる。恵山式と関係するのは文様帯全体の構成と胴部文様帯内の横分割であり、宇津内式と関係するのは文様要素としての貼付文の付加のほか、胴部文様の縦の割りつけや、2+2 単位の影響を受けた口縁部突起下の貼付文などがあげられる。
- 4) 後北 B 式の時期でも後北式系統と宇津内式系統の交渉は保持されるが、両系統はなし崩し的に混ざり合うことはなく、互いの系統が並立する。逆に恵山式系統との交渉は相対的に衰退すると評価してよい。
- 5) 後北式土器群の文様帯は、アヨロ 2b 式相当期に導入される恵山式系統の 2 帯の文様帯＝口縁部文様帯と胴部文様帯＝を基本として成立する。この 2 帯の文様帯は後北 C<sub>1</sub> 期まではそのまま維持されるが、後北 C<sub>2</sub>・D 式期に大きく変化し、口縁部文様帯はほとんど消滅する。
- 6) 後北式土器群の縦の文様割りつけは終始 4 単位を基本とするが、後北 A 式～C<sub>1</sub> 式の間では宇津内式系統の影響を所々で受けている。特に重要なのは、後北 A 式期では「縦の割りつけ」という概念が口縁部・胴部ともに導入され始め、一部には 2+2 単位も認められる点、後北 B

式期では縦 8 分割の割りつけが後北式系統・宇津内式系統の両者で同時に成立する点、後北 C<sub>1</sub> 式期では後北式系統と宇津内式系統の交渉が一層進むが互いの割りつけの伝統は保持される点である。

本章の目的は冒頭でも述べたように、道央部と道東部の編年対比・型式交渉を具体的に復元することにあった。本章での新たな成果は以下の二点に集約されよう。

- 1) 後北式の成立過程、すなわち後北 A 式の成立に関わってくる道東部の併行型式は、厳密に言えば宇津内 II b I 式となる。この時期（続縄文中期）までの地域構造は、道央部―道南部 vs 道東部（道央部と道南部の関係が相対的に強く、道東部とは相対的な関係が薄い）という性格が強かったが、続縄文中期以後は道南部 vs 道央部―道東部という形へと変化し、道央部―道東部の関係が強まる。
- 2) 後北式の文様割りつけ原理・文様単位は、恵山式系統の文様帯の上に、宇津内式系統の縦の文様割りつけの影響が重なって成立する、という順序・構造で考えると理解しやすい。その後、恵山式・後北式・宇津内式の三系統は徐々に相互の影響関係を強めつつ後北式系統へと収束してゆく。ただし、恵山式・宇津内式の両系統は痕跡的なすがたになりつつも、後北 C<sub>1</sub> 式の時期まで存続し続ける。

#### 注

- (1) これは、続縄文前半期において一時的に道南部から侵入してくる恵山式を除いた、道央部在地の系統という意味である。
- (2) 鈴木氏と筆者で認識が異なるのは、後北 A 式土器に対する理解である。鈴木氏の後北 A 式「新 2」段階は、型式設定者である河野広道氏の定義に従うのであれば後北 B 式となろう。確かに河野氏の最初の定義（河野 1933b）にはこの段階の土器を後北 A 式と思わせる記述もあるが、後に河野氏自身が示した標式資料（河野 1959：第 6 図左上）を参照するならばこの段階の土器は後北 B 式となる。ここは後出の標式資料に従っておきたい。ただし、型式の大別の境界を河野氏定義の後北 B 式の途中に設定した鈴木氏の考え方自体は筆者にもよく理解できる。その境界は、文様割りつけ原理の変遷における画期（貼付文による文様帯の横方向の分割／重畳）に相当するからである。

また、鈴木氏は「江別太 1 式」「江別太 2 式」という型式名を用いているが、この型式名を最初に提唱した高橋正勝氏の編年（高橋 1984）とは指し示す土器の内容が異なっている。混乱を避けるために本章では江別太遺跡の各層位を標式として巻末付図 1 上の編年表のような型式・段階を設定した。

- (3) 鈴木信氏は江別市旧豊平河畔遺跡（高橋編 1985）墓 133 で筆者の言う後北 A 式と B 式（氏の言う江別太 2 式と後北 A 式）が共伴したとする（鈴木 2003：422）。確かにこの墓からは後北 B 式に近い土器が

- 1 点出土しているが（高橋編 1985：図 17-28）、この土器には連続斜線文が残っており、古い様相を示している。他の 11 点の後北 A 式とほぼ同時期とみて差し支えなかろう。
- (4) 大黒島遺跡の土器について筆者のような評価を下すのであれば、道南部の恵山式系統と道東部の宇津内式系統が結びつくことになる。しかしこれは道央部を飛び越して両者の交流がダイレクトに行われていたことを示すとまでは言えない。むしろ、北広里 3 遺跡の例にみられるように、道南部と道東部の交流は道央部を経由した形で行われていたであろう。
- (5) なお浦幌町十勝太若月遺跡土坑 85 の例（石橋ほか 1975）も本例と同じ併行関係を示す可能性があるが（乾 1992）、出土状況の詳細が不明のため併行関係の基点としては取り上げないことにする。
- (6) 工藤氏の論文では触れられていない、あるいはそれ以後に報告された、道東部以西（ただし空知管内及びその周辺を含む）の宇津内式出土例について参考のため列挙しておく。旭川市萩ヶ岡遺跡－宇津内ⅡbⅠ式（瀬川ほか 1989：図 51-2～14、図 52-1～22）、芦別市滝里 33 遺跡－宇津内ⅡaⅡ式（佐川編 1993：図 IV-20-3）、深川市内園 2 遺跡－宇津内ⅡbⅠ式（西田編 1988：図 V-3-74～76）、札幌市 N316 遺跡－宇津内ⅡbⅠ式（羽賀編 1994：第 25 図 11-2～3）。
- (7) 筆者編年の後北 A 式は江別太遺跡で言えばⅢ4 層～Ⅲ2 層にほぼ相当し、この段階が宇津内ⅡbⅠ式と併行すると筆者は考える。高橋氏の編年では宇津内ⅡbⅠ式併行とされるのは江別太Ⅲ3 層～Ⅲ1 層であるから、筆者の見解とは若干のずれが生じることになる。
- (8) ただし恵山式の終末期には無文帯が消滅し、口縁部と胴部の文様帯が一体化するようになる（今村 1983）。
- (9) 4 単位や 4 単位をさらに等分した 8 単位のほか、6 単位などがある。また、第 26 図の 1・9 は 5 単位であるが、いわゆる「追いまわし」か割りつけが意識されたものかはっきりしない。
- (10) 管見では、道央部のアヨロ 2b 式相当の土器における胴部文様帯の地文は、縦～斜め方向に条が走るものが一般的であり、横走するものは皆無ではないようだがきわめて少ない。よって筆者は第 26 図 6 の土器のような幅広の胴部文様帯と横走縄文がアヨロ 2b 式相当に受け継がれる可能性は低いと予想している。やはりこれは恵山式系統の自立的变化を考えるべきなのであろう。

## 第4章 後北 C<sub>2</sub>・D 式土器の展開と地域差

### 1. 本章の目的

後北 C<sub>2</sub>・D 式土器は続縄文後半期の土器型式であり、その分布は北海道全域のみならず、北はサハリン南部・南千島、南は東北地方から越後平野に至る広い範囲で出土が確認されている。そのような広域的な分布を示す一方で、この型式は地域差が少なく内容が斉一的であることから（藤本 1979、藤本 1982b、石附 1979、金盛 1982、その他）、それを根拠の一つとして、この時期には広域にわたるヒトの移動・交流が活発化したという解釈が各氏によって導き出されている（上野 1992、石井 1997b、石井 1998、その他）。

以上のような認識と解釈は、大局的な見地から、すなわち続縄文前半期との比較で考えた場合、後北 C<sub>2</sub>・D 式期の性格を適切に示したものといえる。しかしある意味当然ではあるが、広範囲に分布する後北 C<sub>2</sub>・D 式土器を細かく検討すれば地域差を指摘することができる。だが後北 C<sub>2</sub>・D 式土器における地域差は資料的制約もあってこれまで明確に指摘されたことはなく、むしろ「斉一性」と「広域拡散」の側面がやや強調されてきたきらいがあった。

本章では最近資料が増加しつつある北海道東部の地域編年を行い、道央部との対比を試みる。目的は、後北式の系統が道東へ拡散し定着する過程を段階的にトレースすることにある。また、土器そのものの検討によって地域差の内容を具体的かつ詳細に解明する一方で、そこから推察される土器製作者間の交流実態とその変遷にも迫ってみたい。

分析の手順であるが、まずは常呂町トコロチャシ跡遺跡出土資料を対象として型式分類と編年を行う。最初にこの遺跡から分析を始める理由は、ここでは複数の土器が一括して副葬された墓壙がいくつか確認されており、編年に好都合だからである。次にこのトコロチャシ跡編年を軸として、特に古い段階の細別型式を追加・補充しつつ道東部全体の編年をまとめる。さらに道央部の編年との対比を行い、細別型式毎の地域差とその背景について考察する。なお、これら一連の型式分類と編年対比で軸となるのは、やはり文様の縦の割りつけ原理と文様単位の分析である。

なお、この型式には大小様々の深鉢や注口付土器等、いくつかの器種が認められるが、ここでは大型・中型の深鉢のみを分析対象とした。小型の鉢や注口付き土器は文様割りつけ原理が深鉢とは異なっていて型式組列が捉えにくい、というのがその理由である。

## 2. トコロチャシ跡遺跡出土土器の分析

### 1) 文様要素と文様割りつけ原理

まずは編年の重要な指標となる、文様要素と文様割りつけ原理について概観しておこう。

#### a) 文様要素と施文順

文様を構成する要素のうち、基本となるのは以下の 5 つである (第 27 図)。

①口唇部の刻み目：先端の角張った工具で施文された断面三角形の太い刻みを基本とする。

②口唇部直下の貼付文：口唇部直下に、口縁に沿って貼付される。条数は 1~2 条が多く、まれに 3 条の例もある。側縁に強い調整が施されて微隆起線の形態をなすものと、調整が弱くやや太い断面形をなし、刻み目が付けられるものがある。刻み目の工具は①と同じものが用いられるようである。

③文様帯部分の帯縄文：RL を原体とする。0 段多条を用いている (「前々段多条」)と思われるが、r の本数は確認できなかった。一回の施文単位は長さ 10cm 弱、条数が 3~5 条のものが多い。条数が 6 条以上の例もあるが、新しい段階のものに限られるようである。施文技法の退化を示すものであろう。

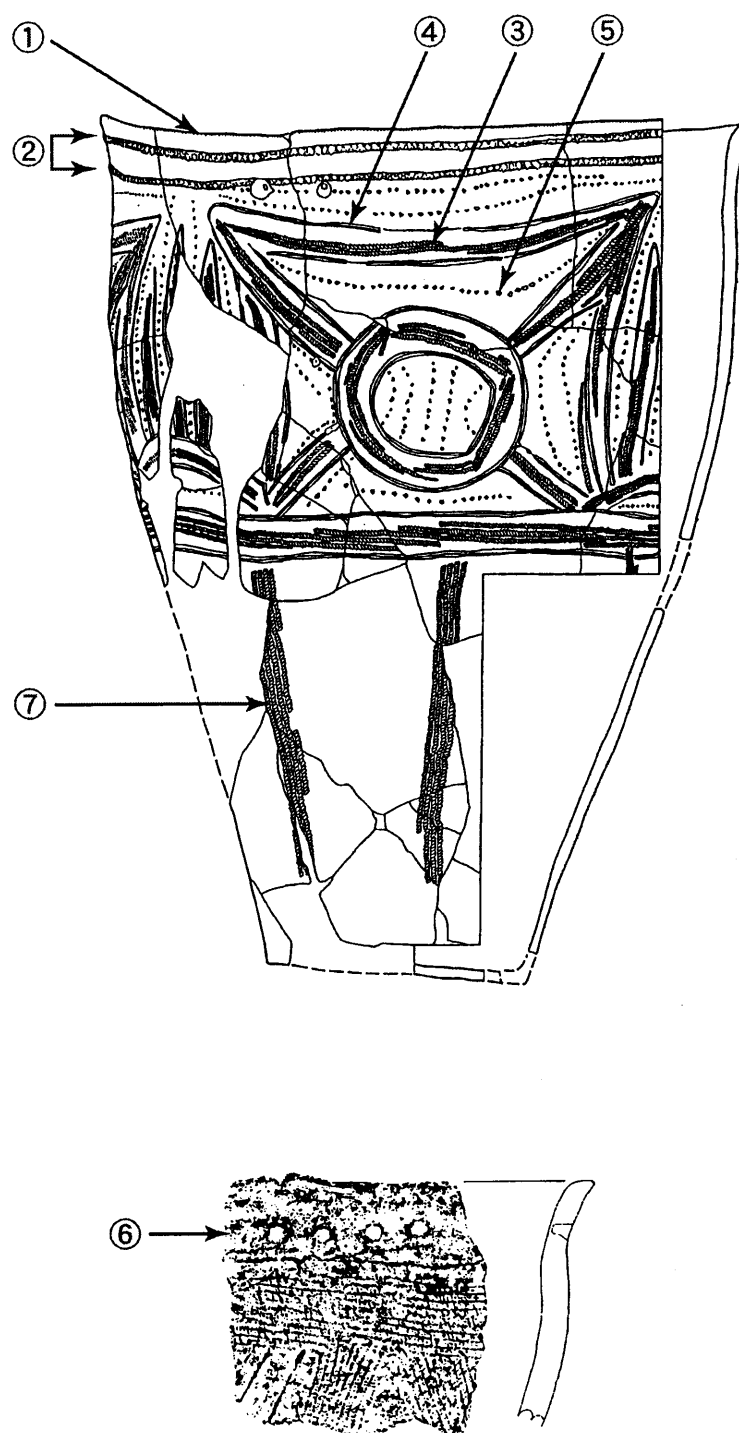
④帯縄文に沿う微隆起線：帯縄文に沿って施される。側縁に強い調整が施されて断面が薄い三角形を呈する。

⑤帯縄文・微隆起線に沿う列点文：③・④や②に沿って施文される点列である。①・②と同じ工具が用いられるようである。

以上、トコロチャシ跡遺跡では①~⑤の全てを有するものがある一方、全てを持たない無文の例もある。普遍的な文様は③の帯縄文であり、これを欠く例はまれである。他に多用される文様要素は①・②・④であり、この①~④の組み合わせで文様が構成される例が多い。⑤はやや少数である。

以上の基本要素の他に、やや例数は少ないが、注目すべき文様要素を 2 つあげておく (第 27 図)。

⑥口縁部の OI 円形刺突文・突瘤文：直径 3~6mm の棒状の工具によって施される刺突文である。工具の先端は平坦なものが多いが、中空 (竹管状) の例もある。刺突の結果内面に突瘤を作る例が多く、他に貫通する例や刺突が浅めで突瘤を生じない例もある。この⑥は北大 I 式へと連続する新しい文様要素である。



第 27 図 後北式土器の文様要素

①：口唇部の刻み目 ②：口唇部直下の貼付文 ③：文様帯部分の帯縄文 ④：帯縄文に沿う微隆起線 ⑤：帯縄文・微隆起線に沿う列点文 ⑥：口縁部の OI 円形刺突文・突瘤文 ⑦：胴部下半の帯縄文

⑦胴部下半の帯縄文：③と同じ原体・施文技法で施される。この⑦を持つ例は①～⑤の要素全てを併せ持つという特徴がある。トコロチャシ跡遺跡の中では古い文様要素である。

以上 7 種類の文様要素のうち、③以外は時系列上で変化が認められる属性であり、編年の指標となる。詳細は後述する。

#### b) 文様割りつけ (第 28 図～第 30 図)

大型・中型の深鉢では、最初に文様帯の下縁に帯縄文を水平に施文し、文様帯の範囲をまず決めている。文様帯の上縁にもめぐらせる例もあるが、まれである。範囲が決められた後、文様帯内に種々の意匠の文様が充填されるが、これらの意匠は「対称軸」と「単位文様」という二つの側面から分析すると系統・編年の理解がしやすくなる。

「対称軸」は、文様帯内に縦横に設定しうる対称軸（分割線）であり、文様帯内における意匠の分割・反復の構造を把握するために仮設する、作業用の補助線である。後北 C<sub>1</sub> 式からの変遷をとらえるための分析手法であるので、詳細は後述する。

「単位文様」とは文様構成上の単位を指す。まず最も基本的な構成である 4 単位の例からみてみよう。一見してわかりやすいのは口縁に 4 単位の突起がある場合で、これらの例では 4 単位の突起が割りつけの目印となる。例えば第 29 図 3 では、各々の突起の下部に括弧状の意匠 A が配置され、それらの意匠の間に b・c が充填される。林謙作氏の命名に則り、突起下の単位文様を「主文様」（ここでは A）、主文様の間に充填される文様を「副文様」（ここでは b・c）と呼ぼう（林 1988）。この第 29 図 3 の例では、主文様 A が 4 単位、副文様は 4 箇所等分に配置されているものの、1 箇所のみ変則的（c）と、やや変則的な 4 単位となっている。第 29 図 2 は欠損部分が多く詳細不明であるが、やはり 4 単位の口縁部突起を基調とした、やや変則的な 4 単位だと思われる。

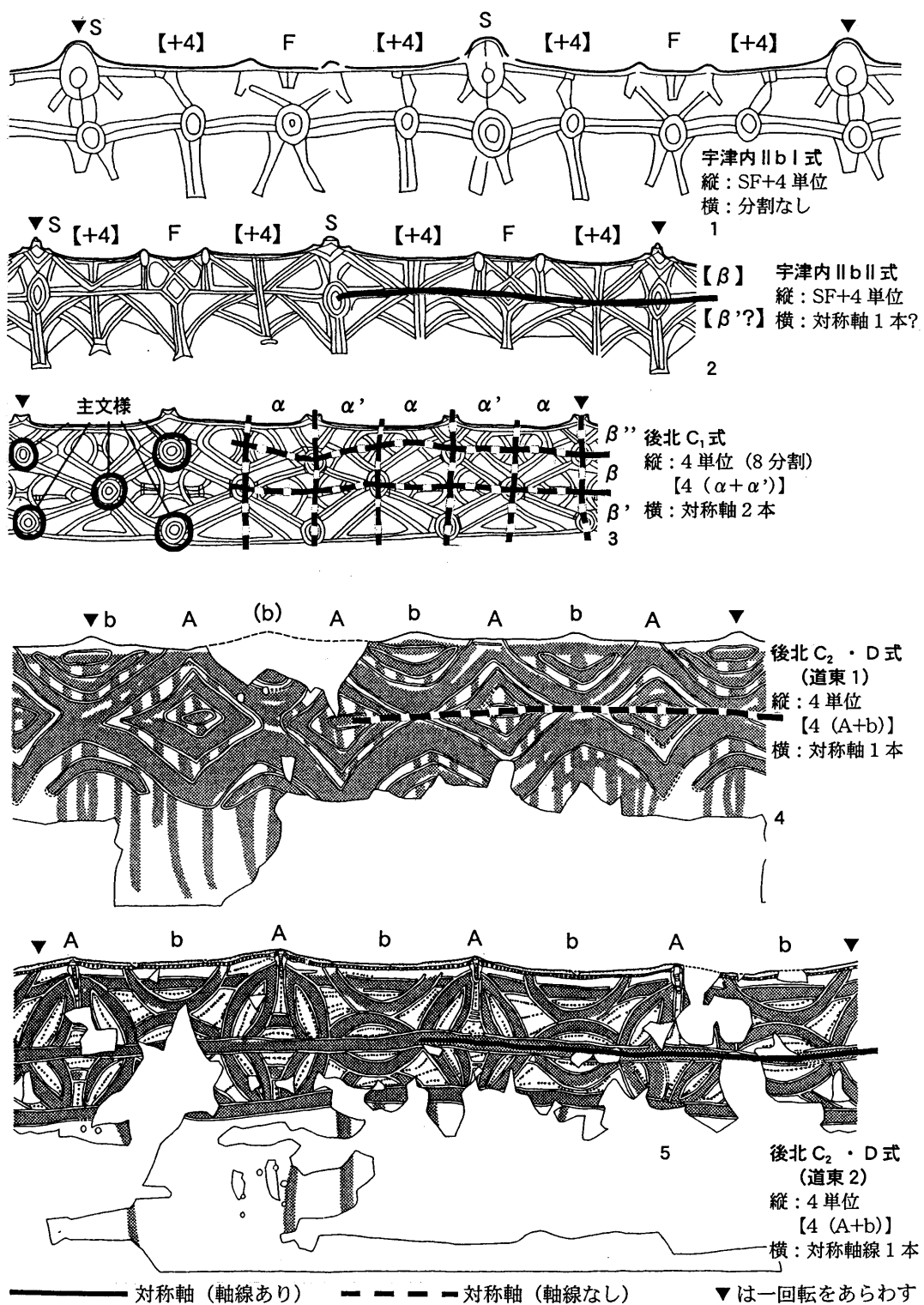
突起がない平縁の例でも、主文様・副文様が 4 単位を構成する例がある。第 29 図 1 は欠損部分が多いが、主文様・副文様が正確に割りつけられており、確実な 4 単位としてよい。第 29 図 4 は、4 等分の割りつけがなされているものの各々微妙に異なっている。すなわち、主文様には A と A' の 2 種類、副文様は b と c の 2 種類があり、副文様 1 ヶ所が脱落している。記号化すると、

$A+b+A+b+A'+c+A'$  (+欠)

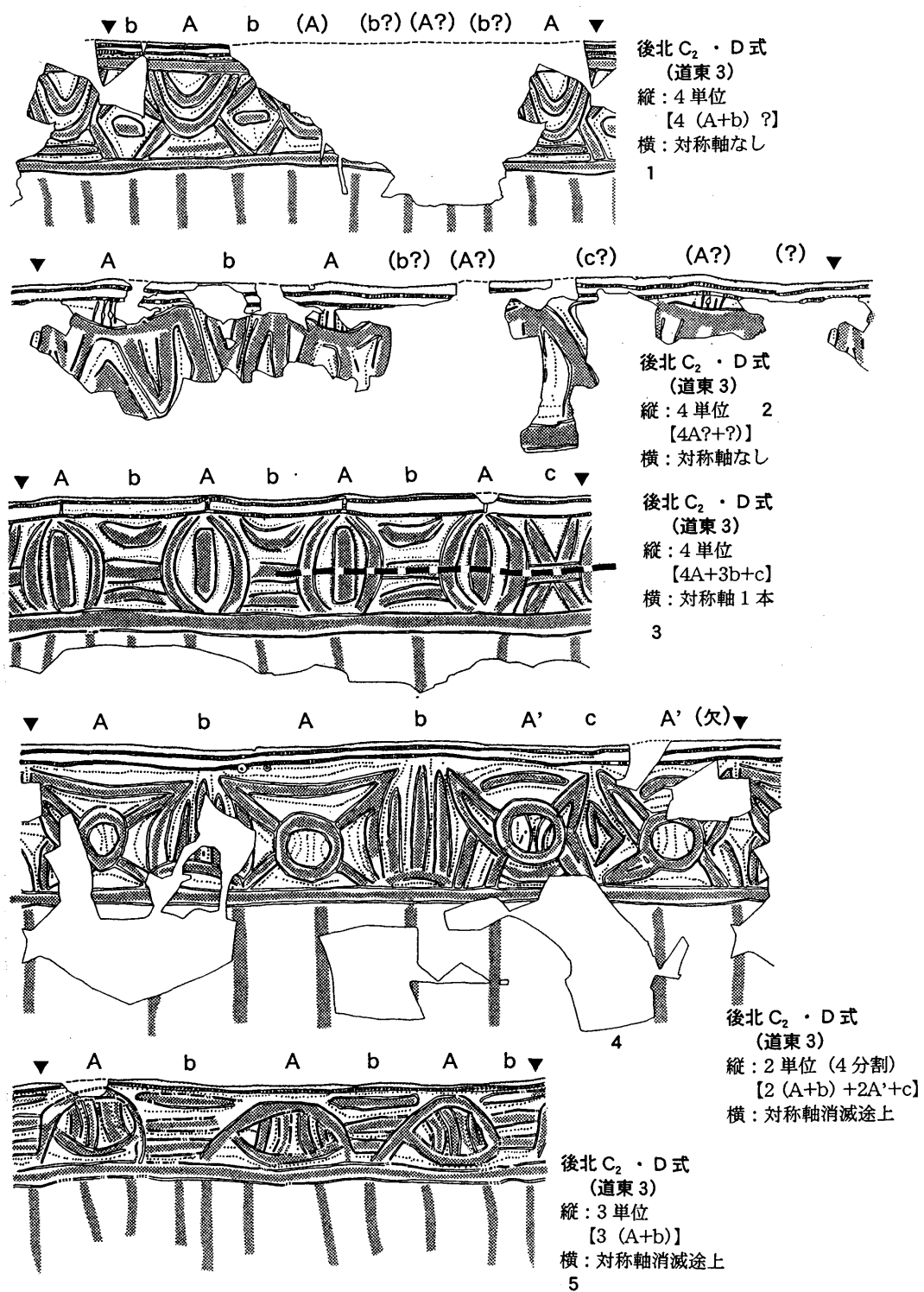
となる。これは c を一ヶ所補えば、

$2(A+b)+2(A'+c)$

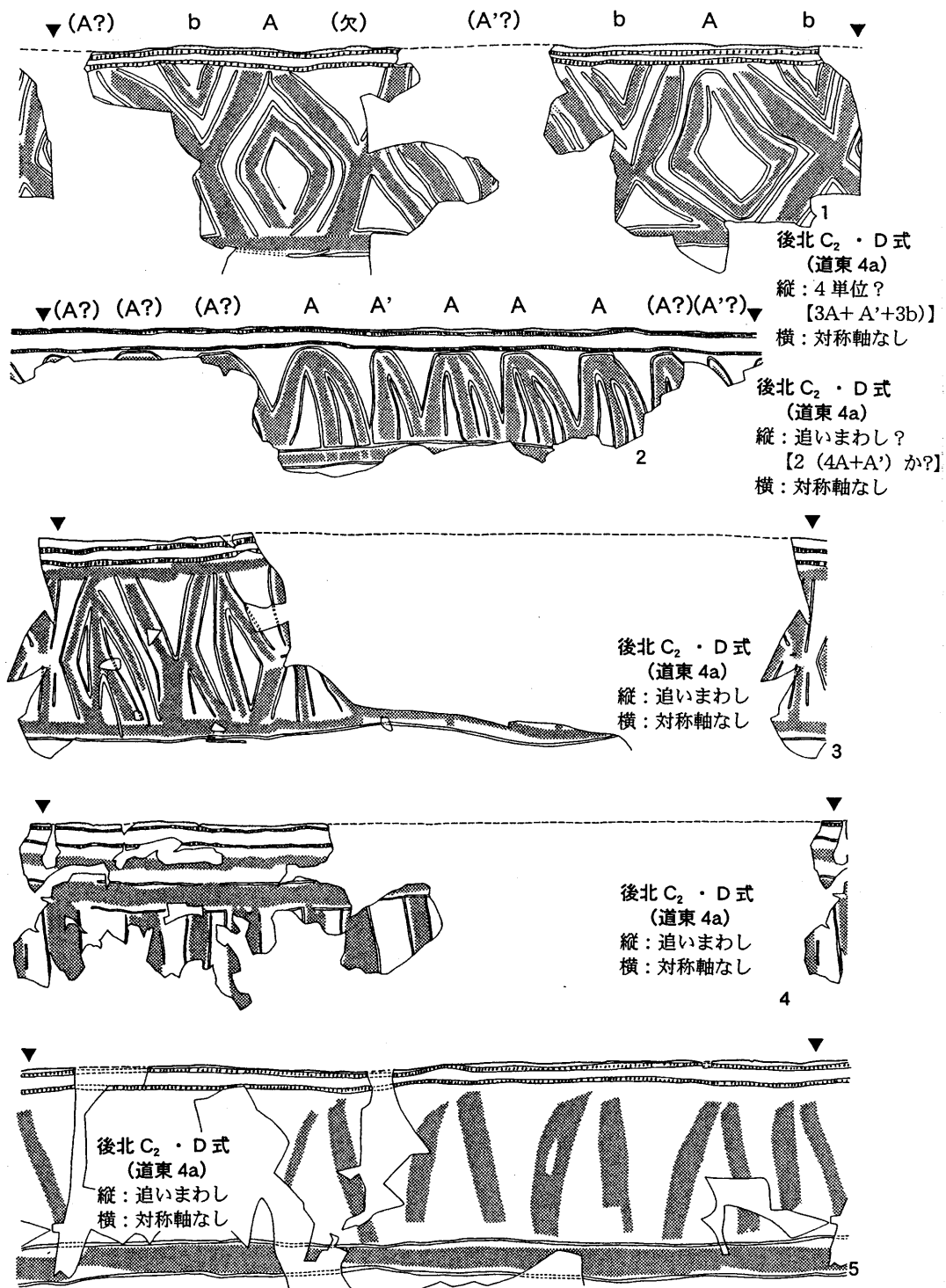




第 28 図 後北式土器文様展開模式図 1



第 29 図 後北式土器文様展開模式図 2



第 30 図 後北式土器文様展開模式図 3

すなわち、A を基調とした左半周/A' を基調とした右半周、の 2 単位とまとめることもできる（林 1988）。しかし筆者は後述するように、2 単位であることを強調するよりも、4 単位の退化とみたほうが文様の変遷過程を理解しやすいと考えている。第 30 図 1 は主文様の割りつけが等分ではなく 1 ヶ所がやや異なっており、副文様も 1 ヶ所脱落している。一応 4 単位とみることができるが、主文様・副文様の区別もあいまいになってきており、かなり退化した印象を受ける。以上のように主文様・副文様は共に 4 単位を基本としているが、トコロチャシ跡では主・副の各 4 ヶ所が合同となっている例はまれで、どこかが不揃い・不完全な例が多い。編年上注目すべき点である。

4 単位以外の特異な例として、3 単位の主文様・副文様を持つものがある（第 29 図 5）。割りつけは正確な 3 等分ではないが、主文様・副文様の意匠は各々共通性が高く、主／副の区別・単位がはっきりと認められる。

以上に見たのは全て主文様・副文様によって単位が構成される例である。これらの例のうち、施文順が確認できた例では全て主文様→副文様の順となっている。すなわち、主文様・副文様という分類は製作者の意識とも合致しているといえよう。

次に等分原理の割りつけを持たないものや、主文様・副文様の区別が認められない場合についてみよう。第 30 図 2 では主／副の区別はないが、三叉の鋸歯文が「単位文様」となっている。割りつけは等分原理に則らない「追いまわし」である（注 1）。第 30 図 3 では「く」の字・逆「く」の字がモチーフとなっているが、かなり奔放に意匠が描かれており「単位文様」を認めるのが困難になっている。第 30 図 4・5 に至っては「単位文様」と呼ぶべきまとまりはなく、縦縞・鋸歯文といった単純なモチーフを「追いまわし」で繰り返している。

以上、「単位文様」には 4 単位の主文様・副文様を基本とするものから、「単位文様」を追いまわし施文するもの、さらに「単位文様」自体がほぼ解消されたものまで漸移的なバリエーションが認められた。後述するようにこれらは時間的な変遷としてとらえることができよう。

## 2) トコロチャシ跡遺跡出土土器の分類

以上の文様要素・文様割りつけ原理や他の属性を指標として、遺構一括資料にも注目しながら、トコロチャシ跡遺跡出土資料の型式分類を行う。

### a) トコロチャシ跡 1 群土器：XVI-18 ピット群出土土器群（第 33 図 5～7）

XVI-18 ピット群出土土器群（XVI-18 ピット a 床面および上面・XVI-18 ピット b・XVI-17 ピット出土土器群）は、出土地点が接近していると同時に、型式学的なまとまりも強い土器群である。特徴をまとめてみよう。

- i) 器形は口唇部断面形が尖っている。
- ii) 文様要素は、全ての例が要素①～⑤の全てと⑦を有する。要素②の内容は、刻み目を持つ貼付文が1条の例と2条の例がある。
- iii) 全ての例で「単位文様」に主文様・副文様の別があり、文様割りつけも1つの例外を除き全て4単位を基本とする。

b) トコロチャシ跡2群土器：XⅢ-21ピット出土土器群の一部（第33図12・14）

4点の深鉢が出土しているが、1点（第33図4）はI群と全く同じ特徴を持つ。他の3点についてまとめてみよう。

- i) 器形は口唇部断面形が尖っている。
- ii) 文様要素をI群と比べると、⑤・⑦を欠いている。①を欠く例も1点ある。要素②の内容は、刻み目を持つ貼付文2条の例のみである。
- iii) 「単位文様」をみると、例外的な1点を除き、主文様・副文様の別がないものが1点、「単位文様」そのものが消滅しかかっているのが1点となっており、文様割りつけは両者とも「追いまわし」である（注2）。

c) トコロチャシ跡3群土器：1・2・4群とは異なる特徴を持つ発掘区出土土器群（第34図1）

上記2地点以外の発掘区から出土した土器群には、1群・2群と同じ特徴を有するものもあるが、異なっている一群もある。後述の4群（OI円形刺突文・突瘤文を有する例）を除いてまとめたのが3群である。

- i) 器形は口唇部断面形が平坦面を持つものが特徴的であるが、尖るものもある。
- ii) 文様要素①～④がみられるが、2群と比べて要素②や④を欠く例が特徴的となる。要素②の内容が微隆起線となる例も特徴的といえよう（注3）。
- iii) 「単位文様」はほぼ消滅し、文様割りつけは「追いまわし」のみとなる。

d) トコロチャシ跡4群土器：口縁部のOI円形刺突文・突瘤文を有する発掘区出土土器群（第34図11～14）

要素⑥、すなわち口縁部のOI円形刺突文・突瘤文を有する例は、先学に従い3群に後続するものとする（上野1974、田才1983）。北大I式直前に位置づけられる土器群である。

- i) 器形は全例とも口唇部断面形に平坦面を持つものとなる。
- ii) 文様要素は要素⑥を有する。他の要素は3群に準ずる。
- iii) 「単位文様」・文様割りつけも3群に準ずる。

### 3) トコロチャシ跡編年の検証

以上に設定したトコロチャシ跡 1 群～4 群までの型式組列は非常にスムーズである。問題は各群を時期差として、すなわち細別型式のまとまりとして分離・設定しうるかであろう。筆者は後北 C<sub>2</sub>・D 式の編年の柱となるのは文様割りつけ原理であると考えているが、先の分類で述べてきたように文様割りつけ原理だけが編年のメルクマールとなるのではなく、他の様々な諸属性も編年の指標となりうる。ただし各属性が変化する時点やスピードは様々であるので、ある一つの属性を細別のメルクマールとするならば、別の属性を基準とした場合との齟齬が生じることになる。属性の数だけ細別編年が提起される、という事態を避けるためには、各属性の組み合わせを明らかにし、型式変遷の実態を正しく把握しなければならない。繁雑な手続きを要するが、型式学的変遷の実態と細別の妥当性を検証するためには不可欠な作業である。またこれは、破片資料では文様の割りつけ原理を把握できないという点に弱点を抱える、筆者の方法を補完するための分析でもある。

ここでは編年のメルクマールとなりうる属性として、特に以下の 4 項目に着目した。各属性の a～d は新→古の順に配列してある。

#### 属性 1：口唇部断面形態

- a：水平ないし内傾する平坦面を持つ。
- b：丸みを帯びるか尖っている

#### 属性 2：口唇部の刻み目

- a：刻み目がない
- b：刻み目がある

#### 属性 3：口唇下部の貼付文

- a：貼付文なし
- b：刻みのない貼付文（微隆起線）が 1～2 条めぐり
- c：刻みのある貼付文が 2 条以上めぐり
- d：刻みのある貼付文が 1 条めぐり

#### 属性 4：体部文様要素の組成

- a：帯縄文のみ
- b：帯縄文+微隆起線
- c：帯縄文+微隆起線+列点文（微隆起線を欠くものを含む）

属性 3 について解説しておこう。a の貼付文なしは型式学的に最も新しく位置づけうる属性である。続くのが b の刻みのない貼付文（微隆起線）である。1 条・2 条の例があるが、どちらも

例数が少ないので一つにまとめた。c・dの刻み目のある貼付文については、1条が古く2条が新しい傾向にあることが道央部以南の資料で指摘されている（上野・加藤編1987、木村1999）。

『トコロチャシ跡遺跡』報告書（宇田川・熊木編2001）記載の「大型」・「中型」深鉢のうち、4群および無文の土器を除いた70個体（完形・破片）全てについて属性1～4を判別し、各2種をクロス集計したのが第31図1～12、全4種をまとめてクロス集計したのが第31図13である。

まずトコロチャシ跡1群・2群の区分を検討しよう。1群のメルクマールとなりうるのは属性4c（列点文）である。属性1との関係をみると（第31図10）、1a（尖る口唇部）とのみと結びついている。属性2とでは（第31図11）、大部分は2a（口唇部刻み目あり）と結びつく。属性3とでは（第31図12）、3c・3d（刻み目のある貼付文）とのみ併存している。このように属性4cの列点文は各属性の古い群とのみ結びついており、トコロチャシ跡遺跡では最も古い群のメルクマールとして最適であることがわかる。次に、道央部以南で古いと指摘された属性3d（刻み目の有る貼付文1条）がトコロチャシ跡1群のメルクマールとなるかについてみる。属性1・2・4との結びつきをみると（第31図7～9）、確かに3dは古手の群と結びつく傾向にあるが、3c（刻み目のある貼付文2条）と比較した場合古い群との結びつきがそれほど明確ではないことがわかる。後述するように属性3dはおそらくトコロチャシ跡1群以前に盛行する属性で、その後は少数となり4群まで残存するのであろう。

次にトコロチャシ跡2群・3群の区分である。3群に特徴的とみたのは属性1a（平坦面のある口唇部）である。属性2～4との関係をみると確かに新手の群と結びつく傾向は確認できる（第31図1～3）。しかし属性1aと併存しないのは1群の特徴である属性4c（列点文）のみであり、他の属性との関係は相対的なものである。他に3群に特徴的とした属性には3a、3b、4aがあり、やはり新手の群と結びつくが相対的な傾向に止まる。すなわち2群から3群への変遷は、属性4cを除く全ての属性が各々緩やかに変化していくという漸移的なものといえる。すなわち、2群～3群の間には新旧の属性を併せ持ち細別の判断が付きにくい例が存在することになる。このような場合、新旧の判断は属性の組み合わせに基づいて行うべきであって、ある単独の属性をメルクマールとして強引に細分を行えば変遷の実態と齟齬を来すことになる。第31図13で言えば、太枠で囲った範囲が各々1～3群として区分できる個体であり、太枠に入らない部分が2群・3群のどちらに含めるべきか判断の難しい個体となる。

4群については円形刺突文・突瘤文の他に、属性1b（尖る口唇部）の消滅がメルクマールとなる。サンプル数が少ないため集計データを提示しなかったが、属性2・3・4のあり方は3群にほぼ準ずるものと思われる。

1

		口唇部刻み目		計
		無	有	
口唇部 形態	平	13	9	22
	尖	12	36	48
計		25	45	70

2

		口唇下部貼付文				計
		3a	3b	3c	3d	
口唇部 形態	平	12	3	6	1	22
	尖	10	3	28	7	48
計		22	6	34	8	70

3

		体部文様要素			計
		4a	4b	4c	
口唇部 形態	平	3	19	0	22
	尖	9	25	14	48
計		12	44	14	70

4

		口唇部形態		計
		平	尖	
口唇部 刻み目	無	13	12	25
	有	9	36	45
計		22	48	70

5

		口唇下部貼付文				計
		3a	3b	3c	3d	
口唇部 刻み目	無	14	1	9	1	25
	有	8	5	25	7	45
計		22	6	34	8	70

6

		体部文様要素			計
		4a	4b	4c	
口唇部 刻み目	無	5	19	1	25
	有	7	25	13	45
計		12	44	14	70

7

		口唇部形態		計
		平	尖	
口唇下部 貼付文	3a	12	10	22
	3b	3	3	6
	3c	6	28	34
	3d	1	7	8
計		22	48	70

8

		口唇部刻み目		計
		無	有	
口唇下部 貼付文	3a	14	8	22
	3b	1	5	6
	3c	9	25	34
	3d	1	7	8
計		25	45	70

9

		体部文様要素			計
		4a	4b	4c	
口唇下部 貼付文	3a	10	12	0	22
	3b	0	6	0	6
	3c	1	21	12	34
	3d	1	5	2	8
計		12	44	14	70

10

		口唇部形態		計
		平	尖	
体部 文様要素	4a	3	9	12
	4b	19	25	44
	4c	0	14	14
計		22	48	70

11

		口唇部刻み目		計
		無	有	
体部 文様要素	4a	5	7	12
	4b	19	25	44
	4c	1	13	14
計		25	45	70

12

		口唇下部貼付文				計
		3a	3b	3c	3d	
体部 文様要素	4a	10	0	1	1	12
	4b	12	6	21	5	44
	4c	0	0	12	2	14
計		22	6	34	8	70

13

			体部文様要素／口唇下部貼付文												計
			4a				4b				4c				
			3a	3b	3c	3d	3a	3b	3c	3d	3a	3b	3c	3d	
口唇部 / 口唇部 形態 刻み目	平	無	1	0	0	0	9	1	2	0	0	0	0	0	13
		有	2	0	0	0	0	2	4	1	0	0	0	0	9
	尖	無	3	0	1	0	1	0	5	1	0	0	1	0	12
		有	4	0	0	1	2	3	10	3	0	0	11	2	36
計			10	0	1	1	12	6	21	5	0	0	12	2	70

トコロチャシ跡3群

トコロチャシ跡2群

トコロチャシ跡1群

トコロチャシ跡3群

トコロチャシ跡2群

トコロチャシ跡1群

第 31 図 トコロチャシ跡遺跡出土後北 C<sub>2</sub>・D 式土器属性クロス集計表



以上、トコロチャシ跡遺跡の後北 C<sub>2</sub>・D 式土器をトコロチャシ跡 1~4 群に分類し、型式編年を検証した。型式学的にはひとつながりの漸移的な変遷といえるが、属性の組み合わせをみた場合、1 群・4 群は細別型式として他から分離しうることが確認できた。2 群・3 群は極めて漸移的な関係にあるが、属性の組み合わせに基づいて段階を設定することは可能であった。

### 3. 北海道東部の編年

#### 1) 後北 C<sub>1</sub> 式土器・宇津内 II b II 式土器（第 32 図 1~7）

道東部の後北 C<sub>2</sub>・D 式全体を検討する前に、道東部網走地域でこれらに先行する、後北 C<sub>1</sub> 式・宇津内 II b II 式についてまとめておこう。両者は異系統・併行関係にある土器型式で、遺跡・遺構内で共伴する。なおこれらの型式については第 1 章でも触れたので参照されたい。

##### a) 器形

口径に比して器高が高く、底径が狭いという全体的に細長い深鉢形が一般的である。ただし、次の後北 C<sub>2</sub>・D 式につながるような、口径・底径の広い鉢形に近いプロポーシヨンの土器もこの型式から存在するようである。口唇部断面形は尖っている例が大多数である。底部は上底の例が多い。

##### b) 文様要素

体部・胴部下半とも地文に帯縄文が施される。口唇部直下には微隆起線が複数めぐる。体部には微隆起線によって意匠が描かれる。

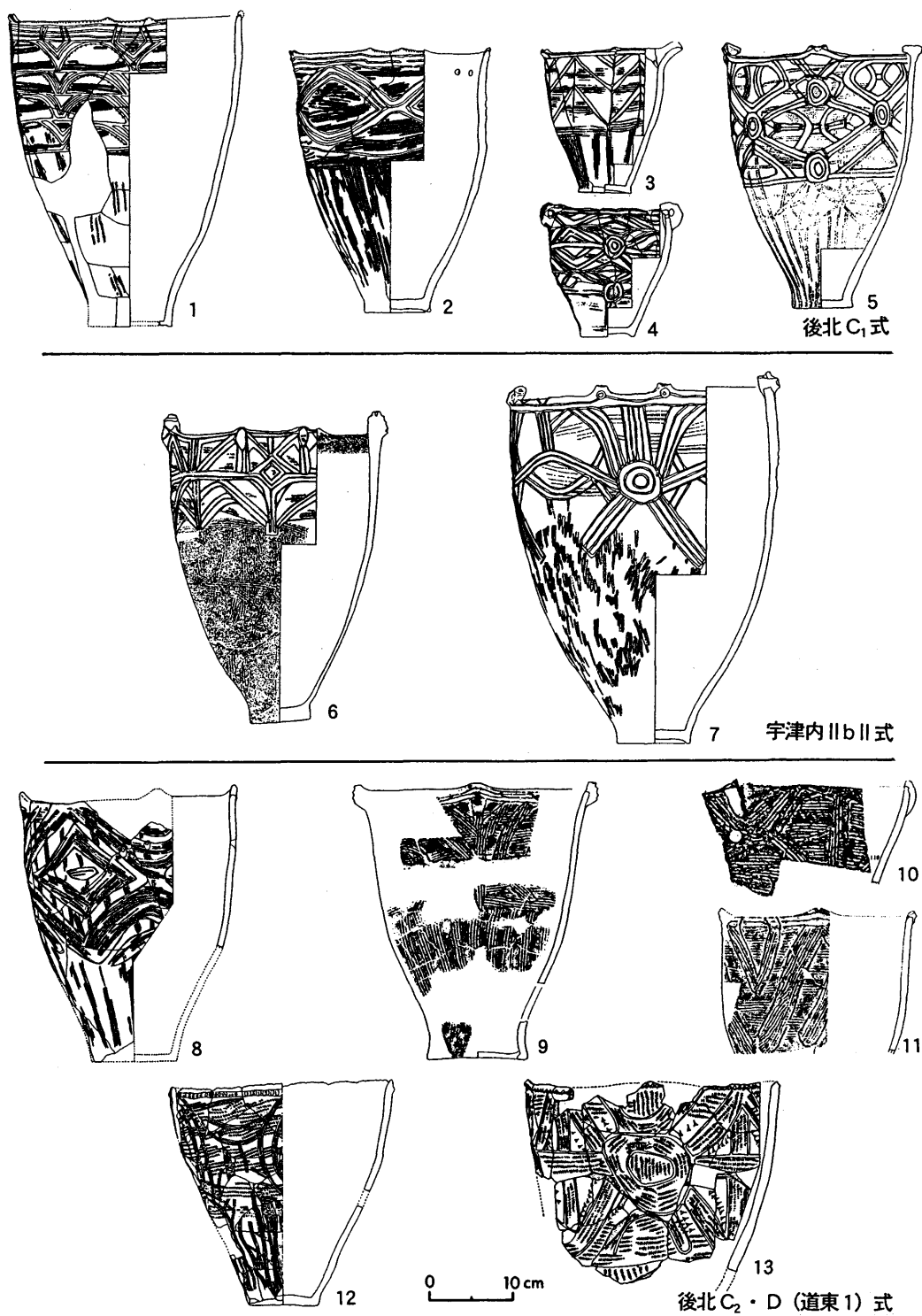
##### c) 文様割りつけ

後北 C<sub>1</sub> 式と宇津内 II b II 式で大きく異なるのが文様割りつけである。

##### <後北 C<sub>1</sub> 式の割りつけ>（第 28 図 3）

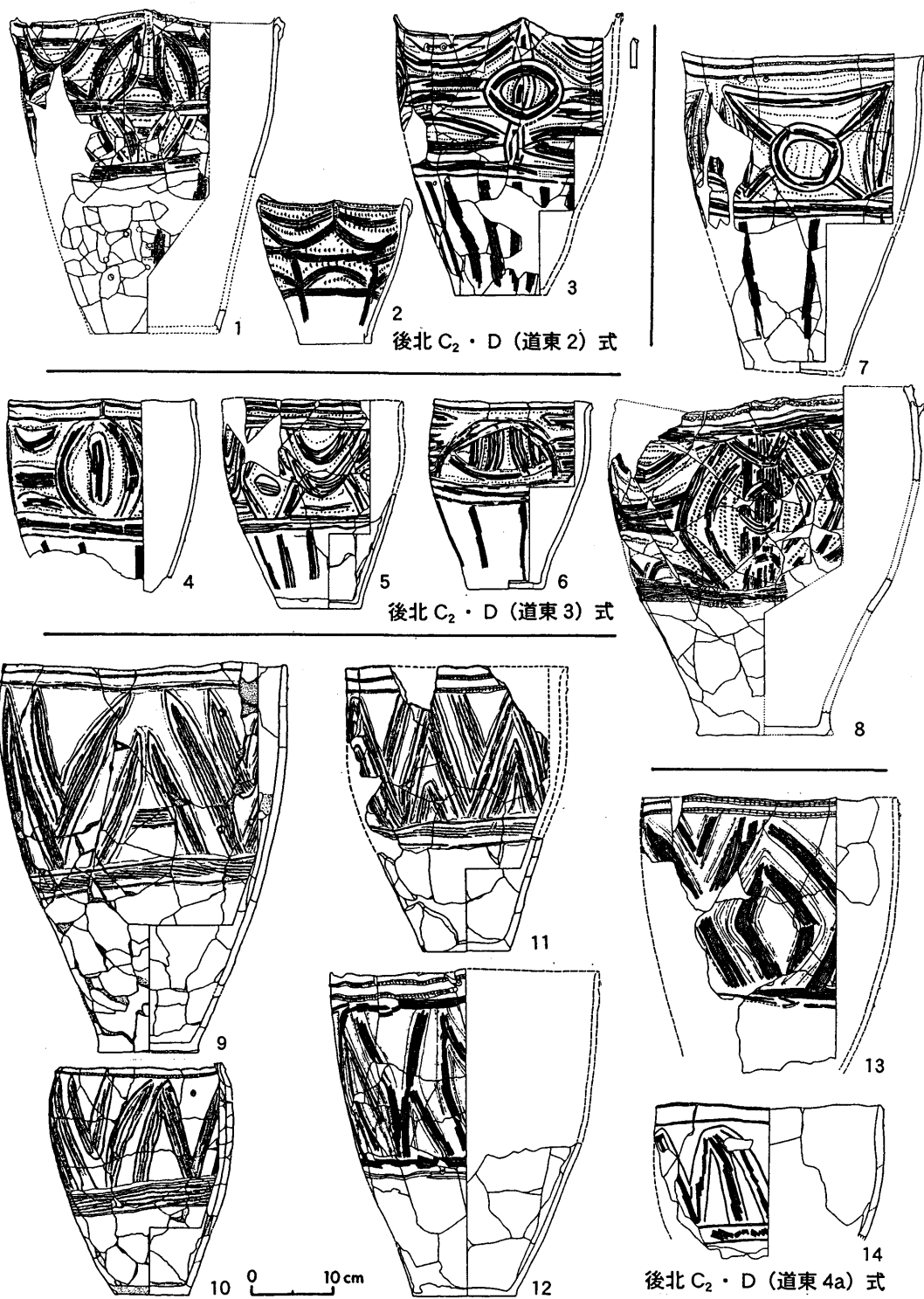
縦の文様割りつけであるが、口縁部の突起は 4 単位である。2 単位の吊耳をもつ宇津内 II b II 式との折衷的な例（第 32 図 4）もある。体部の文様は、口縁部突起を割りつけの軸として、8 分割を基本とする 4 ないし 8 単位の割りつけがなされている。これは 8 等分線の「対称軸」を基線とした線対称の意匠ないし「単位文様」の重畳、とみることができる。一方、横の文様割りつけは多段化したものであるが、これも 2 本以上の「対称軸」を基線とした線対称の意匠ないし「単位文様」の重畳、とみることが可能である。

なお「単位文様」については、「単位文様」が線対称ないしは重畳して反復するという構成が基本となる。「主文様」・「副文様」の区別をしうる例もあるが、後述の後北 C<sub>2</sub>・D 式のように、「主文様」が文字通りデザイン上支配的な位置を占めているわけではない。



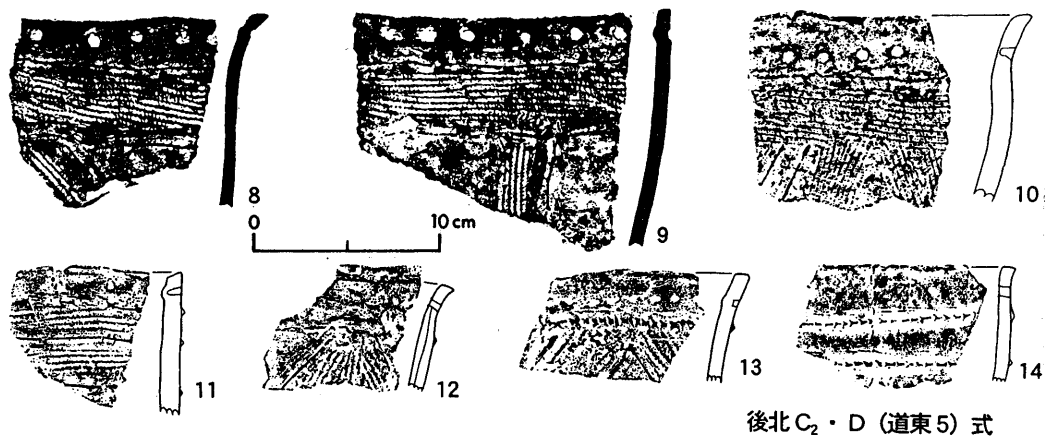
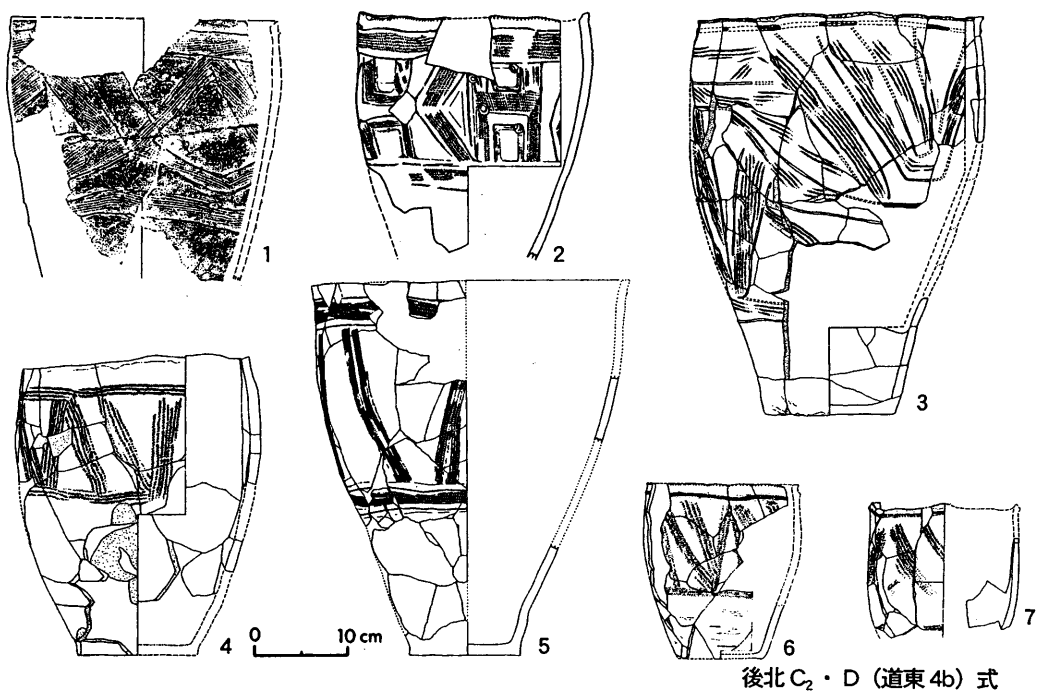
第 32 図 北海道東部の後北式土器編年 1

1・11：栄浦第二 2・7：栄浦第一 3・5・6：岐阜第二 4・8：常呂川河口 9：別当賀一番沢川 10：相泊 12：トコロチャシ南尾根 13：内藤



第 33 図 北海道東部の後北式土器編年 2

1・3・8：常呂川河口 2：伊茶仁ふ化場 4～7・12～14：トコロチャシ跡 9～11：オシヤマツ  
ブ川



第 34 図 北海道東部の後北式土器編年 3

1・11～14：トコロチャシ跡 2：開成 4 3：オシャマツ川 4・6・7：栄浦第一 5：史跡常呂遺跡 (ST-09) 8・9：モヨロ貝塚 10：常呂川河口

### ＜宇津内ⅡbⅡ式の割りつけ＞（第28図2）

まず縦の文様割りつけである。口縁部の突起であるが、正面一側面で意匠の異なる 2+2 単位（第1章参照）の突起が施されている。体部の文様はこの突起を軸とした 2+2 単位を基本とし、さらにそれらの各単位間（4ヶ所）にも割りつけが施されている。このような割りつけ（「SF+4 単位」（第1章参照））は、宇津内ⅡbⅠ式（第28図1）の伝統に連なるものである。ただし宇津内ⅡbⅡ式では意匠が線対称化しており、後北 C<sub>1</sub> 式の強い影響下にあることも事実である。一方横の割りつけも同じように線対称化が進んでいるが、後北 C<sub>1</sub> 式と比べると線対称は不完全で多段化もしていない。

「単位文様」についてふれておこう。そもそも宇津内式系の「単位文様」のあり方は、突起（縦の単位）下に「主文様」、縦の単位間をつなぐ部分に「副文様」という構成となっている。第28図1の場合は、主文様が正面の F と側面の S 及び両脇の（+4）であり、それら「主文様」を横に連結する水平の貼付文が「副文様」である。宇津内ⅡbⅡ式の場合は後北 C<sub>1</sub> 式の影響を受けてそれらの原則がわかりにくくなっているが、第28図1と第28図2を比較すれば、第28図2の「主文様」が S と F、「副文様」が（+4）であることが理解できよう。このように「主文様」・「副文様」の区別は、もともと宇津内式系の系統で盛行してきた文様単位構成であることを指摘しておきたい。

## 2) 後北 C<sub>1</sub> 式土器とトコロチャシ跡1群土器の間

以上の後北 C<sub>1</sub> 式土器・宇津内ⅡbⅡ式土器と、先に検討した後北 C<sub>2</sub>・D 式トコロチャシ跡1群土器の間には型式学的なギャップが存在する。これらの間に位置する、すなわち後北 C<sub>2</sub>・D 式の最も古い段階に相当する道東の土器群については、これまで報告例が稀で実態が不明確であったが、近年、常呂町常呂川河口遺跡（武田編 1996、同 2000、同 2002）・羅臼町相泊遺跡（澤ほか 1971、涌坂編 1996）を中心に出土例が散見されるようになり、様相が判明しつつある。以下、道東部におけるこれら後北 C<sub>2</sub>・D 式の古い段階の土器群を、型式学的に 2 つのグループに分けて常呂川河口1群土器・同2群土器と仮称する。

### ①常呂川河口1群土器（第32図8～13）

#### a) 器形

細長い深鉢形が多いが、底径は広くなり平底化する。口縁部が広く開く鉢形に近い器形も存在する。口唇部断面形はやや角張っている。

#### b) 文様要素

地文は前段階を踏襲し、体部・胴部下半とも帯縄文が施される。口唇部直下の貼付文は微隆起

線が複数めぐると貼付文がないものがある。刻み目のある貼付文はこの段階から出現するようであるが、稀な例である。体部の文様は、地文に重ねて、帯縄文とそれに沿う微隆起線ないしは帯縄文のみで文様意匠が描かれる。列点文はこの段階で出現するようであるが、稀である。

c) 文様割りつけ

この土器群の大きな特徴は、一部の土器で文様割りつけが縦横とも崩れる点にある。

口縁部の突起は 4 単位の例が多いが、平縁の例もこの段階から出現している。体部の文様割りつけは、縦に 8 分割が可能な線対称の意匠を踏襲する例が多いが、縦横の「対称軸」線が明瞭で幾何学的な意匠からなる後北 C<sub>1</sub> 式的なもの（第 32 図 10）と、縦横の「対称軸」線がやや不明瞭で、かわりに 4 単位の「主文様」・「副文様」という構成が際だってくるものが併存する（第 32 図 8（第 28 図 4））。横の「対称軸」が 3 段以上の例はなくなる。なお、横の「対称軸」がない例（第 32 図 11）が存在することは注目に値する。

「単位文様」についてみると、完形に近い資料では「主文様」・「副文様」の別が確認できる例が多い。主／副の別が不明瞭で「単位文様」のみで構成される、後北 C<sub>1</sub> 式的な文様割りつけと思われる例（第 32 図 10）もあるが、資料が少なく詳細不明である。

以上のような文様割りつけの「崩れ」は、先述の宇津内 II b II 式の記述と対比させてみれば、道東部の伝統に由来するものであることが理解できよう。特に「対称軸」が不明瞭になる点と、「主文様」・「副文様」の顕在化が道東部的な特徴である。

なお、第 32 図 12・13 は器形・文様要素とも次の段階に近いが、地文の存在からこの段階に含めた。型式学的に新しい例といえる。

②常呂川河口 2 群土器（第 33 図 1～3）

a) 器形

プロポーシオンは常呂川河口 1 群を踏襲しており、底径が広い深鉢形・鉢形が確認されている。口唇部断面形は 1 群とは異なり尖る。

b) 文様要素

体部の地文は消滅し、胴部下半にのみ残る。口唇部直下の貼付文は、1 条の刻み目のある貼付文の例が多く、2 条の例は少ないようである。体部の文様は帯縄文とそれに沿う微隆起線ないしは帯縄文のみで文様意匠が描かれ、全ての例に列点文が施される。

c) 文様割りつけ

常呂川河口 1 群の段階で一部に混乱がみられた文様割りつけは、ここで再び後北式の伝統へと収束する。口縁部の突起は 4 単位である。平縁等の例があるか否かは資料が少なく不明である。文様の割りつけは、縦横の「対称軸」線が復活する。特に第 28 図 5（第 33 図 1）の例では横の

「対称軸」線が他の体部文様より先に施文されており、文様帯の横の分割が強く意識されていたことがわかる。これは、後北 C<sub>1</sub> 式の文様構成（「対称軸」を基線とする縦 8 分割・横多段の割りつけ）の伝統に則るものであり、前段階で混乱がみられた文様割りつけが再び後北式の系統へと収斂していく様子が読みとれる。結果として文様構成は 4 単位ながらも幾何学的（線対称・重畳が基本）となり、「主文様」・「副文様」の区分がややわかりにくい構成に逆戻りする。

### 3) 道東細分型式の設定

これまでに検討してきた各土器群を整理し、道東 1 式～5 式の細分型式名を設定すると第 35 図下の表のようになる。前述のようにトコロチャシ跡 2 群・3 群は極めて漸移的な関係にあるので、これらは細分型式とはせず道東 4a 式・4b 式の「段階」として設定した。トコロチャシ跡以外の遺跡から出土した土器を加えて道東部の土器編年図を提示しておく（第 32 図～第 34 図）。

後北 C<sub>1</sub> 式～後北 C<sub>2</sub>・D（道東 5）式までの型式変遷をわかりやすく示すため、主な属性の変化をまとめてみた（第 36 図）。表を一瞥すると各土器群はスムーズに変遷しているようにも見えるが、道東 1 式の段階で型式変遷の流れに乱れが生じる点に注意しておきたい。具体的には、先に指摘した文様割りつけ原理の混乱や、平らな口唇部断面形態、口唇部直下貼付文を欠く例などがこの段階の変則的な特徴である。このような変則的な変遷が持つ意味は、道東部と道央部の編年を対比し、地域間の共時的関係を検討することによって明らかになるであろう。次節で考察する。

各細別型式の、出土状況のまとまりについて確認しておこう。道東 1 式・2 式および 5 式は出土が少なく遺跡・遺構・層位でのまとまりは確認されていない。道東 3 式は前述の通りトコロチャシ跡遺跡 X VI-18 ピット群でのまとまりがある。深鉢はわずか 3 個体であるが、他の時期の資料が含まれていないことには注目できる。道東 4a・4b 式のまとまった資料にはトコロチャシ跡 X III-21 ピット、斜里町オシャマップ川遺跡（松田編 1995）の資料がある。トコロチャシ跡 X III-21 ピットの方は、前述の通り深鉢 4 個体中の 1 個体が道東 3 式、他は道東 4a 式に比定できる。一方オシャマップ川遺跡の方は、深鉢 6 個体中 5 個体が 4a 式、1 個体が 4b 式に分類できる。このようなあり方は、両者とも道東 4a 式のまとまりを示すと同時に、前者は前段階からの・後者は後段階への漸移的な変遷の流れを示すものとして矛盾無く解釈可能であると考えている。すなわちこれらの例も、細別編年の妥当性を補強するものと捉えうるであろう。

## 4. 北海道中央部との編年対比

### 1) 各氏の編年と対比

石本 1984	大沼 1982	上野 1992	大島 1991	鈴木 1998	佐藤 2000
前葉	初	←	I 類	—	Ⅱe
中葉	一般的	K135Ⅶ1 群	Ⅱ類		Ⅲ-1-a
		K135Ⅶ2 群			Ⅲ-1-b
後葉	後葉	←	Ⅲ類		Ⅲ-2-a
	末	←	Ⅳ類 Ⅴ類		Ⅲ-2-b Ⅲ-3-a Ⅲ-3-b

	鈴木 1998	道東型式名 (本文中の仮称)
I 期	—	道東 1 式= 常呂川河口 1 群
Ⅱ 期	a 段階	道東 2 式= 常呂川河口 2 群
	b 段階	
	c 段階	道東 3 式= トコロチャシ跡 1 群
Ⅲ 期	d 段階	道東 4a 式= トコロチャシ跡 2 群
	e 段階	
	f 段階	道東 4b 式= トコロチャシ跡 3 群
		道東 5 式= トコロチャシ跡 4 群

第 35 図 上：後北 C<sub>2</sub>・D 式土器編年対比表

下：道東部後北 C<sub>2</sub>・D 式土器編年と鈴木氏編年の対比



型式名	器形			文様単位・割りつけ										文様要素																																																																																																																																																																																																																																																																																																																					
	器高／ 口径比	底径	口唇 断面	口縁部突起			縦の単位数			横の対称軸数			単位文様		口唇下貼付文				突溜文 円刻文		体部文様				地文																																																																																																																																																																																																																																																																																																										
				2 (+2)	4	0	4or8 (8分 割)	4	2 など	0	1・ 軸線 あり	1・ 軸線 なし	主・ 副文 文様 のみ	単位 文様 のみ	単位 文様 あり なし	刻み あり 1条	刻み あり 2条	刻み なし	貼付 なし	なし あり	地文 + 微隆 起線 ※1	地文 + 微隆 起線 ※1	地文 + 微隆 起線 ※1	地文 + 微隆 起線 ※1	地文 + 微隆 起線 ※1	地文 + 微隆 起線 ※1	地文 + 微隆 起線 ※1	地文 + 微隆 起線 ※1	地文 + 微隆 起線 ※1	地文 + 微隆 起線 ※1	地文 + 微隆 起線 ※1	地文 + 微隆 起線 ※1	地文 + 微隆 起線 ※1	地文 + 微隆 起線 ※1	地文 + 微隆 起線 ※1	地文 + 微隆 起線 ※1	地文 + 微隆 起線 ※1	地文 + 微隆 起線 ※1	地文 + 微隆 起線 ※1	地文 + 微隆 起線 ※1	地文 + 微隆 起線 ※1	地文 + 微隆 起線 ※1	地文 + 微隆 起線 ※1	地文 + 微隆 起線 ※1	地文 + 微隆 起線 ※1	地文 + 微隆 起線 ※1	地文 + 微隆 起線 ※1	地文 + 微隆 起線 ※1	地文 + 微隆 起線 ※1	地文 + 微隆 起線 ※1	地文 + 微隆 起線 ※1	地文 + 微隆 起線 ※1	地文 + 微隆 起線 ※1	地文 + 微隆 起線 ※1	地文 + 微隆 起線 ※1	地文 + 微隆 起線 ※1	地文 + 微隆 起線 ※1	地文 + 微隆 起線 ※1	地文 + 微隆 起線 ※1	地文 + 微隆 起線 ※1	地文 + 微隆 起線 ※1	地文 + 微隆 起線 ※1	地文 + 微隆 起線 ※1	地文 + 微隆 起線 ※1	地文 + 微隆 起線 ※1	地文 + 微隆 起線 ※1	地文 + 微隆 起線 ※1	地文 + 微隆 起線 ※1	地文 + 微隆 起線 ※1	地文 + 微隆 起線 ※1	地文 + 微隆 起線 ※1	地文 + 微隆 起線 ※1	地文 + 微隆 起線 ※1	地文 + 微隆 起線 ※1	地文 + 微隆 起線 ※1	地文 + 微隆 起線 ※1	地文 + 微隆 起線 ※1	地文 + 微隆 起線 ※1	地文 + 微隆 起線 ※1	地文 + 微隆 起線 ※1	地文 + 微隆 起線 ※1	地文 + 微隆 起線 ※1	地文 + 微隆 起線 ※1	地文 + 微隆 起線 ※1	地文 + 微隆 起線 ※1	地文 + 微隆 起線 ※1	地文 + 微隆 起線 ※1	地文 + 微隆 起線 ※1	地文 + 微隆 起線 ※1	地文 + 微隆 起線 ※1	地文 + 微隆 起線 ※1	地文 + 微隆 起線 ※1	地文 + 微隆 起線 ※1	地文 + 微隆 起線 ※1	地文 + 微隆 起線 ※1	地文 + 微隆 起線 ※1	地文 + 微隆 起線 ※1	地文 + 微隆 起線 ※1	地文 + 微隆 起線 ※1	地文 + 微隆 起線 ※1	地文 + 微隆 起線 ※1	地文 + 微隆 起線 ※1	地文 + 微隆 起線 ※1	地文 + 微隆 起線 ※1	地文 + 微隆 起線 ※1	地文 + 微隆 起線 ※1	地文 + 微隆 起線 ※1	地文 + 微隆 起線 ※1	地文 + 微隆 起線 ※1	地文 + 微隆 起線 ※1	地文 + 微隆 起線 ※1	地文 + 微隆 起線 ※1	地文 + 微隆 起線 ※1	地文 + 微隆 起線 ※1	地文 + 微隆 起線 ※1	地文 + 微隆 起線 ※1	地文 + 微隆 起線 ※1	地文 + 微隆 起線 ※1	地文 + 微隆 起線 ※1	地文 + 微隆 起線 ※1	地文 + 微隆 起線 ※1	地文 + 微隆 起線 ※1	地文 + 微隆 起線 ※1	地文 + 微隆 起線 ※1	地文 + 微隆 起線 ※1	地文 + 微隆 起線 ※1	地文 + 微隆 起線 ※1	地文 + 微隆 起線 ※1	地文 + 微隆 起線 ※1	地文 + 微隆 起線 ※1	地文 + 微隆 起線 ※1	地文 + 微隆 起線 ※1	地文 + 微隆 起線 ※1	地文 + 微隆 起線 ※1	地文 + 微隆 起線 ※1	地文 + 微隆 起線 ※1	地文 + 微隆 起線 ※1	地文 + 微隆 起線 ※1	地文 + 微隆 起線 ※1	地文 + 微隆 起線 ※1	地文 + 微隆 起線 ※1	地文 + 微隆 起線 ※1	地文 + 微隆 起線 ※1	地文 + 微隆 起線 ※1	地文 + 微隆 起線 ※1	地文 + 微隆 起線 ※1	地文 + 微隆 起線 ※1	地文 + 微隆 起線 ※1	地文 + 微隆 起線 ※1	地文 + 微隆 起線 ※1	地文 + 微隆 起線 ※1	地文 + 微隆 起線 ※1	地文 + 微隆 起線 ※1	地文 + 微隆 起線 ※1	地文 + 微隆 起線 ※1	地文 + 微隆 起線 ※1	地文 + 微隆 起線 ※1	地文 + 微隆 起線 ※1	地文 + 微隆 起線 ※1	地文 + 微隆 起線 ※1	地文 + 微隆 起線 ※1	地文 + 微隆 起線 ※1	地文 + 微隆 起線 ※1	地文 + 微隆 起線 ※1	地文 + 微隆 起線 ※1	地文 + 微隆 起線 ※1	地文 + 微隆 起線 ※1	地文 + 微隆 起線 ※1	地文 + 微隆 起線 ※1	地文 + 微隆 起線 ※1	地文 + 微隆 起線 ※1	地文 + 微隆 起線 ※1	地文 + 微隆 起線 ※1	地文 + 微隆 起線 ※1	地文 + 微隆 起線 ※1	地文 + 微隆 起線 ※1	地文 + 微隆 起線 ※1	地文 + 微隆 起線 ※1	地文 + 微隆 起線 ※1	地文 + 微隆 起線 ※1	地文 + 微隆 起線 ※1	地文 + 微隆 起線 ※1	地文 + 微隆 起線 ※1	地文 + 微隆 起線 ※1	地文 + 微隆 起線 ※1	地文 + 微隆 起線 ※1	地文 + 微隆 起線 ※1	地文 + 微隆 起線 ※1	地文 + 微隆 起線 ※1	地文 + 微隆 起線 ※1	地文 + 微隆 起線 ※1	地文 + 微隆 起線 ※1	地文 + 微隆 起線 ※1	地文 + 微隆 起線 ※1	地文 + 微隆 起線 ※1	地文 + 微隆 起線 ※1	地文 + 微隆 起線 ※1	地文 + 微隆 起線 ※1	地文 + 微隆 起線 ※1	地文 + 微隆 起線 ※1	地文 + 微隆 起線 ※1	地文 + 微隆 起線 ※1	地文 + 微隆 起線 ※1	地文 + 微隆 起線 ※1	地文 + 微隆 起線 ※1	地文 + 微隆 起線 ※1	地文 + 微隆 起線 ※1	地文 + 微隆 起線 ※1	地文 + 微隆 起線 ※1	地文 + 微隆 起線 ※1	地文 + 微隆 起線 ※1	地文 + 微隆 起線 ※1	地文 + 微隆 起線 ※1	地文 + 微隆 起線 ※1	地文 + 微隆 起線 ※1	地文 + 微隆 起線 ※1	地文 + 微隆 起線 ※1	地文 + 微隆 起線 ※1	地文 + 微隆 起線 ※1	地文 + 微隆 起線 ※1	地文 + 微隆 起線 ※1	地文 + 微隆 起線 ※1	地文 + 微隆 起線 ※1	地文 + 微隆 起線 ※1	地文 + 微隆 起線 ※1	地文 + 微隆 起線 ※1	地文 + 微隆 起線 ※1	地文 + 微隆 起線 ※1	地文 + 微隆 起線 ※1	地文 + 微隆 起線 ※1	地文 + 微隆 起線 ※1	地文 + 微隆 起線 ※1	地文 + 微隆 起線 ※1	地文 + 微隆 起線 ※1	地文 + 微隆 起線 ※1	地文 + 微隆 起線 ※1	地文 + 微隆 起線 ※1	地文 + 微隆 起線 ※1	地文 + 微隆 起線 ※1	地文 + 微隆 起線 ※1	地文 + 微隆 起線 ※1	地文 + 微隆 起線 ※1	地文 + 微隆 起線 ※1	地文 + 微隆 起線 ※1	地文 + 微隆 起線 ※1	地文 + 微隆 起線 ※1	地文 + 微隆 起線 ※1	地文 + 微隆 起線 ※1	地文 + 微隆 起線 ※1	地文 + 微隆 起線 ※1	地文 + 微隆 起線 ※1	地文 + 微隆 起線 ※1	地文 + 微隆 起線 ※1	地文 + 微隆 起線 ※1	地文 + 微隆 起線 ※1	地文 + 微隆 起線 ※1	地文 + 微隆 起線 ※1	地文 + 微隆 起線 ※1	地文 + 微隆 起線 ※1	地文 + 微隆 起線 ※1	地文 + 微隆 起線 ※1	地文 + 微隆 起線 ※1	地文 + 微隆 起線 ※1	地文 + 微隆 起線 ※1	地文 + 微隆 起線 ※1	地文 + 微隆 起線 ※1	地文 + 微隆 起線 ※1	地文 + 微隆 起線 ※1	地文 + 微隆 起線 ※1	地文 + 微隆 起線 ※1	地文 + 微隆 起線 ※1	地文 + 微隆 起線 ※1	地文 + 微隆 起線 ※1	地文 + 微隆 起線 ※1	地文 + 微隆 起線 ※1	地文 + 微隆 起線 ※1	地文 + 微隆 起線 ※1	地文 + 微隆 起線 ※1	地文 + 微隆 起線 ※1	地文 + 微隆 起線 ※1	地文 + 微隆 起線 ※1	地文 + 微隆 起線 ※1	地文 + 微隆 起線 ※1	地文 + 微隆 起線 ※1	地文 + 微隆 起線 ※1	地文 + 微隆 起線 ※1	地文 + 微隆 起線 ※1	地文 + 微隆 起線 ※1	地文 + 微隆 起線 ※1	地文 + 微隆 起線 ※1	地文 + 微隆 起線 ※1	地文 + 微隆 起線 ※1	地文 + 微隆 起線 ※1	地文 + 微隆 起線 ※1	地文 + 微隆 起線 ※1	地文 + 微隆 起線 ※1	地文 + 微隆 起線 ※1	地文 + 微隆 起線 ※1	地文 + 微隆 起線 ※1	地文 + 微隆 起線 ※1	地文 + 微隆 起線 ※1	地文 + 微隆 起線 ※1	地文 + 微隆 起線 ※1	地文 + 微隆 起線 ※1	地文 + 微隆 起線 ※1	地文 + 微隆 起線 ※1	地文 + 微隆 起線 ※1	地文 + 微隆 起線 ※1	地文 + 微隆 起線 ※1	地文 + 微隆 起線 ※1	地文 + 微隆 起線 ※1	地文 + 微隆 起線 ※1	地文 + 微隆 起線 ※1	地文 + 微隆 起線 ※1	地文 + 微隆 起線 ※1	地文 + 微隆 起線 ※1	地文 + 微隆 起線 ※1	地文 + 微隆 起線 ※1	地文 + 微隆 起線 ※1	地文 + 微隆 起線 ※1	地文 + 微隆 起線 ※1	地文 + 微隆 起線 ※1	地文 + 微隆 起線 ※1

※1：微隆起線を欠くものもある

●：非他制的 (8割以上)    ○ (◎・△)：普遍的 (8割～2割) (優勢/劣勢の判断が可能の場合は◎/△で区別)    +：例外的 (2割以下)    ?：未確認・不明瞭だが存在する可能性が高いもの  
 ※◎・○ (◎・△)・+の判断は、道東3・4a・4bについてはトコロチャシ跡遺跡の定量的データを主な基準としているが、他の型式では定量的データが得られなため感覚的な判断に基づいている。

第36図 道東部後北C<sub>2</sub>・D式土器の属性一覧表

後北 C<sub>2</sub>・D 式土器の編年については、近年、各氏から細別案が提唱されている（大沼 1982b、石本 1984、大島 1991、上野 1992、鈴木 1998、佐藤 2000、鈴木 2003）。各氏の編年を対比すると第 35 図上のようになる（注 4）。なお各氏の編年の対象範囲は様々で、対象遺跡・地域を限定したもの（石本 1984、大島 1991、鈴木 1998）や道内の地域差の存在を暗示したものがある（大沼 1989・佐藤 2000、鈴木 2003）。ただし冒頭に述べたように、地域差の存在・内容が積極的・具体的に明言された例はない。

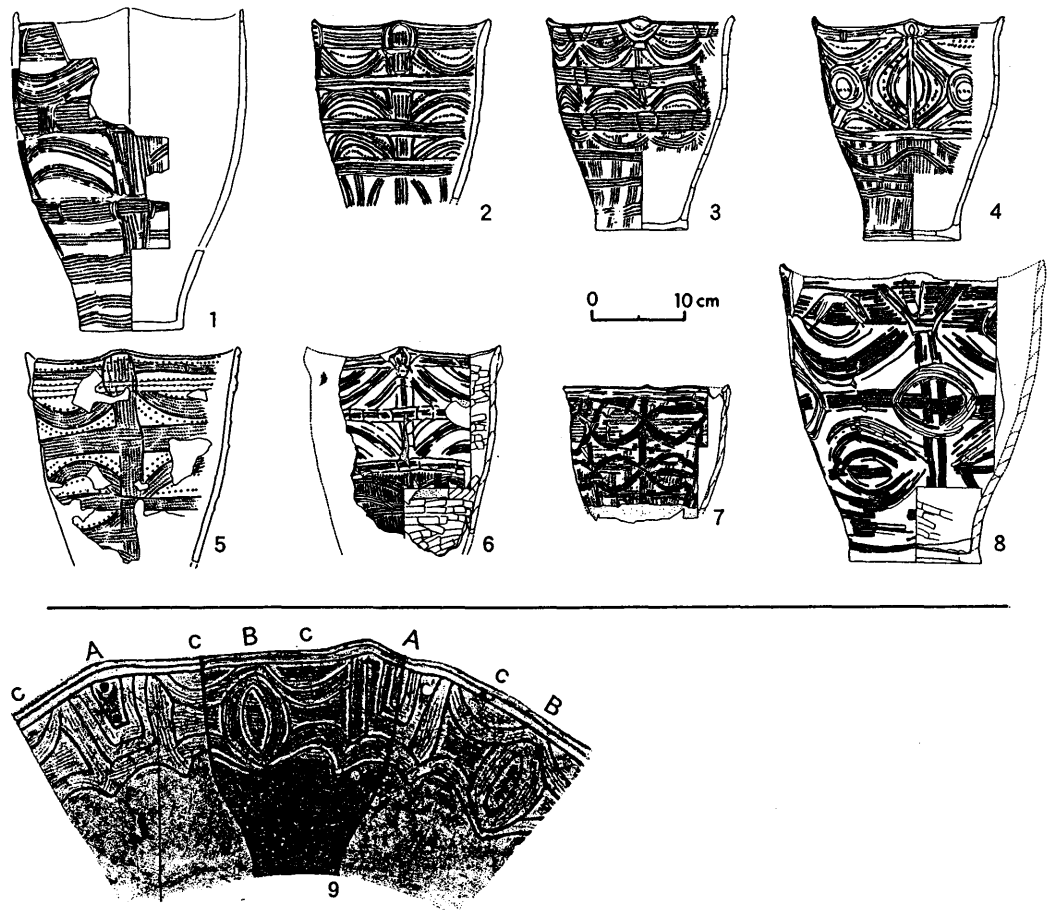
小論ではこれら各氏の編年の中から、鈴木信氏の編年（第 38 図～第 39 図）（注 5）を道央部編年として採用し、道東部編年との比較を行う。鈴木編年を採用する理由は次の 2 点である。一つは鈴木編年の対象地域が道央部に限定されているため地域差の比較対象として好適だからであり、もう一つは鈴木編年で指摘された型式変遷の着眼点が、筆者が指摘したそれに近い編年対比がしやすいからである。後者については地域差を考える上で重要なので、内容を確認しておこう。

かつて筆者は後北式土器群の変遷過程を文様割りつけ原理の観点から概観してまとめたことがある（熊木 1997）。具体的な図版の提示がなく不親切だったため意図が十分に伝わらなかったかもしれないが、そこで提起した型式変遷観が本章の基礎になっている。多少長くなるが引用しておこう。

「胴部文様の横方向の分割は、後北 A 式に認められる帯縄文や列点文などによる分割において確立し、続く後北 B 式では貼付文によって分割が行われ、後北 C<sub>1</sub> 式においてもっとも多段化して発達する。その後、後北 C<sub>2</sub>・D 式において衰退し、分割がみられなくなってゆく。これらの変遷は連続的にとらえられる。

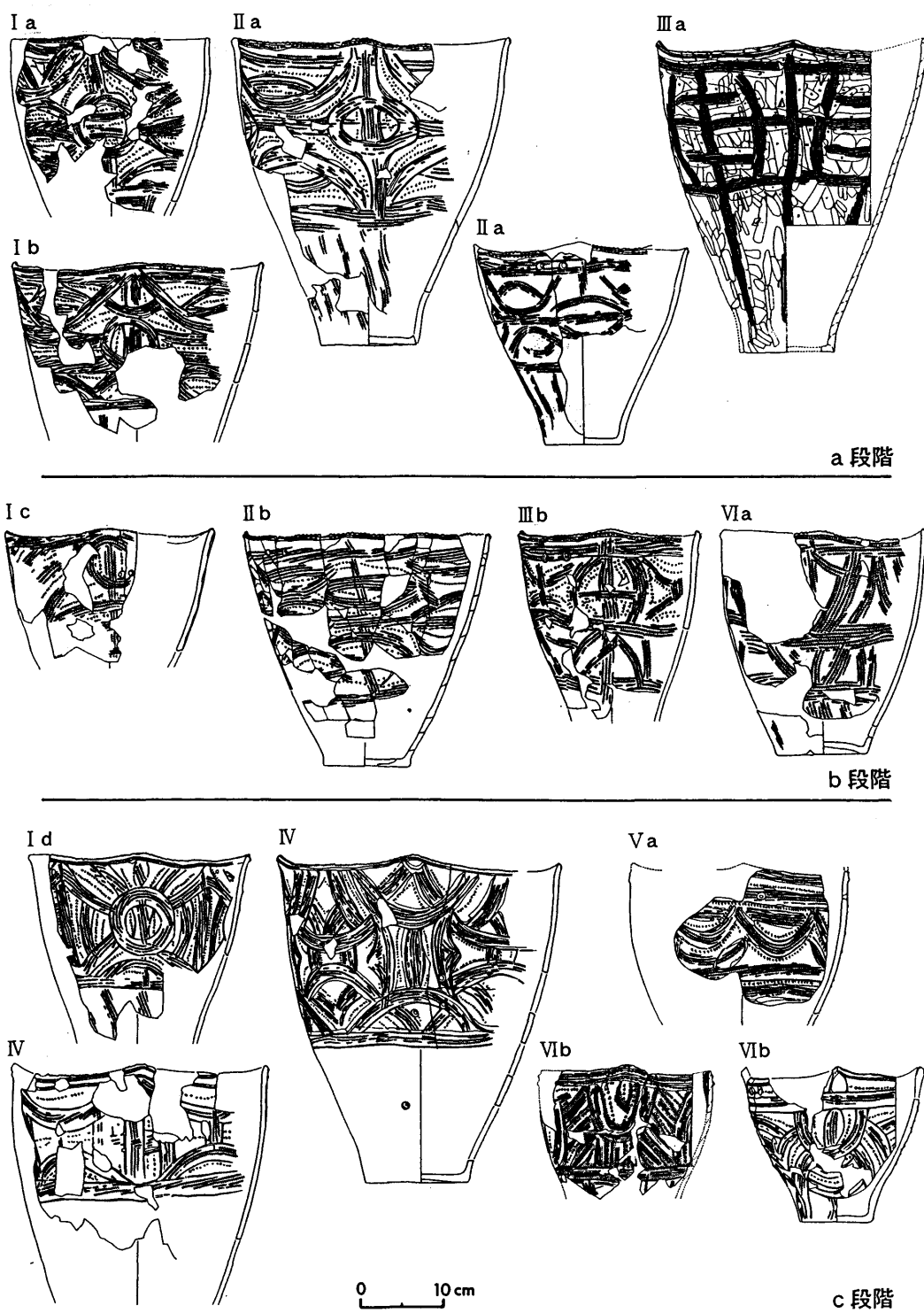
一方、胴部文様の縦方向の分割においては、続縄文初頭では分割がみられないが、後北 A 式前後から 4 単位の分割、後北 B 式前後から C<sub>1</sub> 式にかけて 8 単位や、8 分割に基づいた各単位が線対称の 4 単位の分割が認められるようになる。（中略）後北 C<sub>2</sub>・D 式の時期になると、これらの縦の単位の分割も衰退し、4 単位から、次第に縦の単位があいまいになり、ついには縦の単位もなくなり北大式へと続く。このように、後北式においては胴部文様の縦の割りつけ原理も、全体として連続的に変化する」（熊木 1997：31）

一方、鈴木氏の説明は以下の通りである。

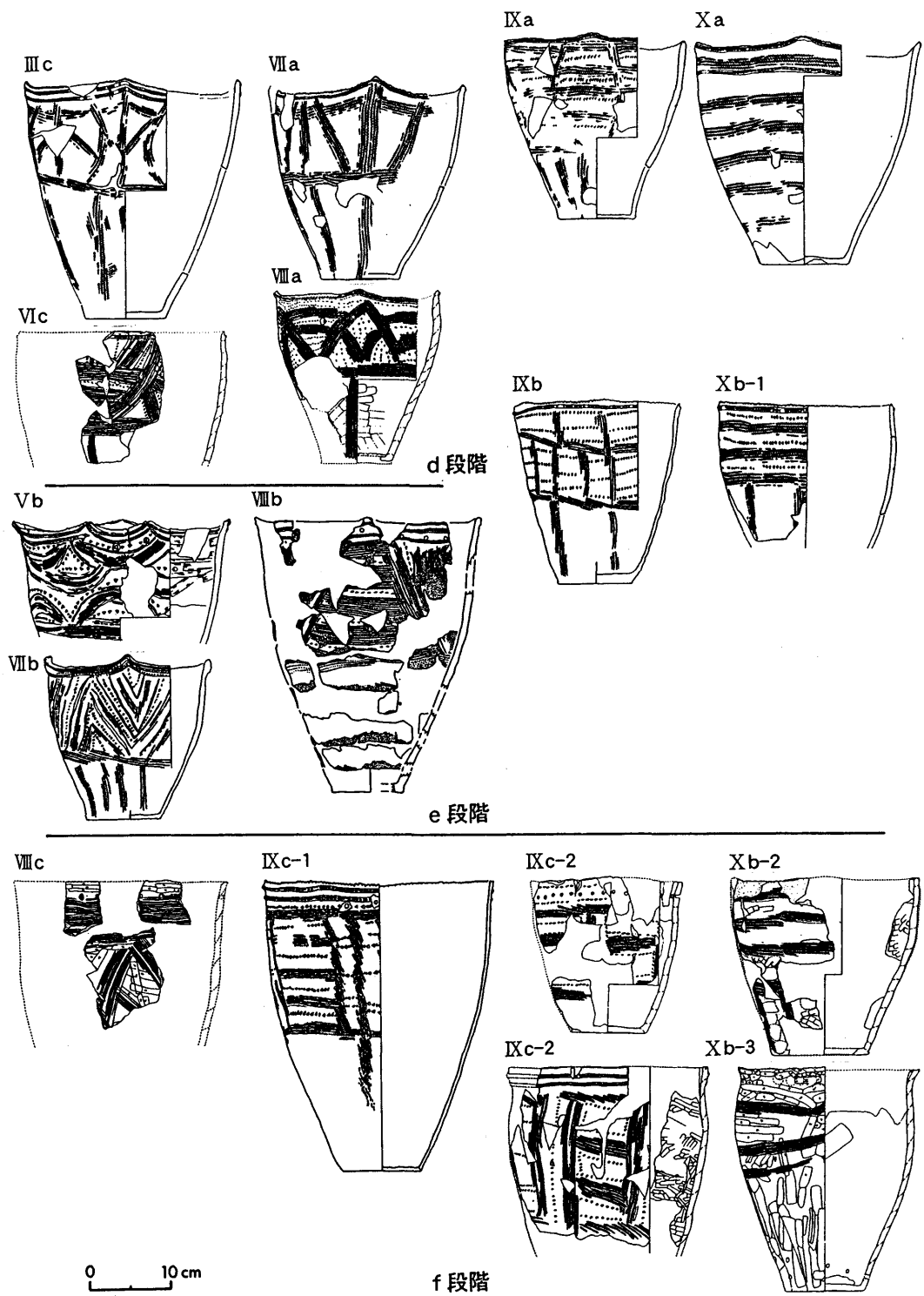


第 37 図 後北 C<sub>2</sub>・D 式 I 期の土器（上：道央部・道南部 下：南千島択捉島）

1：南川 2：瀬棚南川 3・4：聖山 5：柏原 18 6：フゴッペ洞窟 7・8：蘭島餅屋沢  
9：択捉島留別



第 38 図 鈴木信氏による道央部の編年 1



第 39 図 鈴木信氏による道央部の編年 2

「後北  $C_2 \cdot D$  式深鉢の文様構成の変化は、文様帯の縮減に第一の原因があり、平縁化に第二の原因がある。それは、区画文 II-1 が区画文 II-2 に変化して帯間が減少し、器面の分割が単純化することであり、区画文 I が波頂から下るため平縁になると文様割付けの基線となりえなくなることである」(鈴木 1998 : 335)

用語や分析手法の細かい点は異なるが、後北  $C_2 \cdot D$  式の変遷をとらえる際の視点は大筋で共通していることがわかるであろう。

## 2) 鈴木編年と道東部編年の対比

では実際に鈴木編年と道東部編年を、文様割りつけ原理の比較によって対比させてゆこう。

実は鈴木編年では、道東 1 式に併行する、後北  $C_2 \cdot D$  式初頭の時期が検討対象外とされているので、ここは鈴木氏以外の編年を参考にする。この時期に相当するのは石本省三氏の「前葉」、大沼忠春氏の「後北  $C_2 \cdot D$  式初め」、大島秀俊氏の「I 類」、佐藤剛氏の「IIc」である(第 37 図 1)(注 6)。文様割りつけ原理を見ると、全例とも縦は 4 ないし 8 本、横は 2 本以上の「対称軸」が認められ、幾何学的(線対称・重畳の構成)な 4 ないし 8 単位で文様が構成されている。これは後北  $C_1$  式の幾何学的文様構成に則ったものであるが、道東 1 式ではそれらの構成が道東部の伝統に引きずられてやや崩れているのに対し、道央部以南では後北  $C_1$  式の伝統がより強く保持されている点が特徴的である。

以後は鈴木編年との対比である。鈴木氏の a 段階・b 段階は横の「対称軸」線が施され文様帯の横の分割が明確な時期である(氏の用語で言えば「区画文 II-1」が施される段階)。道東 2 式に相当する。鈴木氏 c 段階は横の「対称軸」線は消滅するが(「区画文 II-2」)、線対称の軸となる「対称軸」自体は残存しており、線対称の単位文様が施されている段階である(「帯間 1-2 の上下 2 段」)。道東 3 式にほぼ相当しよう。d 段階以降は対比がやや難しい。d 段階・e 段階には縦の単位が存在している(「縦位帯上」や「波頂下」に「充填文 I」が施される)一方、f 段階では縦の単位が消滅しているので、その点からは d・e 段階が道東 4a 式に、f 段階が道東 4b 式・道東 5 式に対応するとみることができる。しかし道東部では縦の単位の崩壊が早く、道東 4a 式の段階で縦の単位がほとんど崩れているため対応する道央部・道東部の型式間で文様割りつけはかなり異なってくる。

細別型式の併行関係は以上である(第 35 図下)(注 7)。併行する型式間では、文様割りつけの上でも地域差は少なくないが、さらに地文や列点文のあり方、口唇部形態など、後述のように文様割りつけ以外の細かい属性についてもかなりの違いがみられる。これらの差は一見それほど大きくないようにも見えるから、一方の編年を誤りとみて解体し、もう一方を軸として強引に再

編成してしまうことも可能なように錯覚しがちである。しかし鈴木氏・筆者のいずれに合わせるにしろ、合わせられた方の地域の編年には大きな無理・矛盾が生じるであろうことはここまでの検討で明らかである。逆に言えば地域差を無視した強引な解釈の入り込む隙がないよう、地域毎の細別・型式変遷過程の検討を詳細かつ厳密に行ってきたわけである。

## 5. 地域差とその背景

### 1) 地域差における画期

前節で後北 C<sub>2</sub>・D 式土器の地域編年と併行関係を検討し、道央部-道東部間で文様割りつけに地域差が存在することを明らかにした。ここでは地域差の内容をより細かく検討し、地域差が時間的に変化してゆくことを明確にしておきたい。

道央部-道東部間で、「型式の類似度」が変化する時期—これは土器型式をめぐる地域間交渉の変化を反映していると考えられる—を画期として後北 C<sub>2</sub>・D 式土器の編年を再編成すると、3 期の全道的時期区分が設定できる（第 35 図下）。

#### I 期

大沼氏編年の「初め」・道東 1 式に相当する時期である。道央部—道東部の地域差が保たれながら、後北 C<sub>2</sub>・D 式土器が成立する時期といえる。

##### a) 文様割りつけ・文様単位

道央部以南では後北 C<sub>1</sub> 式の文様割りつけが強く保持されているのに対し、道東部では在地の伝統が残った結果割りつけがやや崩れており、地域差が明瞭である。具体的には、縦横の「対称軸」の不明瞭化、「主文様」・「副文様」の顕在化が道東 1 式の特徴である。

##### b) その他の属性

器形は口唇部断面が角張る例が見られることを含め地域差は少ないようである。文様要素では、道央部以南では胴部上半に地文が残る例が少なく、列点文を有する例が多い、などの差が認められる。

#### II 期

鈴木編年 a～c 段階・道東 2～3 式に相当する。道央部—道東部間の地域差が縮小し、類似度が強まる時期である。

##### a) 文様割りつけ・文様単位

道央部・道東部ともに主文様・副文様の区別がある 4 単位が支配的となり、地域差は縮小する。ただ、道東 3 式において平縁化や単位崩壊の兆候が認められるように、次の地域差拡大の萌芽はこの時期の後半段階にはもう現れてくる。

b) その他の属性

器形の分析は本章では行っていないが、実は深鉢の器形にも地域差があり（熊木 2001）、道央部ではやや幅広く、道東部ではやや細長い傾向が認められる。ただし全体としてはそれほど顕著な地域差は認められない。

Ⅲ期

鈴木編年 d～f 段階・道東 4a～5 式に相当する。道央部―道東部間の地域差が再び拡大する時期である。

a) 文様割りつけ・文様単位

道央部では 4 単位の口縁部突起・文様割りつけが終末期近くまでほぼ維持されるのに対し、道東部では平縁化・文様割りつけの「追いまわし」化がこの段階の初期にほぼ完了する。

b) その他の属性

最も顕著な差は胴部下半の地文と体部の列点文で、道央部では一部残存するが道東部ではほぼ消滅する。他に口唇直下の貼付文の様相にもやや差が見られ、道東部ではいち早く省略が進む。前段階に見られた器形の差は縮小する傾向にある。

2) 地域差の変遷とその背景

「斉一性を持って全道に拡がる」とされる後北 C<sub>2</sub>・D 式土器であるが、細かく地域差・時期差を検討した結果、初めに東西の地域差を引き継ぎながら成立し、その後地域差が縮小し、さらに再び拡大するという型式内部の展開が認められた。以上のような型式変化の背景はいかなるものであろうか。小論で明らかにした土器型式変遷から読みとることのできる土器製作者の様相について可能な限り描写してみたい。

a) 地域差縮小の背景（Ⅰ期～Ⅱ期）

Ⅰ期からⅡ期にかけての地域差縮小は、従来指摘されてきた「後北 C<sub>1</sub> 式から後北 C<sub>2</sub>・D 式土器にかけての分布域拡大」という流れに沿った現象であるといえよう。その背景は、道央からの情報・あるいは土器製作者そのものの流入が増大していった過程として一般的には解釈が可能であるが、ここでは以下の点に着目しておきたい。

まず 1 点は、地域差の縮小が段階を追って進行している、ということである。すでに指摘した



ように、後北式の道東部（網走地域）への拡大は、少なくとも3段階を経て行われている。具体的には、後北C<sub>1</sub>式の段階で後北式の直接的な影響が顕在化して2系統の土器が併存する状況が生まれ（後北C<sub>1</sub>式・宇津内ⅡbⅡ式）、続いて2系統は融合して地域色のある道東1式が成立し（後北C<sub>2</sub>・D式Ⅰ期）、その後に地域差自体がほぼ解消される（同Ⅱ期）という段階を踏んでいる。これは、道央部からの情報ないし土器製作者そのもの（注8）を受け入れる道東部の側が、彼我の違いを意識しながら自らの伝統との間で調整をはかり、徐々に道央の文様割りつけ原理を受け入れていく過程とみなすことができる。だとすればこの時期の道東部では道央部からの影響が強まるのは確かであるが、特に網走地域においては、道央部の土器製作集団が在地の集団と丸ごと入れ替わってしまう、というような急激な人間集団の交替・侵入はなかったとみることができよう。

次に注目すべきは、大沼氏も指摘するように（大沼1989）、この時期の道東部の遺跡数・資料数が少ない点である。前述のとおり道東1式・2式の資料が量的にある程度まとまって出土したのは現状では常呂町常呂川河口部遺跡・羅臼町相泊遺跡のみであり、この時期の遺跡の規模・土器出土量は極端に少ない。さらに道東部では、道東1式・2式前後の時期に型式の継続性が絶たれている遺跡が多い点に注目すべきである。例えば常呂町岐阜第二遺跡（藤本編1972、藤本・宇田川編1977、藤本・宇田川編1982）、常呂町岐阜第三遺跡（藤本編1977）、斜里町オシヤマツブ川遺跡、羅臼町幾田遺跡（宇田川編1975・涌坂編1989）では、宇津内式・下田ノ沢式と道東4a式以後の後北C<sub>2</sub>・D式がまとまって出土しているが、道東1式・2式の資料は皆無である。本章で検討したトコロチャシ跡遺跡でもやはり道東1式・2式はない。一方、常呂町栄浦第一遺跡（藤本編1985・武田編1995）、常呂町トコロチャシ南尾根遺跡（藤本編1976、武田編1986）や前述の常呂川河口遺跡、相泊遺跡では多少なりとも継続性が認められるものの、道東1式・2式の出土量は前後する型式と比較して極端に少ない。

このように遺跡数・遺跡規模・土器出土量の全てが減少するという現象から想定できることの一つは、人口の減少であろう（藤本1988:62）。もちろん、遺跡数と人口の相関関係については型式毎の継続時間や居住・生業形態等の複雑な問題があり軽々に論じられるものではないが（今村1977・1997）、ここまでの厳密な細分型式の検討によってこの「人口減少」に該当する時期にも一定の時間幅が与えられるだろうし、遺跡数・遺跡規模・土器出土量のいずれもが少ない点は人口減少を示すそれなりの根拠となりうるだろう。

実は筆者は、人口の減少を契機としてこの時期の道東部に後北式土器の分布が拡大してくるのではないかと推測している（注9）。ただしこれはまだ思いつき程度の発想であり、具体的な因果関係の解明など今後の課題が多い。

b) 地域差拡大の背景 (Ⅲ期)

Ⅱ期後半にすでに萌芽的に見られた地域差は、Ⅲ期で顕在化する。具体的には、道東部でいち早く文様割りつけ原理が崩れ、文様要素の省略が進む。これは、いったんは受け入れられた道央部の文様割りつけ原理が道東には定着しなかったことを意味している。文様要素の省略と併せて、この時期には道央部からの文様に関する「情報の流れ」ないしある種の「規制」が弱まったと解釈できよう。ただしそのことによって道東部の文様は無秩序かつ急速な崩壊を迎えるわけではなく、変化は段階的に進み、その間道東部内では型式学的な統一性が保たれている。道央部からの影響減少の背景として、道央部―道東部間で人的交流の停滞があったかどうかまでは知り得ないが、道東部内部では交流が保たれつつ、地域差が醸成していったという説明は可能であろう。道東部でこの時期に遺跡数が増加することは先に述べたが、それを手がかりに想像を逞しくするならば、この時期における道央部からの影響の減少は、道東部内部での人口増加とそれに伴う道東部内の交流活発化と関連している、という解釈が可能かもしれない。

## 6. 小結

### 1) 千島列島の位置づけについて

後北  $C_2 \cdot D$  式土器といえば東北地方への「南下」現象に注目が集まりがちであるが、本章のように道央部―道東部の地域差を考える際には、南千島地域に目を向け、道東部とのつながりを考えることも重要である。例として南千島択捉島留別出土の、道東 1 式相当の土器 (第 37 図 9) が持つ意義を指摘しておこう。この土器の文様単位は後北式的に解釈すると図のように「主文様」 $A \cdot B$  各 2 単位とつなぎの「副文様」 $c$  が 4 単位となるが、実はこれは宇津内式・下田ノ沢式の SF (Side-Front) Type (熊木 1997) とほぼ同じ割りつけである。主文様  $A$  の意匠が宇津内式・下田ノ沢式的であることも含め、この土器は網走地域の道東 1 式よりもさらに宇津内式・下田ノ沢式の伝統を強く残すものといえよう。これは先立つ後北  $C_1$  式併行期に認められる、網走地域をいわば「緩衝地帯」とした道央部―道東部網走地域―南千島地域という地域間交渉の構造 (本論第 2 章参照) が、少なくとも後北  $C_2 \cdot D$  式 I 期まで継続していることを示している。すなわち、道央部―道東部という地域差は北海道内で完結しているわけではなく、道央部―道東部―南千島という構図で理解すべきものなのである (宇田川 2001)。この第 37 図 9 以外にも南千島地域からは後北  $C_2 \cdot D$  式土器が多数出土しており (杉浦 1999 に詳しい)、なかには道東部ともかなり特徴を異にする土器も認められるようである。千島列島を続縄文文化のひとつの地域圏として検討してゆく必要性が痛感されよう。現状ではこれ以上の分析は無理であるが、今後の課題として

指摘しておきたい。

## 2) 後北 C<sub>2</sub>・D 式土器の地域差とその意義

後北 C<sub>2</sub>・D 式土器はこれまで全道的な「斉一性」を持つとされてきたが、特に文様割りつけ原理の差に基づいて細かく分析してみると、道央部―道東部間では地域差が存在することが明らかになった。ただし、後北 C<sub>2</sub>・D 式における地域差の内容は、続縄文前半期における道央部―道東部間の地域差（C<sub>1</sub> 式以前の後北式土器群と宇津内式土器の差）とは質的に異なるものであることは論を待たない。具体的に言うと、続縄文前半期の道央部―道東部間では互いに型式学的な排他性が強く土器型式差は明瞭であるが、後北 C<sub>2</sub>・D 式では文様割りつけ原理以外の特徴は共通性が高く、一見しただけではわからないほど類似度が強い（注 10）。このように続縄文前半期と後半期では土器の「地域差」に質的な差異が認められるのであって、本章での指摘によって、続縄文土器における地域色豊かな前半期／斉一性の強い後半期、という大局的な構図が揺らぐわけではもちろんない。

では、本章で後北 C<sub>2</sub>・D 式の地域差を指摘してきた意義は何であろうか。一つは、後北 C<sub>2</sub>・D 式期における地域間交渉の具体的な実態を明らかにした点にあらう。結果として少なくとも 3 段階の変化があることを明らかにした。重要な点はすでに述べたように、地域差の解消は段階を追って進むことと、その後再び地域差が拡大することにある。縄文時代以来続く伝統的な西・東の土器型式の境界（藤本 1979、瀬川 1999 など）を完全に解消し、全道一円で同レベルのコミュニケーションを維持するのは容易ではなかったことが理解されよう。

本章の意義の二つめは、続縄文土器の型式学的変化を把握する上での、方法論的な成果である。前章までに指摘してきたが、続縄文土器における通時・共時の関係を構造的に把握するために最も有効な手段の一つに、文様割りつけ原理の検討がある。本章の中では、文様要素等が他系統の影響を受けて変化する一方で、文様割りつけ原理は在地の伝統を維持する事例（後北 C<sub>2</sub>・D（道東 1）式）や、一旦は受け入れられた他系統の文様割りつけ原理が、定着せずに崩壊してしまう例（後北 C<sub>2</sub>・D（道東 4a）式以後）を指摘した。ここからは、後北 C<sub>2</sub>・D 式においては文様割りつけ原理は最も変化しにくい、すなわち異系統間で伝習されにくい特徴の一つであることがわかる。すでに前章までに、宇津内式や後北式の文様割りつけ原理が強い系統性を保ちつつ変化していくことを指摘しておいたが、本章でもそのことを追認する結果となった。土器文様変化の一般的な法則性や、「土器の属性間に質的な差異を見いだそうとする」（石井 1997a：22）方法論を吟味してゆく上で、小論の成果が有意義なものとなるであろう。

注

- (1) 第 30 図 2 の二又の鋸歯文 A' を A の変異ではなく副文様としてみた場合、2 (4A+A') という 2 単位 (左半周/右半周) の割りつけが成り立つ可能性もあるが、欠損部分が多く確認できない。ここでは本文のように「追いまわし」ととらえておく。
- (2) 例外的な 1 点は注口付き鉢の文様に準じたもので、主文様・副文様の別がある 2+2 単位である (熊木 2001 : Fig.83-1)。
- (3) 口唇直下貼付文の刻み目について、かつて筆者は八戸市出土の注口付き鉢を資料紹介した際、「口唇下の隆起線に刻みがない点」を北大 I 式の特徴とした (熊木 2000e : 10)。しかしながら言葉に足りない点があったので補遺訂正したい。本文中にあるように、刻みのない隆起線は後北 C<sub>2</sub>・D 式 (道東 4b 式・道東 5 式) においてすでに出現しているので、先の資料紹介での説明は不適切であった。ただし問題の八戸市資料の隆起線は、これら道東 4b 式・道東 5 式にみられる細めの「微隆起線」とはやや異なり、北大 I 式の口縁部等に特徴的にみられる、「やや太めの」平行隆起線に近い特徴を有している。よって結果として、この八戸市資料が北大 I 式であるという認識自体に変更はない。なおこの八戸市資料は、厚手の器厚や縄文の施文技法からみても北大 I 式に位置づけるのが妥当であると考えている。
- (4) 編年対比は次のように行った。まず石本氏・上野氏・佐藤氏については氏らが自ら大沼氏編年との対比を行っているので参照した。大島氏と太沼氏の対比は鈴木氏の見解に従っている。それ以外の、鈴木氏と上野氏、佐藤氏と鈴木氏の対比については氏らが提示した図版を基に筆者が行った。誤りがあるとなれば全て筆者の責任である。
- (5) 鈴木氏の編年には 1998 年発表のものと 2003 年発表のものがあるが、後北 C<sub>2</sub>・D 式の編年に関する部分についてはほぼ同じなので、ここでは本章論文初出 (熊木 2001) 当時に引用した 1998 年発表の方をそのまま採用した。
- (6) 道央部の資料数が少ないことからここでは道南部の資料を多く用いた。よってこの段階の編年対比は、道央部-道東部間の対比という意味では検討の余地を残している。
- (7) なお筆者と鈴木氏の編年で最も考え方が異なるのは円形刺突文に対する考え方である。鈴木氏は e 段階後半から円形刺突文が施され、施されない土器と一部併存するとする。一方筆者は円形刺突文の無・有で道東 4 式・5 式を細別している。北大 I 式土器でも円形刺突文が施されない例がある点を考慮に入れば、鈴木氏の主張にも一定の根拠があるといえよう (鈴木 2003)。現段階ではまとまった資料が少ないので、今後の資料の増加を待って判断したい。
- (8) 広範囲かつ厳密な観察は行っていないが、網走地域においては後北 C<sub>1</sub> 式・宇津内 II b II 式の段階ですでに両者の間に文様施文技法上の顕著な差は無くなっている (第 1 章参照)。だとすれば、以後の「地域差の縮小 (斉一化)」が土器製作者の移動を伴わずに、「みようみまね」 (林 1990) による模倣によってのみなされたとみるのも論理的には可能であろう。しかし「斉一化」の実態は道央部からの一方的な影響増大という性格が強く、その背景には道央部からの土器製作者の流入があった可能性が高いと筆者は

考えている。

(9) ただし、道央部でも本章で言う I 期の資料は極端に少ないようであり、その点は検討の余地を残している。

(10) このように、土器型式（様式）の地域差に各種のレベル差があることについては田中良之・松永幸男の両氏や都出比呂志氏の詳しい指摘がある（田中・松永 1984、都出 1989）。